

ト工 2T-45



399.2
Ki68

兵法
孫子

北村佳逸著
立命館出版部



2



0058281-000

399.2-Ki68-U

兵法孫子

北村佳逸・著

立命館出版部

昭和17

AJI

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第67条の規定に基づき、平成12年3月23付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもので

932
10

著者の私語

「老子解説」「孟子解説」「孔子解説」「墨子解説」「論語解説」に喝采を與へられた讀書界は、同じ著者の「兵法孫子」も拍手のうち受取つてくださると期待する。讀まれても讀まれなくともいい、知己を百年に待つといった瘠我慢はいはないどころか、次に出版するであらう新版兵法書も豫め推輓をお願ひして置く。この著者割合に商賣氣がある。

老子と孟子と孫子とは虚無と仁義と功利と三角形の尖端が別々の方向を指示するやうに漢民族の一位三體の理想を代表するから老、孟から順序として孫子に及んだまでである。

老子は何を考へていゝかを考へさせる、孟子は何を爲すべきかを教へる、孫子は斯くせよと號令する。指示する。指示する指をみるのではない。指の指さす方角を見るのだ。東洋に生れてこの三大哲學を讀まない人は氣の毒な人である。

白人間にさへ支那古典研究熱は高まつてゐる、孫子の言葉の底を流れる果敢鋭角な男性的闘志は、にやけた人間に勇氣をつけ、勇氣のある人物を更に飛躍させ、一字一句ひしりと胸にこたへて、

科學頭を冷やりとさせる。僕らは白人に比して地理的種族的文字的に研究に便利を持つ、海の遠い彼方へのみ書物があるやうに思つて思想界の浮浪者に終るのは、これも氣の毒な人である。

軟性正義派の主張する「平和は道德」から「戦敗も仁義」となり、それを追跡すれば「亡國も成行き」となりさうだが、この道德はまやかし物である。正義を支柱として眞の力が立つのが道德の常道であるが、力の行くところに道德がついてくる時代には倫理觀念にも少しの修正を加へて、いつくるか、あてにならない道德が常道に復歸する時代を待たねばならぬ。そんな時代があるか、ないか。天に口なし、人が勝手にいふ。二つに一つはあたる事だ。

孫子の註釋は大てい讀破したが、どれも氣に喰はなかつた。人の講義を焼き直したものでないから思ふまゝに解説して鑄型がない、僕は鍛冶職を學ばなかつた。僕には僕一流の見解がある。

歐文は書架から亂抽して解説を助けた。

柳生流の秘傳が澤庵和尚から出で、孫子の戦争哲學が老子から出で、青い瓢箪から勇ましい春駒が出で、退屈から欠伸が出で、切られたら血が出で、兵法は虚から實が出る。

孫子の読み方と 日常生活への應用

軍形篇に「勝兵は先づ勝つて後に戦を求めぬ」(七六頁)とあるが、勝つてから戦争をするとは何であるか。

戦争とは勝敗を定める形式であつて、戦争する前に勝つてゐないやうな戦争は國運を賭けたばかりである。將軍とばくち打ちとの差はそこにある。

兵法學者は世の中のことは何でも戦争とみて戦時生活をする、そして日々に勝ちつゞけて行く。こゝに議會を開くとする、株主總會を開くとしても同じことであるが、議案を挾んで政府と議員との論戦が開かれる。

各派交渉會で通過する見透しがついてから政府案が上程される、日程に上る前に政府がすでに勝つてゐるのである。勝つてから後に戦争が開始されたのであるから議事は勝つた記録を残すだけの技術に過ぎぬ。「通過するか」「しないか」議會を開いてみなければわからぬやうな目先のみえぬ内

闇では輔弼の責に任ぜられない。

もう一つ、商賣でいほう。賣り出す前から十分に購買慾を煽揚して大衆が買ひたくてならぬやうにする。時好に投じるとか、生活に絶対必要とか、何かの特徴をつけるも一方法である。

買ひたくてならぬとは買手がもう参つてゐるのである、そこで商品に相當の値をつけて並べて置けば黙つてゐても買つて行く。一方的に決定された賣値段のまゝで買つた方は負けてゐるのであるが、「負けた」と自覺しないで満足して買つて歸る。負けても負けたと思はせないやうな勝ち方をすれば、負けたものは又た負けにくるから商賣は繁昌する。

負けない買手に賣らうとすれば値切られて賣手の方が負ける、無理に勝つても、買手が負けたと知つたら復讐心が起つて土地を占領しても鎮撫工作に後の悩みが残る。

僕はこんな風に兵法を講じてゐる、また新聞の論説を書くにも兵法の利用を忘れぬ。

兵法の奥義と禪の悟入とは同一である、兵法を玩味した人はこの世を面白く暮して行けるだけでも一生のとくで、山奥に隱栖しなくとも都市に住んでゐても禪味が味へて、夏でも涼風が吹くのは冷房装置のわざでない。

わが著「孫子解説」も版を重ねて社會に相當寄與したはずである、今度また兵法孫子を發行する

ことになり、いまこの文を書いてゐるときわが國は大東亞戰爭に連戦連勝して亞細亞の諸民族を糾合して立ち、世界新秩序の建設に著々その功を收めてゐる。吾々は一生の間に何度戰爭を體驗するとも知れないし、また平和生活にも兵法は利用できるのだから、どんな時代でも兵法無用のときはないといふ結論に、どの途から行つても落着いてくる。

孫子 SUN TZU

北村佳逸 著

始計

第 1 SHIH CHI (Preliminary Reckoning) I.

始計とは戦争の設計である、この構圖によつて戦争が構成され勝利の基礎となる。

孫子曰、兵者國之大事。死生之地、存亡之道也。不可不察也。

孫子曰ク兵ハ國ノ大事。死生ノ地、存亡ノ道ナリ。察セザルベカラズ。

戦は國家の重大事件である。軍人としては作戦計畫の良否が直ちに死と生との運命を定める分水嶺であり、國家としては興廢の岐路に置かれる。(戦争は濫費であり大なる破壊である、濫費の後に來る緊縮調整、破壊の次に起るべき再組織の責任まで考慮の中に入れたら、容易に戦端を開かるべきものではない) 深く考察してから始めねばならぬ。

劈頭に大炬火を點じて綱領を示す。この筆法は老子に同じ。不用意にこれを受取れば孫子の平凡に驚くであらうが彼れは野蠻人のする感情的喧嘩を説くのではない、極めて組織的な理詰めで推して行くので、彼氏は悠然として筆を進め一字一句一節と次序を追つて戦争哲理を組み立てて行く。この節は戦の定石から始まり徐々にその變化に及ぶ。老子に「常を知るのが明。常法を知らないものは妄動してその結果は必らず悪い。常法を知れば寛容になり、その延長は原則を體得するに到り、死ぬまで危いことがない。」この安全第一主義が篇末まで脈をうつてゐる。わかり切つた安全な道理が實際に於いて行はれ難いのは、わかり切つてゐない證據である、個人にあつて何でもない口論から喧嘩へ、喧嘩から刃傷へと深入りし、時としては復讐の遺産を子孫にまで相續させる。個人の累集である國家でもその通り、群集心理に誤られて思慮深い將軍でも亢奮して全軍を死地に投ずることが多い、だから孫子は開卷第一節において老教官が青年將校に訓示するやうな口調で、「不可不察」と内省を促した。

文の構成は——既知の一判断である「兵者國之大事」と大前提し、(この一句は外延が最も大きいから大概念といひ)、この起手と「不可不察也」の結尾とを關聯させるたる「死生之地」と「存亡之道」との雙關を媒介概念とし、既知の判断(大事)から、他の既知の判断(死生、存亡)の助

けによつて「不可不察」といふ未知の新判断に導く推理であつて三段論法(推測式)である。

「兵」こゝでは戦争を意味するが漢文では兵の字を多様に使ふ。(一)軍隊。用例、抗兵相加。

(二)軍火(兵器)。用例、棄甲曳兵走。(三)兵丁(兵士)。用例、募兵。(四)軍事。用例、

通曉於兵。(五)打伐(戦争)。用例、開兵端。(六)武力の支配、用例、兵權。(七)軍略(兵法)。

用例、謂兵者。(八)戰鬥力(兵力)。用例、兵強却敗。「國」領土、住民、政府の三つが

國の構成要素で(そのどれかを缺いたものを擬國家といふ)換言すれば一定の地域内に人類が集合し、その上に統制力を有する政府の存在を要する。この本でいふ國とは周王が封じた王族又は功勞者が天子の強制力のないのを倖ひとして勝手に弱國を兼併し、身は諸侯であつても國王と僭稱し、その領土を國と名づけてゐる變則的な國家である。「死生之地」この句に用ひられた地の字は極めて微妙な措字で適當な譯字が見當らぬ、なぜ、こんな字を用ひたか、これは次の句の道に對立せしめ文を美しくするための借字で、古文には類例が多い、義から云へば死生之道存亡之道、又は死生存亡之道である。

故、經之以五事、校之以計、而索其情。一曰道、二曰天、三曰地、四曰將、五曰法。

故ニコレヲ經スルニ五事ヲ以テシ、コレヲ校ヘテ以テ計リ、而シテソノ情ヲ索ム。一ニ曰ク道、二ニ曰ク天、三ニ曰ク地、四ニ曰ク將、五ニ曰ク法。

故に之れ（兵）を經（經始、計畫）するに次に述べる五事を基調とし、これを校（比較）計畫して彼（敵）我（味方）の實情を考へ索める、五事とは道、天、地、將、法（この五つは次節に詳説がある）。（基本概念から説いて徐々に戦争行政の各論に入る）。

「經」設計、戰鬪企畫。詩經、大雅、經始靈臺經之營之。「校」去聲でチヤオと訓めば校と較とは同聲同音の動詞となり比較の意となる。シヤオと發音すれば學校、將校の如き名詞となる。在來の訓解は「之を校するに計を以てす」で計を抽象名詞とするが、この書は計を動詞四段活用形として取扱つた。「索」は上平にスアと發音せしめ動詞二段活終止形として模索、搜、求の意とする。（蕭索、索莫などの形容詞又は副詞には去聲、音スウ）。「情」情偽の情で偽に對立する、實情、真相。

道者令民與上同意也。故可與之死可與之生而民不畏危。

道トハ民ヲシテ上ト意ヲ同ジクセシムル也。故ニコレト死スベク、コレト生クベク、民危キヲ

畏レズ。

（前節を承けて五事を分解叙述する）五事の第一項である道とは何ぞ？ 國民をして君主と心を一致せしめる。故に彼らは君のために生死を共にし、國難を濟ふに當つて危険を畏れない。それが道である。

「道」儒教又は道教のいふ道ではなく、戦争道德である。忠君、義烈、祖國愛の意氣、犠牲的精神などは戦勝の基礎である、そんな武士道の要素の總和を兵法で道といふ。國家の總力を擧げて戦ふ場合に國民の意思が緊密に政府の方針につながつて動き、國家と存亡榮辱を共にする覺悟が定れば民は死を恐れないが、一時の危きに狼狽して舉措を失ふやうでは終局の勝利は望めない、國民が政府を信賴せざれば舉國一致體制は整はない。

天者、陰陽、寒暑、時制也。

天トハ陰陽寒暑ノ時制ナリ。

五事の第二である天と稱するのは陰陽（吉凶）寒暑（季節）の時を利用して勢を制し作戰に力づけることである。

「陰陽」晴雨と解してもいいが、易占、方位などで吉凶を定めることで、軍人は割合に御幣をかづくものである。楠正成が「大將軍星が西に現はれてゐる時に關東勢が上方に押寄せてくるのは天に背くものである」といつて部下を激勵し（楠公記）、平重盛が「土地は平安であり年號は平治であり吾らは平氏で、天は三つの吉兆を示したまふ」と後騎に力づけた（平治物語）、この類例は甚だ多い、鬼門に向つて攻めるなどは士氣を沮喪せしめる。かやうな信仰は古代のみに存しない、ピルチングの屋上に祠を建て、飛行家が身に護符をつけ、自動車の初乗に神詣でをするなど、東洋ばかりでなく、どの國にも前兆説はある、正信であらうが迷信であらうが強ひてこれに逆はないで良將はその心理を利用する。論語、怪力亂神を語らなかつた孔子でも厄穢やくたいの式には歳越しに郷人とともに臨席された。「寒暑」司馬法に冬夏は兵を興さずとあるが、防寒防疫の施設が不十分な時代は極寒酷暑を避けたもので、冬夏の戦は戦死者より病死者の多きを常とする。科學の進んだ現代でもまだ天候を征服するに到らぬ。滿洲建國に、馬賊あがりの烏合の衆を率ゐた馬占山が嚴冬に北滿に出沒してこれを追討する日滿聯合軍は大に惱まされた。彼らは沼澤に密林に栗鼠のやうに逃げ廻つて、氣候中和の地に育つた日本軍は、たとひ飛行機の援助があつても彼らを掃蕩するは容易でなかつた。雨雪による道路の泥濘と濃霧低雲のための展望の妨害が、追撃の困難なだけそれだけ逃亡者

には逃亡力を加へた。日本の對外戦は多く寒地で行はれ、氷雪のため露營が困難となり防寒具のため行動の敏活を缺き、水潦が行軍を妨げ、溫食を要するための炊事の煩累があり日が短いから能率が學りにくいなどの不利益が計算せられる。「時制」四季、風、雨、雲、霧、天體の動き、その他の現象を總括していふ。

獨ソ戦においてソ聯は冬將軍の援助を恃んだ、ナポレオンもロシアに負けずして零下四十度の冬將軍に負けた、科學の發達をもつて誇るドイツ軍もモスクワを距る五十キロまで追つたが、寒氣を避けて休戦した。寒暑の氣候は土着人を利するが、侵入者には不便である、墨子兵法は防禦主義であるに反して孫子は攻撃主義であるから氣候に對して敏感でこれを五事の中に加へた。

地者、遠近、險易、廣狹、死生也。

地トハ遠近、險易、廣狹、死生ナリ。

地とは、根據地から戰場までの遠近、戦地の險隘と平坦。戦線の延長の廣狹。陣地に活路ありや。退却もできない袋地なりや。それ等の地理による作戦の研究である。

孫子は道（上下一致）を第一とし、次に天候、次に地理と順序づけたが、孟子は道（人和）、地

利、天時とした。戦争と地理とは不可離の関係にある、すでに天候を考へたら次に地理に及ぶは順序である（森林草叢を「生」といひ、不毛の地を「死」とする説は後章に詳述する）

將者、智、信、仁、勇、嚴也。

將トハ智、信、仁、勇、嚴ナリ

五事の第四項に將と稱するは智、信、仁、勇、嚴の五要素を兼備せねばならぬといふ意味である。古代からの基本道徳は仁義禮智信であつたがその中から義と禮とを抜いて勇嚴を代置し、仁智信の順位を智信仁と變へたのは深き考慮の後に決したことと思はれる。

將たる人格構成要素の中から何故に義を省いたか著者は惑ふ。泥棒にも親分子分の中に義が確立しなかつたら大盜とはなれないと莊子はいふ。第一次歐洲大戰にドイツは祖國のために死ぬと標語し、アメリカは正義のために参戦せよと叫んだ。義は士氣を振作せしめるに最も効果的であるから嚴を去つても義を忘れてはならぬ。たゞ信の中に義が含蓄されてあると解すれば強ひて争はないが、義の抜けた戦争は時代の大墮落である。孟子は、春秋に義の戦はなかつた、といつた。

孫子は老莊系なら吳子は孔孟派といへる。老子は義を輕んじ禮を侮つたが、孫子は主將五徳の中

から飯の中に砂が交つてゐた時のやうに、禮と義との砂を惜氣もなく棄て、しまつた。禮は軍律の基礎である、それをオミットしてどうなる。嚴の中に禮を含蓄してゐるかも知れないが、禮は他家へ食客となるべき寄生物でなく義とともに道徳の立派な嫡出である。この二つを特筆大書しなければ用兵の意義が弱い。「吳子」國家を制し軍政を治めるには先づ軍人に教へるに禮を以てし、これを激勵するに義を以てし、卑怯な行動は武士としての恥辱であることを知らしめる。「凡制國治軍必教之以禮、勵之以義、使有恥也。」亂暴を膺懲するのが義。兵、兵の多數を持つて弱國を攻めるのが強兵、腹立ちまぎれに攻め立てるのが剛兵、國際間の禮儀を無視し利益を目的とするのが暴兵、國政は亂脈で國民は貧乏してゐるのもかまはず動員令を下すのが逆兵。「禁暴救亂曰義、恃衆以伐曰彊、因怒興師曰剛、棄禮貪利曰暴、國亂人疲舉事動衆曰逆。孫子は哲理に於いては兵法家の群を抜くが道徳觀念は吳子より稀薄である。と、それは著書の上へのみいふことで、吳子は功利に急に、妻を棄て、顧みなかつた残忍な性格者であり、これに反して孫子は功名心に淡く、哲學者の氣品のある景慕すべき人格者であつた。兩者とも二重性格を持つてゐた。

「智」道徳的には仁、信、智、勇、嚴とすべきであるが孫子は智を第一順位に置いた。智とは戰術的技巧の外に常識をも機智をも含む。戦は勝負事であるが兵卒は基石のやうに冷たいものでなく血氣を沸

かせて常軌を失ふこともあり、敵の出やうで機に應じて策動せねばならないから大局の決するは一に將の智に待つ。敵の術中に陥つた時は特に冷靜な智の判断を要する。「信」信賞必罰の信で、賞罰を誤らぬことも信であるが、上は君主の信任を得、下は國民の信頼を失はぬことも將帥の資格條件であらう。「論語」食料の充足、軍備の充實は民衆をして政治家を信用せしめる。「仁」戰に人道の誇がなかつたら匪賊の集團と何の違ひもない。「老子」兩軍が戰場で相會つた時に、常から仁慈の心を養つてゐた方が勝利を得る。「孟子」國君好仁、天下無敵焉、「論語」智者不惑、仁者不憂、勇者不懼。「勇」老子は自制心から起つた勇氣を尙び孔子は勇者不懼といつた、孟子に孟施舍の勇を養ふ工夫を説いて、要は懼れを超越するものとした。孟施舍の勇は必勝を期しない、孫子は必勝を期する。彼れは敵の力を量らないで進む、これは敵を量つて進退するところは一致しないが共に懼れないことを將の必須條件とする。「嚴」嚴格に命令が徹底する。平生は徳を以て懷柔するが事に臨んでは將帥が叱咤怒號するまでもなく死を賭して働く。

法者、曲制、官道、主用也。

法トハ曲制、官道、主用ナリ。

第五項の法と稱するのは曲制（軍の編制）、官（職制）、道（糧道、軍需品輸送の連絡を維持確保する）、主用（軍費、用度）の四つである。

「法」上聲、軍律。（法は上平にすれば口語、去聲にすれば佛法（釋教）フランス法國などに轉じる）。

「曲制」戰時編制、五人が伍、十人が什、五十人が隊、百人が曲、二百人が官、四百人が部、五百人が旅、これが軍の編組であり、弓隊が最前線、槍戟が第二線、その次が車隊、その次が歩兵、中軍（左翼、右翼）騎兵、輜重といふ例になつてゐた（ギブソン氏の考證）。「官道」魏、武帝の説に従つて官と道とに區分したが官道を各武官の服務規律と解するものあり。「主用」軍費の收支及補給。この中の曲制は孫子の創意である、孫子以前の戰爭は不規律な集團で、強を負むものが勝手に飛び出して名乗をあげ、一騎打ちをやつたものであるが、隊伍を整へ號令によつて大局的に動くのは孫子から始まつた。わが國の保元平治物語をみても勇者は勝手に前線に立つものであるが、武田上杉に到つて始めて部曲に重きを置き、信玄の如きは最も孫子に精通し、孫子の名句を旗に大書せしめて本營に立てた。武田の兵法は眞田幸村の死とともに亡びた。軍に組織がなかつたら號令が徹底しない、後方連絡が切れたら孤立する、軍資が不十分であつたら士氣は昂揚しない。

凡此五者、將莫不聞、知之者勝、不知者不勝。(故校之以計而索其情)。

凡ソコノ五者は將聞カザルナシ。コレヲ知ル者ハ勝チ、知ラザル者ハ勝タズ。(故ニコレヲ校シテ以テ計リ、ソノ情ヲ索ム)。

以上に掲げた五項目は、將たるものは既知の要領であるが、それを知つて實地に運用した者は勝ち、その用を知らないものは負ける。以下は前節に重複してゐる「故にこれを比較計量して彼此の實情實勢を模索する。」

この位のことを知らない將軍はないが、知つてゐながら實地に運用できないのは本當に知つてゐないのである。陽明學でいふ知行一致で、知つたら行へる、理論は知つてゐるが實際には運營でないといふ辯解は認められぬ。

五つ所責めに責めて勝利の理論を把握する、この中に缺けてゐるのは、武器、軍需品の條件である。太公望の六韜には武器と食糧とを重視してゐるに反し孫子は後章にその問題に觸れてはゐるが、戰爭手段に重點を置いて科學武器は副次的に考へてゐる。

曰、主孰有道。孰有能。天地孰得。法令孰行。兵衆孰強。士卒孰練。賞罰孰明。吾以之知勝負矣。

曰ク主孰カ道アル將孰カ能アル。天地イヅレカ得タル。法令イヅレカ行ハル。兵衆イヅレカ強キ。士卒孰レカ練レル。賞罰孰カ明カナル。吾コレヲ以テ勝負ヲ知ル。

雙方の君主のどちらが道徳的に優れてゐるか。將帥はどちらが才能があり、どちらが無能であるか。天時地理はどちらに有利であるか。敵にか味方にか、法律命令の嚴に行はれてゐる國は敵國か我國か。兵士の多寡強弱の比較。教練の熟と不熟と。賞罰が明かに行はれてゐると濫賞濫罰に陥つてゐると。これ等を綜合考慮すれば、戦はざる前に勝負を斷定し得られる(以上の七綱の對比によつて勝敗の數は鮮やかに眼前に浮んでくる)。

「主孰有道」この四字を戰爭條件の主位に置いたことは孫子の深謀遠慮が窺はれる。近代戰術の基礎學でも君主又は國旗の下に固く團結した精神は兵數、武器以上に前敵に於いても銃後においても強き抵抗力を持つとせられ、國體觀念の薄い國民は實戰的にも敗兆は事前に現はれてゐる。「士卒孰練」孔子。教練の不十分な民を驅つて戦はしめるのは、民を棄てると同じである。「賞罰孰明」賞罰の明らかならざるは軍紀弛廢の素因である。

將聽吾計用之必勝、留之。將不聽吾計用之必敗、去之。

將、吾ガ計ヲ聽キ、之ヲ用ヒバ必ず勝タン、コレヲ留メヨ。將、吾ガ計ヲ聽カズ、コレヲ用ヒバ必ず敗レン、コレヲ去レ。

副將以下の將校が吾（主將）の計を呑み込んでその策を用ひたら必ず勝つであらうから、さやうな部下はこれを留めて吾が手足とせよ。（その反対に）部下の將校が主將の計を善しとしない（で、自分勝手な計畫の上に戦つたならば）必ず負けるから、（情實を棄てよ）そんな部將を放逐せよ。

號令が二途に出るのは最も悪い。部下の將校が總司令官とちがつた計畫を持つては、命令系統がもつれる、先づ内部組織を單一化して次に外部設計に及ぶ。

計利而聽、乃爲之勢以佐其外。勢者因利而制權也。

計、利アリテ以テ聽ケバ乃チコレガ勢ヲ爲シテ以テソノ外ヲ佐ケヨ。勢トハ利ニ因リテ權ヲ制スル也。

主將の計畫が有利なりとして副將以下が聽從したならば（それで部内の意旨が一致し作戰計畫が確立したのであるから、外部の仕事に移つて）、周囲の形勢を自國に有利なやうに導き（自

國の正義を高唱して輿論をつくり又は外交手段により鄰國の同情聲援を得て敵を孤立に陥れるなど）外部から士氣を佐けよ。勢をつくるとは、わが利とするところによつて權變を制するところである。

「因利而制權」有利と認めた計畫に基いて權宜の處置をとる。制の字は基だ強い意義を持つが適當な譯字が見當らぬ。敵の死命を制すの制であつて能動的文字である。敵の行動に先だつて臨機的手段を取り、その出鼻を摧くことである。利と勢とは兵家の最も重視するもので後章にその詳説がある。

外部作用で勢をつけたら弱いやつでも強く動く。砲彈の飛ぶのも機械で勢ひを付けられたからである、飛ぶがゆゑに貫通力が生じる。

兵者詭道也。故能而示之不能。用而示之不用。近而示之遠、遠而示之近。

兵ハ詭道ナリ、故ニ能アリテコレニ不能ヲ示シ。用ヒテコレニ用ヒザルヲ示シ。近クシテコレニ遠キヲ示シ、遠クシテコレニ近キヲ示ス。

戦は欺瞞の手段である。（正しき倫理道德の道ではない。敵を狼狽せしめ敵をして錯覺せしめ

る基礎の上に勝利が立つがゆゑに、才能があつても無能な素振りを示して敵を安心せしめ、兵力を用ひる決心があつても怯にして兵力を用ひないやうな態度を見せて敵を油断せしめ、戦機近づきながらまだ切迫してゐないやうに思はせ、速い城を攻めやうと計畫しても目的は近き戰場にあるやうに假偽の勢を見せる。

正々堂々の陣を知るのみで詭道を知らねば敵にしてやられる。これを「宋襄の仁」といふ、とくに寡兵をもつて大敵に當る場合に必要である。強いのと弱いのが土俵で争ふとき、弱いのは詭道をやらねば必然的に負ける。弱をもつて強を破るは欺道、偽道、變道である、後にある奇道と混同してはならぬ。

番狂はせといつて観衆は喜ぶ、人間には詭道に拍手する本能心理がある。

War is a thing of pretence : therefore, when capable of action, we pretend disability; when near to the enemy, we pretend to be far; when far away, we pretend to be near. (C)

利而誘之。亂而取之。實而備之。強而避之。怒而撓之。卑而驕之。佚而勞之。親而離之。

利シテコレヲ誘ヒ、亂シテコレヲ取リ、實ニシテコレニ備ヘ、強クシテコレヲ避ケ、怒ラシメテコレヲ撓シ、卑シクシテコレヲ驕ラセ、佚ニシテコレヲ勞セシメ、親シクシテコレヲ離ス。利をもつて敵をおびき寄せ（賤ヶ岳に中川瀬兵衛を餌にして佐久間玄蕃を釣つた秀吉の兵法、太閤記）。相手國に内訌を起させ敵の一致を亂して之を攻め取り（徳川が大坂城内に且元と治長とを離間せしめた策、難波戦記）、力を充實せしめて敵の奇襲に備へ。強き兵力を擁しながら、わざと敵の鋭鋒を避け（上杉謙信が武田勝頼の攻撃を回避したる、甲越軍記）敵を怒らせて理性を撓しその判断を誤らせ（諸葛孔明が司馬懿に巾幗婦人の服を贈つた。しかし懿はその手に乗らなかつた。三國誌）、謙退卑遜の態度で敵を驕慢ならしめ（赤壁の戦に黄蓋が曹操を欺いた手段、三國誌）、こちらは安佚して敵を奔走に疲れしめる（正成が北條勢を遠くから誘致した兵法、楠公記）。敵の同盟國と親しくして離間せしめる（歐洲大戰で同盟軍からイタリーを聯合軍に引入れた英國の外交、歐洲大戰裏面史）。

「取」取の字は孫子その他の古典に多く用ひられてゐるが學究でも不用意に看過してゐる。著者の研究では取に二つの意義があり、その一つは獲得の意、論語に義然後取、人不厭其取、取をとる、又は take と譯するが次の取と前例の取と義を異にし、自己の意思を思ふまゝに遂行する意味である。

老子、以無事取天下、又は取天下常以無事、及有事不足以取天下、張煦氏の新説では取天下とは春秋に覇位を取るとか、華府の軍縮會議で議長を取らうと競争した類で、取天下は天下を領有する意味ではない。

戦争は國家生活の正常でないから敵をだましても反倫理でなく、敵にだまされたら反道徳である。なぜならばだまされて負けた場合に自國民全部に禍難が降りかゝるからである。一國の運命を信託された將軍はその責任として敵をだますべく、敵にだまされてはならぬ。孫子が將軍の資格條件として「知」に重點を置いたゆゑである。中庸に「明かに辨ず」とある、智によつて明かに敵狀を辨ずるからだまされない。

攻其無備、出其不意。此兵家之勝、不可先傳也。

ソノ無備ヲ攻メ、ソノ不意ニ出ヅ。コレ兵家ノ勝、先ヅ傳フベカラズ。

その備へなきを攻め、その不用意の點を見つけて突出する、これは兵法家の勝を得る秘訣で、(謀は密を尙ぶ) 實行するに先つて、そんな噂でも立てしめてはならぬ(織田信長が桶狭間に行つた奇襲がそれである)。戦闘綱要に「攻撃は敵の意表に出づる度が愈々大なるに従ひ、その成

果益々大なり」

「文法」兵者詭道也は提題(又は冒頭)、故能以下の十二句は叙述、此節が結尾。まだ意が残つて次節に響く、これを掉尾といふ。

大東亞戰に十六年十二月八日日本の空軍は眞珠灣を奇襲した當時米國將校は上陸してゐて艦にゐなかつた、不意を打たれたから負けたと逃げながら辯解しても自己の怠慢を告白するだけで自慢にならぬ、不意を撃つた方が自慢になる。

夫未戰而廟算勝者、得算多也。未戰而廟算不勝者、得算少也。多算勝。少算不勝。而況於無算乎。吾以此觀之、勝負見矣。

ソレ未ダ戰ハズシテ廟算勝ツ者ハ算ヲ得ル多ケレバ也。未ダ戰ハズシテ廟算勝タザル者ハ算ヲ得ル少ケレバ也。多算ハ勝チ、少算ハ勝タズ、而ルヲ況ンヤ無算ニ於テヤ。吾レコレヲ以テ之レヲ觀レバ、勝負見ル。

まだ交戦しない前に、既に成算があつて勝つてゐる者は、成算(計畫)が十分に熟してゐたからである。まだ戦を交へない前に負けときまつてゐる者は廟算(作戦の基本計畫)が足らな

いのである。多算（打算が周到な者）は勝ち、少算（勘定に誤り多き者）は勝たない。まして（しよつばなから）無勘定で（行きあたりばつたりの）戦争する者は？（これはお話にならぬ、向う見ずである）この算定から推して考へたなら、勝か、負けか、眼を瞑つてゐても結果は明かに現れてくる。

「廟算」國家の大事は王族、重臣、將帥が國祖の靈前で會議して決定する祭政一致時代の古式から廟算の熟字を残したが、兵法のいふ廟算とは作戰計畫の大綱をいふ。多算とは周密な豫測、少算とは粗雑な打算。

吳子。賢明な君主が國民の奉公を要求する前には必らず先づ民心との融和疏通を謀り、戦を始めするには先づ作戰計畫を立て、君主の獨斷專行を避け、大廟で祖先の靈位に申告し、神前で龜卜する（龜卜とは蔡から出る大龜の甲を焼いてその裂痕の象形文によつて吉凶を判断することである）、さらに天の時季をも考慮して、總てにおいて吉ときまつてから始めて兵を擧げる。事の前に莊重な式典を経て後に決行するのは、民に、君主が人民の生命を尊重することに心を盡し、誠を神に捧げてゐる、ことを知らしめるためである。かやうに輕舉妄動を戒め、國策遂行上、止むを得ずして國家國民のために事を擧げるといふ信念を深く士卒に印象せしめ、これを率ゐて國難に臨めば、軍人

は感激して進み死するを名譽とし、退いて生きるを恥辱とする。「不敢信其私謀、必告於祖廟、啓於元龜、參之天時、吉乃後舉。民知君之愛其命惜死若此之至、而與之臨難、則士以進死爲榮、退生爲辱矣。」

廟算には二つの義を持つ、（一）祖先の遺業を子孫が專行によつて破壊しない儒教的孝道、（二）國民に、深甚な考慮を経て、神人一致の下に餘儀なき戦を戦はねばならぬことを覺悟せしめ、國君の希望を祖先の鏡から國民に反射して君民合體上下一致戦の第一歩を踏み出す。戦争を嚴肅化するため神に冥護を祈念する、神は非禮を享けないから戦争は正義人道に合致した意義を持たねばならぬ。勝切らねば勝切られる、死ぬか生きるかその中間はない。勝つ成算なくして始めるのは罪惡であるから前後を察し、中立國の動靜を審にし、彼此の優劣を量り、武器、食糧、精神力から、長期戦か、短期戦か、これに堪へる國の經濟力、戦場の廣狹による兵力配備など、すべてを考察してかゝらねば、戦争を始めて中途にいやになつたからやめるといふわけに行かぬ。相手があることである、獨り角力とはちがふ。

作戰 第二 TSUE CHAN. (Operations of war). II.

「始計」が具體化したのが「作戰」である。

孫子曰凡用兵之法、馳車千駟、革車千乘、帶甲十萬、千里餽糧、則内外之費、賓客之用、膠漆之材、車甲之奉、日費千金。然後十萬之師舉矣。

孫子曰凡ソ用兵ノ法、馳車千駟、革車千乘、帶甲十萬。千里糧ヲ餽レバ則チ内外ノ費、賓客ノ用、膠漆ノ材、車甲ノ奉、日ニ千金ヲ費ヤシテ、然ル後十萬ノ師舉グ。

凡そ用兵の法として四頭立ての快速戦車（攻撃に用ふ）。牛革で貼つた装甲車（防禦に用ふ）武装兵十萬。その上に千里の遠きに糧食を輸送する費用を加へ、更に、國の内外に於ける戦時非常費、交際費（遊説家の懐柔費、中立國の使節に要する外交費、間諜費など）、弓矢甲冑を作るために要する膠、漆の如き原料、こんな小さな科目をも計上し、兵車甲冑の修繕費補充費まで合せたら一日に千金を費すであらう。この千金は十萬の遠征軍を送り出す一日の軍費にしか當

らぬ。

千里千金千駟等の千は漠然たる數を示すに過ぎないが十萬の數字は割り出せないでもない、古代支那の陣立はホーマー時代の希臘のそれに類似し、戦車は重要な原動力で、歩兵は一定數を車輛に割り充てられる、この場合では馳車には七十五人、革車に二十五人が配屬し、馳車革車各一千臺であるから歩兵は十萬となる。一里は今日の支那里とは少し違ふらしい。千金は金貨の一千兩ではない。支那には金貨がなかつたから銀兩であらう。

戦費は勝敗を動かす有力な魔手で、招募兵は錢能通神（地獄の沙汰も金次第）といつて軍資金の豊富な方に附く。

歐洲大戰で一九一四年七月二十八日の宣戰布告から一九一九年六月二十八日の平和條約の成立までに遣つた金はステーツマンズ・イア・ブックによれば獨は六百六十六億圓（一日平均三千七百萬日圓）、佛が六百六億圓、英が七百二十九億圓（一日四千一百万圓）露、米、伊、白、羅、埃匈、日、濠、土、勃の順位で最も少い塞比亞でも十二億強（一日七十萬圓）を費つてゐる、第二次世界大戰はまだ總決算が済まないから不明であるが、恐らくは一日の割合がこの額の十倍では済まないであらう。科學戰は消耗戰であるから文明になればなるほど規模が雄大になり消耗律も激増する。

其用戰也。貴勝。久則鈍兵挫銳。攻城力屈。

其ノ戰ヲ用フル、勝ヲ貴ブ。久シケレバ兵ヲ鈍ラセ、銳ヲ挫キ、城ヲ攻ムレバ力屈ス。戦争は速く勝つて速く結ぶのがいい。長びけば兵鋒を鈍らせ、いきり立つ闘志を挫折せしめ、その倦怠した兵を以て城を攻めたら力が屈して勇氣を發揮し得られない。

「貴勝」は貴速戰であることは前後の文脈から容易に判断せられるから速の字を補つてみるがいい。歐洲大戰でカイゼルは速戰即決主義を貴んだがヴェルダンの攻城戦には力屈し、國用の不足から大敗に終つた。野蠻人は割合に單調な持久戰に耐へ得るが文化人ほどねばり氣が弱い、心身の過度の疲労は殉國の感念を稀薄にせしめ、國內の人も重税に困んで緊張した奉公心も弛緩することは歐洲大戰が證明する。

久暴師則國用不足。

久シク師ヲ暴セバ國用足ラズ。長く吾が軍隊を敵地に暴露して置けば國の軍資が缺乏する。

支那事變も四年半かゝつて片附かないうちに大東亞戰に進展した、ドイツの對ソ聯戰も速戰即決の方針であつたが二年を経てまだ繼續してゐる、速戰は希望であつて實際には希望通りに行かぬ。

夫鈍兵挫銳。屈力殫貨。則諸侯乘其弊而起。

ソレ兵ヲ鈍ラセ銳ヲ挫キ、カヲ屈シ貨ヲ殫セバ、諸侯ソノ弊ニ乗ジテ起ル。對陣久しきに及び士氣を鈍らせ銳志を挫き、力は屈し軍資を使ひはたし（國力の底が見え出したなら）形勢を觀望してゐた中立國が、その弱り目につけ込んで起る。

戰爭は大破壊であるからいかなる富國でも戰時財政は必ず赤字を伴ひ、それを公債その他の手段で賄つて行く。

兩虎が相闘つてともに疲れたときに新手の中立國が飛び出して戰果をさらつてしまひ闘つたものが馬鹿をみる場合がある。

雖有智者。不能善其後矣。

智者アリト雖モ、ソノ後ヲ善クスル能ハズ。

智者でも跡始末の付けやうがない。

今日以前の歴史が避け得られなかつた戦争が今日以後に避け得られやうとは思へない。列國の力の尖銳は戦に向つて躍動し、繋争の原因は國の歩みの足の先に引つかゝる。戦を始めることは易いが、戦の成果を収めることが困難なのである、善後策を考へない無責任な争は歐洲大戰であつた。媾和條約が調印されてから二十年の後まで世界人の總てを猜忌と不安と嫉視反目と缺乏疲弊と曠廢との枯野原に彷徨させた、それが禍根となつて、つひにドイツはヴェルサイユ體制打破を叫んで對英佛戦に起ちあがり、太平洋では大東亞戦が始まつた、中途半端では善後策が立たぬ、智者の智も中々及ばない。故に孟子は「條理を始めるのは智であるが條理を終へるのは智を超越した聖の事」といふ。

春秋諸侯の頭の中には熱烈な土地侵略の慾念が常にたぎつてゐた、時々それが爆發して國民經濟を顧慮することなく戦争が始まつた、何時戦争が始まるか、國民は知らない神も知らない豚も知らない、危険でたまらぬ、故に吳子は國家の負擔力に相當する精兵を用ひ、民力、財源を料つて戦ふべしと説いた。

故兵聞拙速。未賭巧之久也。

故ニ兵は拙速ヲ聞クモ未ダ巧ノ久シキヲ賭ズ。

故に拙速で勝つた例は聞いたが、まだ巧遅で勝つたことを知らぬ。故兵聞拙速而勝、未賭巧久而勝也の意である。(次のやうに解するが孫子の原意ではあるまいかと思ふ——拙で速いものあるを聞いたが巧で遅いものを見ない、巧みな主將は必ず速い)。

老子、善き將は果斷に富み、無理に強がらない、思ひ切つた一撃を加へるが繼續しないで早く切り上げる、勝つても伐らない、驕らない、やむを得ず戦ひ、勝つても極端な壓迫を加へない。

近代戦争感念は速戦即決で、それは數千年前に孫子が唱へた拙速主義である。老子に、無理に附けた勇氣は早く衰へる、勇氣の附け双は道でない、自然の道でないものは早く已む「戦争は自然ではない、自然でないものは早く衰へる、だから衰へないうちに早く勝を制せねばならぬといふのが拙速論の根據ではあるまいかと著者は思ふ。

クラウゼウイツツの戦争論に、攻防共に持久の態勢を守り速に事局の解決を求めざる戦例は少くない。これは双方の意思薄弱であつて勝敗の結果を憂慮するからであるが、かやうな對陣は害の多しこと、他の人生の競争中にその比を見出し能はぬ。

夫兵久而國利者、未之有也。故不盡知用兵之害者、則不盡知用兵之利者也。ソレ兵久シクシテ國利スル者ハ未ダコレアラザル也。故ニ用兵ノ害ヲ盡知セザル者ハ、用兵ノ利ヲ盡知セザルナリ。

戦争が長期に亘つて國家が利益をしたことは斷然無い（歐洲大戰にみよ、戦つた國も負けた國も創痕と借金とでよた／＼になつた）。ゆゑに用兵の害を詳知しないものは用兵の利を知り盡さないものである。戦争の利は裏うちがあり、拙速と巧遲の蝶番で國家興亡のドアで開閉する。短期で目的を達した戦争は採算に合ふが長期戦となれば中々そろばんに合ひにくい。戦争の利を知るものは戦争の害から遠ざからんとして短期戦を望むが、大東亞戰のやうに南洋の資源を獲得し、これを培養基として進めば長期戦も恐れるに及ばぬ。

善用兵者、役不再藉、糧不二載。取用於國、因糧於敵、故軍食可足也。

善ク兵ヲ用フル者ハ、役、再ビ藉ラズ。糧、三タビ載セズ。用ヲ國ニ取り、糧ニ敵ニ因ル。故ニ軍食足ルベシ。

善く兵を用ふる者は（一度切りで）二度と動員令を下さず。糧食も（一度切りで）二度三度も運送しない。弓箭甲冑等の軍用は本國から持ち出すが兵糧は敵から奪ひ又は掠めるため糧食に缺乏しなく。

用を國に取れば正貨が國外に流出しない。敵の糧に因つて戦へば國內の食料は減ぜず敵國は食糧に窮するから二重の利益がある（それでは敵國の民が困らうといった道徳心を起してはならぬ、道徳は美德だが、戦時には損徳でもある）。併しそれは良將が速かに戦ふ場合に限られる、敵の不意に出なければ敵は「清野」をする、清野とは野の穀類を刈取り民家の粟とともに城内に運ぶのみならず家畜までさらつて利を遺さない。

國之貧於師者、遠輸。遠輸、則百姓貧。

國ノ師ニ貧ナルハ、遠ク輸スレバナリ。遠ク輸スレバ百姓貧シ。

國家が師のために貧しくなる原因は遠方に輸送するに在る。遠くへ輸送すれば國民は貧乏になる。

どうせ戦争は大破壊大浪費である、それを本國に累はさないで敵國に行つたら相手の國土を荒廢

せしめ経済的にも打撃を與へる。

近於師者、貴賣。貴賣則百姓財竭。財竭則急於丘役。

師ニ近ケレバ貴ク賣ル、貴ク賣レバ百姓財竭ク、財竭クレバ丘役ニ急ナリ。

駐屯軍に近いところは需給の平衡が失はれて物價は暴騰する（歐洲大戰で露國の物價指數は六百倍となり世界の物價は狂騰した）。物價騰貴は軍事豫算を狂はせて増税となり（公債の應募者もなくなり）國民の資産が竭きる、財源が枯渴すれば農村（丘）の徵税（役）を急ぎ立てねばならぬ。

自國から資材を持出せば相手國を繁榮せしめてやる代りに、自國は貧乏になり、經濟戦に負ける。

力屈、財殫、中原、内虚於家、百姓之費、十去其七。

力屈シ。財、中原ニ殫キ。内、家ニ虚シク。百姓ノ費、十ニ其七ヲ去ル。

精力は屈し、財源は中原（郊野）に殫き（農夫より徵税すべき餘地なく）、家の内部は空虚となつて家財までも無く、國民の費用は戦時非常税で所得は十分の七まで取立てられる。

「十七」は財産の七割を提供せしめられると解するより所得税を指したものであらう。歐洲大戰で英國は相續税と戦時税とで、資産及び所得の五分ノ三を徵收したことがある。

戦時の財政政策としては國家が國民經濟を統制し、戦争によつて紛糾混亂する財界を成るべく常道に近づける研究は重大な學問として見られる。武士が計算に携はること、學者が算盤を弾くこととは同様に恥づべき行爲と見做されてゐたが、たとひ大まかなものにもせよ、經濟的に戦はうとする計畫は孫子が始めて唱へたものである。

樞軸と反樞軸との戦争には各國とも増税に次ぐ増税で、新税種を見出すに骨折つた、また低物價政策遂行と公債消化との必要から貯蓄を奨励した。自由主義も民主主義も一括して統制主義に降伏した、自由民主主義では敏活な行動ができずして戦機を失ふからである。

公家之費、破車罷馬、甲冑大弩、戟楯蔽櫓、丘牛大車、十去其六。

公家ノ費、車ヲ破リ馬ヲ罷ラセ。甲冑大弩、戟楯蔽櫓、丘牛大車、十ニ其六ヲ去ツ。

國庫經濟としては戦車の破損、軍馬の疲廢、甲、冑、大弩、戟、楯、蔽櫓、丘牛及び雄牛の牽く輜重大車などは六割までは廢物となる。

「公家」國家が國王の私經濟となつてゐたから公家といふ。「罷」は疲又は憊に通ず。「蔽櫓」軍前に屏風のやうに擴げる大盾。「大車」重車、輕速車は馬が曳き、重遲車は牛が牽く。支那馬が小さいことは今に始まつたことではない。殷墟の發掘物によつても明かで、小さいから力の弱いことも想像され得る、穆王の八駿馬も知れたものである。

甲冑大弩が近代裝備と機關銃と變り、丘牛大車がトラックと變つても原理に變りはない。一人の兵を前線に送り出すに銃後の兵器廠は廿人の労働者を要する、軍隊が機械化するに従ひ武器補給が面倒になる。

故、智將務食於敵、食敵一鍾、當吾二十鍾、苳秆一石當吾二十石。

故ニ智將ハ務メテ敵ニ食ム。敵ノ一鍾ヲ食メバ吾ガ二十鍾ニ當ル。苳秆一石ハ吾ガ二十石ニ當ル。

故に智將は出來得る限り敵國の糧を食ふ。敵の一鍾の糧を食つたら（敵國にそれだけ食料を減じ、吾が輸送勞費を省き、往復途中の輸卒の喰ひつぶしを要しないため効果を概算せば、吾が輸送量の）二十鍾にも比敵する。（一鍾は約百二十リットル）。敵の馬糧を消費することも

同じ計算で苳（苳、豆穀）秆（秆）を食ふことは一石が吾が輸送馬秣の二十石にも相當する、

（石は量でなく目方で、約二十キログラム）。

食ふか食はれるかの戦争において敵の資料を喰ひつぶすに遠慮はいらぬ、食ふとは食料だけでなく近代戦では石油、鐵などの資源も算入する。

故殺敵者、怒也。取敵之利者、貨也。

故ニ敵ヲ殺スハ怒ナリ、敵ノ利ヲ取ルハ貨ナリ。

敵を殺さうとせば吾が士卒の怒氣（敵懐心）を挑撥すべく、敵の利を奪取するには賞與をもつて勵ますべし。

「敵之利」土地、兵食、戰車などを奪ふも、敵の祕密地圖、作戰計畫などを手に入れるのも、敵を降参させるのも、敵の中から裏切り者を出させるのも取敵之利といひ、それには貨（賞金、賄賂）などを要する。戦時にも金は活躍する。猫一匹殺すにも憐みの情が起る、しかるに敵とはいへ人を殺して愛憐を感じないのは國家のために敵懐心を昂揚させるからである、敵から有利な條件を奪ひとるのは懸賞に限る。

故車戰得車十乘以上、賞其先得者、而更其旌旗、車雜而乘之、卒善而養之。是謂勝敵而益強。

故ニ車戰ニ車十乗以上ヲ得バ、ソノ先ヅ得タル者ヲ賞シ、ソノ旌旗を更へ、車ハ雜ヘテ之レニ乗ラシメ、卒ハ善クシテ之ヲ養フ。コレヲ敵ニ勝チテ強ヲ益ストイフ。

車戰で、敵の戰車十乗以上を鹵獲したものであらば、その先づ得た者の功を賞し、敵の旌旗を抜き去り吾が旗を樹て、得た車は（叛亂を豫防するため獨立編隊としないで）吾が軍中にまゝ、つて我が兵の中に組合せて新附の卒を搭乘せしめ、降卒は手厚く之れを養つて我が用を爲さしめる。これを稱して敵に勝つたその上に我が兵力に強味を加へるものといふ（吾が兵力を損して敵に勝つより、敵に勝つて兵力を益すは更に善し。智將は勝を貴び、同時に利益を伴はしめる打算を忘れない）。

圍碁は捕虜を使用しないが、將棋は捕虜を利用して敵を攻撃せしめる、降伏者を利用すれば敵の虚實を知つてゐるから便利が多い。

故兵貴勝、不貴久。故知兵之將、民之司命、國家安危之主也。

故ニ兵ハ勝ヲ貴ビ、久シキヲ貴バズ。故ニ兵ヲ知ル將ハ民ノ司命、國家安危ノ主ナリ。

戰は速く勝つを貴ぶ。（たとひ終局の勝利を得るにしても）長期に互る戰勝を貴ばない。（速く勝つと遅く勝つとは効果において非常な差がある）。ゆゑに用兵の法を詳知する主將は、國

民の生命を托すべき人であり、國家安全の氏神さまである。「安危」の危は意味なき接尾詞。

個人をもつて生活の究極目的とする個人主義、天下全人類の利益を最高標識とする國際主義この二つの主義の中間を行くものが國家主義である。春秋の大國とは智又は力によつて他の集團を征服して始めて群雄の列に加はつたものであるからその歴史の延長で強く突張つて行くものに限り國の生命が維持された。この方針の下に將帥が武裝農民ともにも侵略した肥沃の地と分捕した貴重品などをもつて國民の繁榮幸福の資とするために國家の最も強力な活動が要求せられる。この國家至上主義を保存及び發展せしめるため個人々の特性を曲げしめて國家の力の下に統制するからその指導者が智慮に秀でゝゐる時は被指導者たる國民も繁榮に浴するが指導者が愚物である時は國が亡びそれに附隨して個々の家庭も窮乏に陥る。國家活動の最も大なるものは戰爭であるがゆゑに國民の運命は一に繫つて主將にある。故に兵を知る將は國家安危の裁決者なりといふ。

將の責任はかくの如く至重至大である。吳子は將としての戒心すべき要項五つを擧げた、（一）か

に多数でも、少数を統御すると同じく、一糸紊れざる紀律を立てよ、(二)門前に敵ありとして、何時でも會戦する用意を忘るな。(三)敵に臨めば生きる考へを去れ、(四)勝ち切つた後にも、まだ戦はこれから始まるものと思へ、(五)命令は簡單であれ、くどくどしてはならぬ、——出陣の命を受けたらそのまゝ家へも歸らないで出發の準備に取かれ、敵に勝つてしまふまで家の事は念頭から離すのは主將の禮である、故に出勤の日は死の名譽があつて生の恥辱はない(まるで日本の武士道である)。故將之所愼者五。一曰理、二曰備、三曰果、四曰戒、五曰約。理者治衆如治寡、備者出門如見敵、果者臨敵不懷生、戒者雖克如始戰、約者法令省而不煩」受命不辭家、敵破而言返、將之禮也、故師出之日、有死之榮、無生之辱。

謀の巧拙は戦争に重大であるが謀の巧拙より更に重大に勝敗の結果を指導するものは「時」の原理である、この書に拙速、巧久、迂直、先後などの字眼があるが要するに「時」の研究であり、時の尖銳が「機」である。

大阪から東京へ、汽車に乗る、乗車券の外に切符が二枚、寢臺券と急行券、この急行券は時間を金で縮めたスピード時代である。時間が短かければ短いほど高く、普通、急行、超急行と等級づけられて、得心して金を拂ふ。

東京へ着いてホテルに宿る。一日より二日、二日より三日と時間が遅ければ遅いほど高い、汽車と反對に時間を換價した室料であるから得心づくで金を拂ふ。拂つてから財布を握りしめて、そこに勘定違ひがありはしないかと疑ふ。

ホテルの遅さだけを高く評價するのが老子。汽車の速さだけを買ふのが孫子。二つを左右にみて時の遅速を錯らないのが孔子。野蠻人より文明人に時間の感念が強く、天から與へられた時間を虚使して自ら疲れ、忙しさうに人生をして無意義な働きに疲れるのは賢いとはいへない。それをすつと高い段階に昇りつめたら釋尊のやうな境地に達して時間を超越して天地とともに悠久となる。偶來松樹下、高枕石頭眠、山中無曆日、寒盡不知年。こゝまでくれば枯木寒巖となつて社會味がなく、時間を忘れる。曆日を忘れる。むろん戦争に役立たぬ。人は人間線を餘り高く離れるのも考へものである。かやうに人の思想と、戦の勝敗とを動かす魔物、「時間」とは何である？ 時間とは哲學的には事物の持續關係を直觀する先驗形式である。一次元的にすべての現象を數量的に云ひあらはすに當り常に獨立變數として導かれる。たゞし相對原理では絶對時間の存在を経験的に否認する。

この面倒な時間が計畫と相待つて戦争に働く、戦時動員でも速ければ速いだけ有利であり、行軍もさうであり、軍艦でも速力即戰鬥力である、砲丸でも速いから強い、馬は速く牛は遅いから騎兵

あつて牛兵はない。兵法は天時、地理、水、火、何でも手當り次第に利用するが、その中で一ばん強いのは「時間」である。

謀攻第三 MEU KUNG (The attack by stratagem) III.

敵の作戰企圖を攻撃して未然に戰意を破壊する。

孫子曰凡用兵之法、全國爲上、破國次之。全軍爲上、破軍次之。全旅爲上、破旅次之。全卒爲上、破卒次之。全伍爲上、破伍次之。

孫子曰ク凡ソ用兵ノ法ハ、國ヲ全クスルヲ上トナシ、國ヲ破ルハ之レニ次グ。軍ヲ全クスルヲ上トナシ、軍ヲ破ルハ之レニ次グ。旅ヲ全クスルヲ上トナシ、旅ヲ破ルハ之レニ次グ。卒ヲ全クスルヲ上トナシ、卒ヲ破ルハ之レニ次グ。

用兵の法は戦つても國內の安全を確保し、戦禍によつて國力を疲弊せしめず（軍備の缺陷、財政の窮乏を生ぜしめざる）を上乗とす。たとひ血戦して勝利を得ても國が復び起つ能はざるやうな打撃を受けるのは上乘とはいへない。勝つても軍を全くして戰鬥力を失はないのが上乘で、鏖戦して吾が軍も多大の損害を受けて辛うじて敵に勝つのは（全軍の）次である。吾が師旅を

完全にするのが上、旅團を破滅させるほどの痛手を受けて勝つのはその次、卒を失はずして勝つのが上、卒を失つて勝つのはその次、伍に死傷者を多く出して漸く敵に勝つのはその次。

在來の解釋は、敵國を荒廢せしめ又は灰燼に歸せしめず、「そつくり」と「そのまま」自國に歸服せしめるが最上の戰略であり、猛烈な抵抗の後漸くにして征服するはその次位であり。敵軍を破滅させず、完全なまゝ降伏させるのが、散々に損害を與へて降伏させるより勝る。

「全軍」以下は同じ意味の反復で、たゞ軍(一萬二千五百人)旅(五百人)卒(百人)伍(五人)の差があるだけで深き意味を含んだ數ではないが、句を疊みかけて叙述を強めることは漢文に多い文法である。徹底的に敵を殲滅することは國家の大を成すゆゑではない。大英國が本國に幾十倍する屬邦を抱いてゐるのも一々壊滅的に撃破したのではなく巧みに恩威を並用して制御したものである。滿洲國の成立にあつて日滿聯合軍が滿洲名物の馬賊山賊の降伏するものは懐け、同化したものだけを掃蕩したのもこれに類する。「老子」和大怒、必有餘怨、安可以爲善」。大なる争の後に怨恨が残ることは春秋の吳越、現代の獨佛の關係がそれである。敵を破摧して怨恨を残し復讐の機を狙はれつめてゐるやうでは勝者の利ではない。強きばかりが軍人ではない、否、強き者は兵法家ではない。

是故百戰百勝、非善之善者也。不戰而屈人之兵者、善之善者也。

是故二百戰百勝ハ善ノ善ナルモノニ非ズ。戰ハズシテ人ノ兵ヲ屈スルハ善ノ善ナルモノ也。

故に百度戰つて百たび勝つても至善とはいへない。戰はずして敵兵を屈服せしめるのが善中の最善である。

戰つたら必ず損害がある、損害の大小は比較的の計算であつて損害絶無の交戦はない。戰つて勝つのは、戰はずして勝つのに及ばない。

壓倒的勝利を得てもその反動たる報復戰に備へるため常に尨大な軍備を以て警戒せねばならぬ、たとひ武裝せざる非戰鬥員でも遺恨を骨髓に徹せしめ殺された父兄のための復讐を何らかの形式に於いて取るであらうから武力を以て壓迫することは不利益である、國力とは匹夫則ち一市人の力の集積に外ならぬから一人でも反抗者を少くするは武將の常に心掛くべきことである。

孟子は尙書の武成篇を評して「徳を以て不徳と、智を以て不智と戰ふに、流血河の如き鏖殺戰を演ずるまでもなく、極めて手軽く征服の功を擧げ得らるべきはずである」といつた。

故、上兵伐謀、其次伐交、其次伐兵、其下攻城。

故ニ上兵ハ謀ヲ伐チ、ソノ次ハ交ヲ伐チ、ソノ次ハ兵ヲ伐チ、其ノ下ハ城ヲ攻ム。

故に用兵の至上策は敵の謀がまだ熟しない前に、その計畫を伐ち破つてそれを實行に移し能はざらしめる。(又は彼の攻撃の企てが形を具へない時に、こちらから先鞭を着けてそれを壊してしまふ)。その次は友邦又は同盟國を離間して敵を孤立せしめる(春秋には列強が相對峙してゐたから孫子は局外國の向背を常に氣にかけてゐた)。その次は兵と兵との野戦で勝敗の數は豫見し雖い(兵法とは戦争から損益の對照にまで突込んで行く打算學問であるから勝は則ち益であらねばならぬ)。その次は最悪の手段で、敵の城砦を攻める(味方の生命を浪費して勝利と交換することは戦争の法則に當てはまらぬ)。

「上兵伐謀」老子。其安易持、其未兆易謀、其微易散、爲之於未有、治之於未亂。

戦争の目的は自國の意思を相手國に押付けるに在るから必らずしも血を見ねばならぬことはない、流血以上に威力を發揮する方法もある。國家相互の對立は一時の亢奮感情による格闘よりも利害の打算と彼此の戰鬪力の比較によつて勝敗の數を推斷し、戦はずして外交の机上で結論をつけ、敵國から求められたら一方はその條件を受入れて降伏するか、敢然として對抗するかのどちらかを選ば

ねばならぬが、軍備の強き背景を持つ外交は犠牲者を出すことなくして弱者を退讓せしめて勝利を占めることが多い。

攻城之法、爲不得已。修櫓、積輜、具器械、三月而後成。距闔又三月而後已。

攻城ノ法ハ已ムヲ得ザル爲メナリ。櫓、積輜ヲ修メ、器械ヲ具ヘ、三月ニシテ後ニ成ル。距闔

マタ三月ニシテ後ニ成ル。

止むことを得ず城を攻めなければならぬ場合もあるが、それは力めて避くべきである。なぜならば攻城準備として櫓(大楯)積輜(攻城車)その他の器械を修め具へることに三箇月を要し、距闔(土壘)を築くに又た三箇月もかかる。

「積輜」龜甲車、低き四輪車に牛革を貼りて矢石を拒ぎ城壁に附いて破壊を行ふ、形、タンクに類す。征韓の役で晋州城攻撃に加藤清正はこの車をつかつた。「距闔」土豚壘、堀を埋め、その上に土俵を積んで城壁より高からしめ、そこから射撃する。

攻める側は速戦を有利とし、守る方は持久戦を望む、武器、糧食が十分であれば敵軍を釘付けにして援軍の到るを待つが、援軍が來らなかつたら孤城は結局陥落する、大東亞戦における昭南島で

ある。

將不勝其忿而蟻附之、殺士卒三分之一、而城不拔者、此攻之災也。

將ソノ念ニ勝ヘズシテコレニ蟻附シ、士卒ヲ殺スコト三分ノ一ニシテ、而モ城拔ケザルハ此レ攻ノ災ナリ。

主將がそのまどろしさに（忍耐自制の心を喪ひ）焦燥の念を爆發させて（攻城具の完成を待ち切れず）無謀早計の企を以て密集部隊で蟻のやうに城壁に攀ち登つて、士卒を大死させること三分の一。それでも城が抜けないといふ失態は攻城戦によくある災で（史上に慘憺たる悲しき痕跡を残してゐる）。

攻城戦はまどろしい、歐洲戦で世界第一の要塞マヂノ線が一週間を待たずして破綻したのは攻撃武器の精銳にもよるが、フランス軍隊に戦意が弱かつたからで要塞そのものゝ缺陷でなかつた。

故善用兵者、屈人之兵、而非戰也。拔人之城、而非攻也。毀人之國、而非久也。必以全爭於天下、故兵不頓、而利可全。此謀攻之法也。

故ニ善ク兵ヲ用フル者ハ、人ノ兵ヲ屈セシメ、而モ戰フニ非ズ。人ノ城ヲ拔クモ、而モ攻ムルニ非ズ。人ノ國ヲ毀ルモ、而モ久シキニ非ズ。必ラズ全ヲ以テ天下ニ爭フ。故ニ兵頓ラズシテ利全カルベシ。コレ謀攻ノ法也。

この一節は兵法哲學であり亦た孫子の極意の片鱗でもある。淵源は老子から發し孔孟の學説と提携する。——故に良將は敵兵を屈服させるが而も強戰（無理な戰）で押へつけるのではない。敵城を抜くが而も馬鹿げた戰で、多大の犠牲の代償として城砦を手に入れるのではない。敵國を破毀するが木枯の枯葉を拂ふやうな自然的勝利で、持久戰で勝つのではない。必らず自國の兵力を保全して、天下の中央に立つて爭覇戰に悠然として登場する。故に兵力は鈍らず、勝利は完全に確保される。篇に名づけた謀攻の法とはこれである。

「頓」は二重の意味を持つ（一）兵の銳氣を鈍らすことなくして、（二）兵刃を損傷せしめることなく。「以全爭」武器も糧食も敵卒も、敵國民の心までも、そつくり取つて、その幾何級數的に増大して行く力をもつて中原で鹿を争ふ。

國際會議で強國の發意により軍艦に制限を加へ彼我の對比に不均等を生ぜしめ、反抗できないやうに拘束するが如きは屈之人兵而非戰である。軍縮條約で要塞築造を禁する如き、又は思想宣傳で

内部から崩壊せしめる如きは拔人之城而非攻である。豊臣秀吉が戦はずして伊達政宗を臣隸せしめた如きは毀人之國而非久であるが、これは外貌に於いて似たところがあるだけで孫子の原意に觸れてはゐない。哲理の底から應用力は發するが應用の枝から哲理の根は生じない。最も接近した引例は武王が殷を滅した史實であるがそんな證明をすればするほど孫子の哲學は大俣に逃げてしまふ。老子は「戦ふなら果斷でやれ、一撃を加へて解決せよ」儒教の觀點は少し違ふ、孟子、梁惠王に對へて「地方百里の小國でも天下を征服統一する難事ではない、壯丁に孝悌忠信が行渡つたならば、杖をもつてさんぐに秦楚の精兵を引つばたき得られる。」

故用兵之法、十則圍之。五則攻之。倍則分之。

故ニ用兵ノ法、十ナレバ之ヲ圍ミ、五ナレバコレヲ攻メ、倍ナレバ之ヲ分ツ。

故に兵を用ふる法則として、敵に十倍した兵數ならば包圍攻撃をなせ、五倍ならば正面から壓倒的に攻撃せよ、二倍ならば二分して一は正面から、他は背面又は側面から攻めよ。背面側面攻撃の効果的なるはクラゼウイツツの戰爭論にも詳説がある。

敵の一に對して吾が二を用ふる時は、吾が一部は正兵となり他の一つは牽制運動に奇兵としての

働きをせしめる。

十圍、五攻、倍分は用兵の原則であつて實戰には原則通りに行かぬ、しかしこれを逆にすれば必ず負ける。

敵則能戰之。少則能守之。不若則能避之。

敵ケレバ能ク之レト戰ヘ、少ケレバ能ク之レヲ守レ、若カザレバ能ク之レヲ避ケヨ。

匹敵スル兵數ならば能く謀つて戦へ（勝敗の數は豫見し難いが能く力を效して戦つたならば勝ち得るであらう。この節の各句に能の字を加へたことに留意せよ）。兵數が敵より少なければ險阻又は城砦に立籠つて防禦の姿勢を取れ。兵數において敵に若かざる時は巧みに退いて交戦を避けよ。

寡兵で大軍を敗つた例は歴史に充奮の渦を卷いてゐるが、冒險的奇勝は讀史子を悦ばせるだけで一國の運命を賭博のかけに張ることは兵法家の避くべきところである。

「老子」柔徳を棄て、無理に大膽の行動を取り、退くを知らずして突進する。彼等の終局は死である。

小敵之堅、大敵之擒也。

小敵ノ堅キハ大敵ノ擒ナリ。

兵數も少く奇計もなく、たゞ頑強一點張り、棒のやうに堅くなつて構へてゐる兵は、大敵に取つては有り難い据ゑ膳である。

老子、人が生れた時は柔かくて弱いが、死んだらしやちこ張つて堅く強くなる、草木でも若芽は柔かくて脆いが枯れたら堅くなる。兵も堅く強くなつたら負ける、木でも強くなれば伐つて材木にされる、強く大きい幹、根は下にゐて上から壓へられ、柔かく弱い新芽は高位にゐて上から抑へてゐる。

十、五、倍。大、小。衆、寡などは兵卒の數から打算したのであるが武器の鋭鈍、訓練の熟不熟、兵質の善惡、糧食軍需品の如何などを含んで陸戦力の強弱を測つたもので、海軍でいへば噸數を基として、速力、備砲（口径）、根據地の遠近、艦載飛行機の性能なども計量する。

夫、將者國之輔也。輔周則國必強、輔隙則國必弱。

ソレ將ハ國ノ輔ナリ。輔周ナレバ國必ラズ強シ。輔隙アレバ國必ラズ弱シ。

夫といふ一轉語を措いたのは、以上は對外的の謀であり、以下は政府内部の結束に就いて述べやうとするからである。主將は國君の輔佐である（女房役である）。輔佐が周密に國君と意氣投合してゐたならば國は必らず強いが、この二者の間に意思の疎通を缺き（隙があれば）國は必らず弱い。

「國」とは國君であり國家であり政府でもある。この三つの區別が明瞭でなく三角形の頂點のやうに分立してゐることもあり、三つが融合一致してゐる治世も上古にはあつたが、春秋の君主は個人の私經濟で國家財政を賄ひ、絶對權をもつて國民を引きづつてゐたのだから政府、國家は則ち國君の力の中に含まれてゐた。國君は行政も立法も意のままに行ひ特に宣戰媾和の神權を握つてゐたから國は則ち君であつた。

故、軍之所患於君者三、不知軍之不可以進、而謂之進、不知軍之不可以退、而謂之退。是謂之縻軍。

故ニ軍ノ君ニ患フル所ノモノ三ツ、軍ノ以テ進ムベカラザルヲ知ラズシテ、之レニ進メトイヒ。

軍ノ以テ退クベカラザルヲ知ラズシテ、コレニ退ゲトイフ。コレ之ヲ糜軍トイフ。

軍が君主のために計畫の遂行に邪魔立てされる條項が三つある」その一は軍が進んではならない時に、君が宮中から進めと命令を下す。軍が退いてはならない時に主將が「退け」の命令を受ける。(かやうに首府に居る諸侯が戦場の將士に紐をつけて進退を引いたり緩めたりする)これを糜軍(則ち駿馬の兩脚を絆つたやうな軍隊)といふ。

「糜軍」繋がれた軍、猿廻はしの猿のやうに後の人の手心によつて踊らねばならぬ軍隊」戰場から遙か離れた衣冠の徒が諸侯を動かして主將の臨地企畫を覆さしめ、大敗を招いた例は甚だ多い。太公の兵法に「國は外部から治めてはならぬ。軍は内部から統御してはならぬ」と。政は仁義を中核とし戦は權變を重視するからである。たとひ通信機關は完備しても戦機は刻々に變化する。主將の自由裁量權を奪ふは大敗の素因である。共和國或は委員制度國でも政争黨争の激しい國ほど政略黨略によつて軍隊が牽制されることがある」英國のごときは國防が政争に禍せられて世界戦大敗の原因となつた。

不知三軍之事而同三軍之政者、則軍士惑矣。不知三軍之權而同三軍之任

則軍士疑矣。

三軍ノ事ヲ知ラズシテ三軍ノ政ヲ同ジクスル者アレバ軍士惑フ」三軍ノ權ヲ知ラズシテ三軍ノ任ヲ同ジクスレバ軍士疑フ。

軍事に通達しないものが軍政に干與して主將と同じ權能をもつて指揮すれば命令が二途に出で軍人をマゴ／＼せしめる」軍の機宜權變を知らずして軍の任務を主將と同等に執行するものがあれば軍士はどちらに従つていゝかを知らずウロ／＼する。

「三軍」天子の兵は六軍、諸侯は三軍。「權」はバランスであり配置、手配である。三軍には將卒を適當に配分して平衡を取る、平衡を失つたら軍は傾く、わざと傾けて不平衡を見せて敵を釣ることもある。その權宜を知らずして主將の賞罰、命令、組織、進退に干渉する軍監を付けるのは諸侯が主將を信頼しないから起る。」梶原景時が頼朝の命によつて義經の監軍となり事毎に意見を異にし逆櫓の一件で双方から見つともない喧嘩別れをした如き(源平盛衰記)。

三軍既惑且疑、則諸侯之難至矣。是謂亂軍引勝。

三軍既ニ惑ヒ且ツ疑ヘバ諸侯ノ難至ル。コレヲ軍ヲ亂シテ勝ヲ引クトイフ。

軍士がマゴつきウロついたなら鬪志も鈍り内訌が生ずる、それに乗じて局外中立國が突然嚴正中立の看板を外して撃ち込んでくる。これは自ら好んで自身の軍を混亂せしめ、自ら望んで敵に勝つてもらふといふものである。

「諸侯之難」その虚に乗じて鄰國が敵と策應して我を攻める。「引勝」我に打勝つ強敵を引つぱり込む。

身體に缺陷があるから病氣が入込む、病氣が入込むから缺陷が大きくなり、因と果とがあざなつてつひに死ぬ、國內に間隙があれば反戦主義が空間を補填する。

故、知勝有五。知可以與戰、不可以與戰者勝。識衆寡之用者勝。上下同欲者勝。以虞待不虞者勝。將能而君不御者勝。此五者、知勝之道也。

故ニ勝ヲ知ルニ五アリ。以テ與ニ戰フベク以テ與ニ戰フベカラザルヲ知ル者ハ勝ツ。衆寡ノ用ヲ知ル者ハ勝ツ、上下、欲ヲ同ジクスル者ハ勝ツ、虞ヲ以テ不虞ヲ待ツ者ハ勝ツ、將、能ニシテ君、御セザル者ハ勝ツ。コノ五者ハ勝ヲ知ル道ナリ。

故に勝を豫見する法が五つ。戰つていゝか、今戰つてはいけないかの見境をつける將帥は勝つ、

こゝは多數の兵を用ひなければならぬか又た寡兵でいゝかの判断を誤らない者は勝つ、上の君と下の國民とが希望を同じくする（舉國一致）は勝つ。用意周到な陣立をもつて油斷した敵に對するものは勝つ。主將が才能あつて國君が後から操らないものは勝つ。この五つの條件は勝利を豫測して間違ひないものである。

「衆寡之用」難波戰記に、淀殿が後藤又兵衛をして藤堂高虎の軍を河内に逆へしめたが、又兵衛寡兵をもつて大軍を平野に迎へるといふ兵法はまだ聞いたことがおぢやらぬ。「御」と馭とは同じ去聲で同音。主將（の馬）を君主（の馭者）が手綱で操縦する。日露戰役に東郷元帥をして自由手腕を揮はしめて敵の艦隊を殲滅せしめ、歐洲大戰で佛國人が最後までジョフル元帥に信任した如き。

故曰、知彼知己、百戰不危。不知彼而知己、一勝一負。不知彼、不知己、每戰必殆。

故ニ曰ク彼ヲ知リ己ヲ知レバ百戰危カラズ。彼ヲ知ラズシテ己ヲ知レバ一勝一負。彼ヲ知ラズ己ヲ知ラザレバ戰フゴトニ必ラズ殆シ。

故に結論していふ、敵情を知悉し、味方の實力を知り盡くし、その上で戰場に臨むものは何べん戰つても大丈夫である。敵狀を知らず自己の力のみを知つてゐるものは勝つこともあり負け

ることもある（まぐれ當りの勝ち負けである）。向ふの勢力を知らず、こちらの戦闘力をも知らないで暗中模索でぶつかるものは、どの戦争にも危いものである。

「故曰」は古語と解するが普通であるが、これは孫子の結論であらう「文を簡潔にするため不知己而知彼一勝一負の十字が略してある」間諜などで敵の情報を得るに熱中するが、かへつて味方の長所短所を知つてそれを利用善用する者が少い」他人の兒の善悪には氣はつくが、わが兒が不良少年の仲間に入つてゐることに氣がつかない。他家の花は紅い。

齊の桓公を佐け武力をもつて天下を統一した春秋の大政治家である管仲はその著「管子」に、如何なる敵からも脅威を感じない、如何なる敵をも征服し得られる方策を次のやうに述べてゐる——政治が間暇で政廳は秩序があり、公法が行はれて私の悪事を行ふものなく、倉には穀が充ちて刑務所はガラあき、賢人は進んで姦民は退き、尙武の氣に満ち射利を賤み、農民は耕を好んで飲酒美食を望まなかつたら財用は不足なく食料から薪炭に到るまで豊富になり、上下和合して禮儀がある。故に處れば安定し動けば威嚴があり、戦へば勝ち、守れば固し——管仲はたゞ放言しただけでなくこの中の大部分は實行されて齊は諸侯の覇となつた。

吳起は兵法家の立場から、政治家である管仲と大同小異の觀方をして、次に書いてあるやうな敵

に逢へば戦術も施すことができないと、一儀にも及ばず退却せねばならぬ六つの條項を擧げてゐる——その一は、領土が廣大で人口が多い。その二、君主が國民を愛し仁政が行渡つてゐる。その三、賞すべきものは誤りなく賞し罰すべきもの必らず察かに法を加へ、時を失はず令を發する。その四、功勞のあるものは功に應じて登庸せられて官位に就き、賢人に責任を負はしめ才能ある者を使ふ。その五、軍人は多く武器は精銳である。その六、隣國はこれを支持し大國も援助する。——これ等の各項が、相手國に及ばないとみたら、遲疑するなくこれを避けて戦ふな、それは「可とみたら進み、難しいと知つたら退く」といふものである。有不占而避之者六、一曰土地廣大、人民富衆、二曰上愛其下、惠施流布。三曰賞信刑察、發必得時。四曰陳功居列、任賢使能。五曰師徒之衆、兵甲之精。六曰四鄰之助、大國之援。凡此不如敵人、避之勿疑。所謂見可而進、知難而退也。

相手を過大評價すると過小評價するとどちらも敗戦の因子となる。觀水の役に秦王符堅は敵國晉の陣營を望み、八公山の草木まで敵兵と誤認して脅威を感じた、その實は秦兵八十萬に敵兵は八萬であつた、結局敗戦となつて風聲鶴唳も晉軍の吶喊と錯覺した。大東亞戰に昭和十七年一月三日發ラ・ナシヨンは「アメリカは日本軍の力を過小評價したのがマニラ陷落の原因となり、つひに太平洋の海權を制せられた」と。

孫子は「戦はずして敵を屈せしめる」のを兵法の上乗とし、尉繚子の説もこれと類してゐる「過ちなき城を攻めてはならぬ、罪のない人を殺してはならぬ」「道をもつて勝て」「道をもつて勝つとは「敵の闘志を消散せしめ、軍隊はあつても士氣を失ひ、形骸だけ」にしてしまふのが兵法の妙だといふ、兵家は術を尙ぶが道德をもつて背景とし、柔を尊び剛を斥ける。易の泰☰☷の卦象で、内陽にして外陰、内健で外順、内君子で外小人で、これを兵法に利用すれば「猫をかぶる」である。洪範は九疇に和柔委順を説くが、外も内もみな柔で剛骨がなかつたら國家は雪崩れる。邵雍節は皇極經世書に「靜の始め柔を生じ、靜の極、剛を生ず」とし、剛と柔とは同一根から生ずるとは道教と儒教と一致した哲理であるが、それをはき違へると真理の把持 Satyagrah 主義のやうな非現實思想から無抵抗となり「人類は獸力に勝つ何ものかを持ち、獸力はこの力の前に屈すべきもの」として、トルストイの「精神力」とともに消極的の理窟戰術となり、理窟は常に實行に負ける、理窟とは自己の無氣力を修飾するための言説とも見られる。

哲理を推しつめて行けば柔徳に達するが、それは哲理の^{まじり}奔である。この陥穽に踏み込んで無抵抗主義を信奉する社會は墮落する。哲理通りに行かないことから考へると、もつと大きな大自然の理法があつて、人間の腦力で至善と信ずるところは、まだ神の至善と距離があるらしく、そこが人

間の社會生活の面白いところで兵法家存在の餘地があり、平和論者の腰は完全に抜けてゐる。哲學者といふものは土鼠のやうに光線を避けて深く暗い土の裏をもぐりたがる癖がある。意氣ある人間ならそんな陰鬱な生活はできるものではない、この思想は印度を今日の狀態に置かしためたが、その中でもラビン・タゴールには少し血の氣があつた、彼れの戰詩に、こよひ汝の進軍ラツパが響かう。吾は平和を望んで汝に辱められた。いま予は汝の（喇叭）の前に立つてゐる。吾が甲冑をつけるのを助けてくれ。激しい惱みの吹奏で、吾が生に火を打ち出すか。吾が心臓を悲みで打ちたくか——汝の勝利の太鼓の音で。

これ等からみれば日本の武士道は生氣がある、武士道は何人の發明でもない、日本の固有思想がそのまま表現されたものである。その中核は忠であり、忠を養ふがためには孝、勇、禮、義、信、廉恥、質實などの要素を要する。武士道の範疇は鎌倉時代から徐々に鮮明を加へ、氏族的名譽を重んじ、卑怯な行動よりも寧ろ死を擇んだ。花は櫻木、人は武士であつた。鶴ヶ岡八幡は武門の祖神とせられ弓矢を取る武士は武運の長久を祈つた。當時佛教特に禪は吾が國に盛んであつたが、その佛教は全く日本化して印度の無抵抗主義と絶縁してゐた、貞永式目に「寺、社異れりといへども崇敬これ同じ」とあつて禪僧は武士道達成の一役を買つて出た。陽明學者も朱子學者も武士道の思想

的體系を整へるのを手傳つた。「信玄家法」「武將感狀記」などを讀めば武士道の精神を把握するに足るが、武士は貧を苦とせず、錢を不淨とした。孫子のやうに利益を説いたものは一人もなかつた。孫子のやうに馬上でそろばんを弾くだけの餘裕ある兵法家は敬服に値するが、武士道は勝敗の打算よりも玉碎をもつて武人の花とした。思想界に一分野を開いて武士道を光彩あらしめたのは山鹿素行で、彼れは孔子を無條件に崇拜し、その儒學と兵學との渾化を圖つて成功した。孫子の「彼を知り己を知る」に就いて「日本人は日本の實力を知らずして外國の虚力を買ひかぶつてゐる」ことを指摘した。義のために死を辭せず。水晶の瓶に秋水を蓄へたやうな氣品風度が武士道の精華で、支那の兵家は「死地に投じて始めて士卒の死力を得る」が、武士道は「義によつて主に殉ずる」。彼れは利、これは義、この道は何千年かの努力で築きあげた僕らの祖先の遺産である。この遺産は僕らに魂をもつて戦へと教へる。

軍形第四 CHUN HSING (Tactical dispositions) IV.

精神があつて形がないのは幽靈である、攻撃精神は軍形に宿る。

孫子曰、昔之善戰者、先爲不可勝、以待敵之可勝。不可勝在己、可勝在敵。

孫子曰、昔ノ善ク戰フ者ハ先ツ勝ツベカラザルヲ爲シテ以テ敵ノ勝ツベキヲ待ツ。勝ツベカラザルハ己ニ在リ、勝ツベキハ敵ニ在リ。

古來から兵法に熟達した將帥は、先づ負けない陣容を整へて敵に乗すべき隙の生ずるのを窺ふ。どうしても負けない身構へはこちらに在るが、勝つべき虚は敵に在る。The ancient masters of war first made their armies invincible, then waited until the adversary could with certainty be defeated. The causes of defeat come from wishin; victory is born in the enemy's camp (C)

虚のない敵に向つて猪突したら反撃を喰つて負ける、相手に虚をつくらせる方法は「虚實」篇に

あるが、第三篇にある十圍、五攻、倍分の原則を想起すべし、逆説すれば十分一の兵力しか持たなければ守り、五分一ならば受身になり、半分なら一圍となるべく散開すべからず。

故善戦者、能爲不可勝、不能使敵必可勝。故曰勝可知、而不可爲。

故ニ善ク戦フ者ハ能ク勝ツベカラザルヲ爲スモ、敵ヲシテ必ラズ勝タシムル能ハズ。故ニ曰ク勝ハ知ルベク、爲スベカラズ。

故に戦術に達した將帥でも負けない陣立はできるが（戦は相手のあることだから敵に虚のない限りは）之れに必ず勝つことはできない。故にいふ、勝は窺知することはできるが、敵に虚をつくらせて必ず勝つこと、則ち勝利を製造することはできぬ。

詩經、小雅。潛んで伏ると雖も亦た孔だ之れ昭かなり」熟達した將帥はよく敵の虚を觀破するがそれは智である、しかし敵に敗形をつくらしめることは智の線を超えてゐる。孟子に、百歩の遠きに射るやうなもので、矢をそこにとどかしめるのは力であるが、的に命中せしめることは力でない。

不可勝者、守也。可勝者、攻也。守則不足、攻則有餘。

勝ツベカラズトハ守レバ也、勝ツベシトハ攻ムレバ也。守レバ則チ足ラズ、攻ムレバ則チ餘リアリ。

前節に負けない陣を布くといつたのは實を守つて失はないことであり、勝つべきとは敵の虚を擣くからである。（守則不足攻則有餘は古文によくある倒置法で不足則守、有餘則攻の意）兵力が不足ならば守勢を取り、餘りあらば攻勢に出る。

どんな小技でも熟練とこつがある、兵法でもどうして不可勝を知り可勝を知るかは悟入によらねば言又は文を以て指導することはできない、孟子に「大工や指物師は尺の使ひ方を教へ得るが弟子にこつ（又は熟達）を教へ込むことはできない」。

善守者、藏九地之下、善攻者、動九天之上、故能自保而全勝也。

善ク守ル者ハ九地ノ下ニ藏レ、善ク攻ムル者ハ九天ノ上ニ動ク。故ニ能ク自ラ保チテ勝ヲ全クス。

善く守る者は深く地底に潛んだやう（寂として形を見ず）。善く攻むる者は天上から落下したやう（突として現はれる）。ゆるぎに攻守共に自己を保全して、しかも勝利を全くする。

The general who is skilled in defence hides in the most secret recesses of the earth; he who skilled in attack flashes forth from the topmost heights of heaven. Thus on the one hand we have ability to protect ourselves; on the other, a victory that is complete. (G)

この一章を完全に解説したものはまだ無いのは解釋の綱のたぐり方を知らないからである。全勝とは何であるか、味方が千の力をもつて敵の百を盡殺しても全勝ではない、なぜならばその内で一人の死者傷者を出しても全勝でなく一本の矢を失つても損害であるから自保ではない、損害のあるのは比較的勝利で自保でも全勝でもない。味方が千の力をもつても萬の戰鬥力を持つ敵に遇へば全く虚となる、さやうな相對的の考へは孫子の頭でない、勝つものは必らず負けるものであり勝と敗とは同一根から互生する。故に孫子の全勝とは全敗と同じことで、色即空、空即色である。老子に善く行くものは車輪の迹も足跡もないといふのが戰爭哲理である。孫子は用兵の極致は無形に至るといふ。この節に九天九地の字を用ひて至高至低を示してある、天地は高く大なるものでも科學の方で高さ大さを測定し得られるが、無形は物理學的に無限大であるから如何に剛健なものでも無形に勝つことはできず、又た無限大のものを視ることはできない、故に敵はこれと戦ふことができないから老子は之を不爭の徳といつて、負けつこなしの強いものだといふ、故に敵が百萬で味

方が一人でも決して負けないといふのは哲理は數の觀念より更に高處にあるからである。このわかつたやうでわからないやうな夢幻境から孫子の戰爭哲學は微笑を洩らす。

くだいやうだが、こゝも孫子の急所だから、もう一度解説を反復する。『暖簾に腕押し』とは強が弱に勝てないことである、鐵腕より暖簾、暖簾より空氣、空氣に克つものは何？ 空氣は強くとも氣象がある、それを構成する原素もあるが夢幻は形がないから最も強い、「兵の妙は無形に到る」とはそれだ。禪の秘境に電光影裏斬春風といふ句があり、山岡鐵舟は道場にこの七字の額をかけて、これを劍道の極意といつたが、同時に兵法の極意でもある。ピカピカとくる電光、その早い電光の消えないところで、すかさず劍を抜いて春風を斬る――それは氣違ひか、精神異狀者と思ふその者が物慾の囚はれとなつてゐるから、この妙味がわからないのだ。孫子を反復して讀んでゐるうちに、それが自然にわかってくるから妙だ。何者か、どこからか、その極意を語つてくれるのだ。關尹子に「聖人は天に藏る、故に之れを能く傷つくるものなし」

見勝、不過衆人之所知、非善之善者也。戰勝而天下曰善、非善之善者也。

勝ヲ見ルコト衆人ノ知ル所ニ過ギザルハ善ノ善ナル者ニ非ズ。戰勝チテ天下、善トイフハ善ノ

善ナル者ニ非ズ。

勝利の機會を見出ししても衆人の知るところ以上に出ないやうでは善中の最善ではない（人に知られずして勝つ則ち謀攻が最善である）。戦ひ勝つて大衆が大成功として嘆美するやうでは至善でない（伐交の如きは人に知られない勝ちで、伐兵の利よりも大きい）。

史上に燦然として輝く大勝は、兵法家の眼からみれば善の善なるものではない、敵の作戦を未萌に覆すが至善であり、その次は朽ちかゝつた樹を倒すやうに力を用ひずして勝つ無理のない戦である。

故學秋毫、不爲多力。見日月、不爲明目。聞雷霆、不爲聰耳。

故ニ秋毫ヲ學グルヲ多力ト爲サズ。日月ヲ見ルヲ明目ト爲サズ。雷霆ヲ聞クヲ聰耳ト爲サズ。秋に最も細くなつた獸毛の一筋を擧げたからといつて力の強い人とはいへない。日や月を見たからと云つて明目（視力の強い人）とはいへない。雷音を聞き得るといつても耳の聰いことを誇り得られない。（霆は雷の震ひは、ためくことであるが雷の語助として用ひられる）だから秋毫を擧げ、日月を見、雷霆を聞くは平凡な人間で力ある聰明な主將とは云へないと、そんなに

講じるのが普通で解りいゝが併しそれは餘りに淺解であつて、その正反對に次のやうに講じたら意味が深長になり、節首にある「故」の字は靈動する。

力戰奮闘して辛うじて勝つのは用兵の上乗でない、毛を擧げるやうに何の力をも用ひないで容易な勝利を得るのであるから衆人は之を見て「あの將軍は多力勇敢である」と認識しない。見えぬ機密を無理に見やうとするのでなく、明かに現はれた敵の敗形を達觀して勝を占めるのだから大衆は「あの將軍は明目銳視の人である」とはいはない。雷音を聞くほど大きく洩れてくる敵の機密を聞き知るのだから人は彼を聰耳な將軍として尊崇しない。優れた戦術家は極めてらくな勝ち方をするから大衆はその努力を買つてくれない、そこに將の偉大さがある——と、かう解すれば左手は次節を招き右は前節と握手する。

古之所謂善戰者、勝於易勝者也。故善戰者之勝也、無智名、無勇功。

古ノ謂ヘユル善ク戰フトハ勝チ易キ者ニ勝ツ也。故ニ善ク戰フ者ノ勝ツヤ、智名ナク勇功モ無シ。

古のいふ所の善く戦ふ者とは勝ち易き敵に勝つことである（即ち秋毫を擧げ、日月を見るほど

容易なもの。故に善く戦ふ者が勝つても智將と稱せられず、大衆からは勇士として功を喝采さ
れない。

墨子。公輸盤が楚のために（城攻めに用ひる）雲梯を發明して、これで宋を攻めやうとした。墨
子はそれを聞いて齊から十晝夜かゝつて楚の首府郢にかけつけて「聞くところでは貴下は梯をつく
つて宋を攻めると、宋に何の罪があつたか、楚は人口稀薄で土地は餘つてゐる。不足な人口を殺滅
して餘つてゐる土地を侵略するのは智か？ 宋に罪なし、これを攻めるのは仁か？」「先生のお話
は至極道理だが、予は既に楚王に計畫を奏上したから中止できない」「では楚王に紹介してくれ」
墨子、王に謁見して「こゝに富家があつて自家の梁肉を捨て、鄰家の糠、糟を竊まうとする、この
人の心理は如何」「それは手癖の悪い奴だ」「楚の領地は五千里、宋の地は五百里、楚には雲夢があ
つて犀兕麋鹿が満ち、江漢には魚鼈鼉鼉があり産物は天下でも最も富んでゐるに對して宋は雉兔狐
狸さへない貧弱な國で、梁肉と糠糟とに對比される」「だが公輸盤が宋の王城を取る雲梯をつくつ
たから中止するのは惜しい」と、そこで公輸盤を呼び入れて、墨子が帯を解いて城の形とし隙を武
器に象り、公輸盤をして攻めしめ、墨子が之を距いだ。公輸盤の計が盡きて墨子の計はまだ残つて
ゐた。公輸盤「予は宋に勝ち得るが、それは言はない」墨子「予も足下の計を知るが、それは言は

ない」楚王が怪んでその理由を問ふ、墨子「公輸子の心はわかつてゐる。臣を殺したら宋には雲
梯の攻を拒いで城を守り得る者がないと思つてゐるが、臣の弟子禽滑釐以下三百人が、臣の考案し
た防守の器械を以て籠城して敵の來襲を待つてゐるからこゝで臣を殺しても宋の王城は落ちない」
楚王が墨子の言に従つて宋を攻めることを中止して宋は危く亡滅から救はれた。墨子が歸途に宋を
過ぎて雨に遇ひ、里門の庇に雨を避けたが、門番は墨子が敵の間諜であることを疑つて納れてくれ
なかつた」神祕で、人の知らない働きをしたものは人はその功を知らぬ、明白な處で争闘したら大
衆はその功を認める。

故其戰勝不忒。不忒者、其所措勝、勝已敗者也。

故ニ其ノ戰勝志ハズ。志ハズトハ、其ノ勝ヲ措クトコロ、已ニ敗レタル者ニ勝テバ也。

故に良將は戰勝に誤算がない、誤りがないわけは、既に敗戦の要素を具へた敵の上に必勝點を
置くからである。

老子。無理に事をする者は却つて敗れ、無理に攫まうとすれば却つて取落とす」
必勝と必敗との對抗は戦を交へない前にすでに敵は負けてゐる、これは商戦で説明できる、せひ

とも入用だとして買ひにくる、その時に買手はすでに負けてゐるから、いや應なしに買つて行く、これに反して相手がほしくない商品を賣付けやうとすれば辯口を手傳はせて效能を述べる。しかし相手は必需品でないから値切る「負ける」といふ兵法術語をつかふ、賣手は仕方なしに値引きする、これを商戦で「負ける」といふ。

故善戦者、立不敗之地、而不失敵之敗也。

故ニ善ク戦フ者ハ不敗ノ地ニ立ち、而モ敵ノ敗ヲ失ハズ。

故に良將は（先づ我が陣形を整へ）どうしても敗れない位地を確保して、しかも敵の敗形を見逃がさない（敗形が現はれたら、すかさず之れに乗じる）。

「不敗之地」老子に善く植ゑたら何者も抜き能はぬ」孔子。赤手で虎を搏ち、舟なくして大河を向う見ずに徒渉し、死んでも命を何とも思はないやうな蠻勇者と共に戦場に臨むのは御免だ。わが同志とは、事に臨んで戒心し周到な注意を以て作戦計畫を遂行するものである。

是故勝兵、先勝而後求戦。敗兵先戦而後求勝。

コノ故ニ勝兵ハ先ヅ勝ツテ後ニ戦ヲ求メ、敗兵ハ先ヅ戦ツテ後ニ勝ヲ求ム。

この故に勝つべき運命を把握してゐる兵は、戦はない前に既に確乎たる勝算があり、敵軍がそれを悟らずしてまだ頑固に陣を張つてゐるから致方なく一撃を喰はさなければならぬが、併しその時には既に勝つてゐるのだ、たゞ勝敗を事實に現はしてみせねば敵が得心しないからである。敗北の悲運を持つてゐる兵は始めから勝つ自信も成算もなく、戦つてみなければ結果がわからぬ、兎も角戦つてみて勝を萬一に僥倖すること、まるで賭博のやうな考へで、狙ひ定めぬ無鐵砲の亂發だ。

グラゼウキツツ將軍はドイツ流の分析科學で戦勝を研究した結論として、勝機のその始めは極めて微小で感覺に觸れ難いが戦の進行中に擴がつて其結果は大きいといつた。

善き政治家は議會に臨む前に、すでに勝つてゐる。政府提出法案が通過する自信を得てゐるからである。議會の討議はたゞ政府勝利の記録を止めるだけのことである。善き社長が株主總會に現はれる前に過半数の賛成者を得てゐる。總會を開いてみれば通過するか否かの見通しが付かぬやうな社長なら危なかくして株主の利益を委任できない。

善用兵者、修道而保法。故能爲勝敗之政。

善ク兵ヲ用フル者ハ、道ヲ修メテ法ヲ保ツ。故ニ能ク勝敗ノ政ヲ爲ス。

善き將帥は、敵に勝たれない道^{ミチ}を修めて、敵に勝つ法^{ミチ}を持つ。故に勝敗を我が意のままに決定し得る。

「勝敗之政」在來の解は之^レの二字に強く泥むからいけない、結繩之政など古文ではこの例があるから極めて軽く見てよし。勝敗を一方的命令で決めることで、既に負けてゐる敵に引導を渡してやることだ。『吳子』殷の成湯は夏の桀王を討つたが、夏の政道が亂れて君と民との間が別々になつてゐたから夏の國民は自國の君が討たれることを悦んだのは夏桀の虐政が徹底して愛國心が種切れになつてゐたからである。周の武王が殷の紂王を討つても殷の國民は敵人の行爲を是認した（いくら君主が無道でも、國體を殊にする吾々としては怪しからん理窟だと思ふが、支那ではそれで差支へなく道德が通用したものである）。成湯の如き周武の如き戦争は、天の意旨と人の希望とが合致したから、あんな自然の大捷を得たのである。

兵法一曰度。二曰量。三曰數。四曰稱。五曰勝。地生度。度生量。量生數。數生勝。

兵法ハ一ニ曰ク度、二ニ曰ク量、三ニ曰ク數、四ニ曰ク稱、五ニ曰ク勝。地、度ヲ生ジ、度、量ヲ生ジ、量、數ヲ生ジ、數、勝ヲ生ズ。

兵法では先づ度（地理の研究）から始め量、數、稱を経て勝に到達する。地形を度り、險易遠近によつて作戰の大綱を定めるのが度、度が定まつて次に戦場の廣狹によつて戦線の長短、兵種の按配を考へるのが量、量を基礎として之に要する兵の多寡をきめるのが數、數から打算して彼我の戰鬥力の輕重（強弱）を稱るのが稱。この四つから推しつめて成算を得るのが勝。

戦争が「勝」の結論に達するまでに周到な科學的段階を通過する、度から始まつて勝に到る過程においてその一を誤つても完全な勝利を得られない。

故、勝兵、若以鎰稱銖。敗兵、若以銖稱鎰。

故ニ勝兵ハ鎰ヲ以テ銖ヲ稱ル若ク、敗兵ハ銖ヲ以テ鎰ヲ稱ルガゴトシ。

ゆゑに勝兵は百グラムの重さを以て敵の一グラムの輕さと天秤^{てんべん}にかけたやうなもので、敗兵は一銖の目方で、それに四百八十倍する一鎰の重味と對抗するやうなもので、秤は重い方に傾き、

軽い方は跳ね飛ばされる。

「銖、鎰」硬貨の計算で、二十四銖が兩、二十兩が鎰。

始計篇に説いた多算と小算とを計量してみせたのである。

勝者之戰、若決積水於千仞之谿者形也。

勝者ノ戰ハ、積水ヲ千仞ノ谿ニ決スルゴトキハ形也。

勝者の戦は充滿横溢した元氣をもつて、沮喪枯渴した敗者に打ちかゝるのであるから、堰き止めた水流を一千フキートもある谷底に向つて決潰したやうなもので、それは軍の形である。

「仞」八尺が一仞、一支尺は十センチばかり。「老子」世にも最も柔い（水の如き）ものは最も堅い敵を蹂躪し且つ勝つ。

兵勢第五 PING SHIH (Energy). V.

軍形の次に兵勢を置いたのは軍の形勢を二篇に割つたものである。勢は僕らが平常に使ひ慣れてゐる字でありながら他の文字を以て代置しにくい。孟子に、水は平掌で搏つて躍らせたなら額よりも高く跳ぶ、激して動かさせたなら丘の上へでも流れしめ得る、しかしそれは水の本性ではない。低いところを擇んで流れるのが水の素質であるが、跳躍するのは勢である。人の性は柔にして静なものだが指揮によつて奮ひ、闘ひ、激する。それは勢であり、勢をつけるのは主將の才略である。

孫子曰凡治衆、如治寡、分數是也。闘衆如闘寡、形名是也。

孫子曰ク凡ソ衆ヲ治ムル、寡ヲ治ムル如キハ分數コレ也。衆ヲ闘ハシムル、寡ヲ闘ハシムル如キハ形名コレ也。

凡そ大部隊を統率しても、小部隊を統率するやうに秩序正しく治め得られるのは分數（編制、組織）のためであり、多數を戦はしめても小數戦におけるやうに指揮操縦し得られるのは號令

(形名)の徹底にある。

「分數」分は上平(身分などには去聲)、小隊から中隊、中隊から大隊、聯隊、師團、軍團と集積完成して一箇の人格化するが故に一人でも一中隊でも一師團でも統御するに大小難易の別がない。「形名」現代では電信電話喇叭其他の傳令機關。春秋には旗、鐘、鼓などを用ひた、形とは旗、名とは音聲で鐘鼓をいふ。

一人の乞食に一錢を與へる憐みの心を推せば世界人類を生活苦から救つてやる大慈悲心となる。一圓をもうける原理は一億圓をもうける原理である。一小隊を指揮する原理は一師團を指揮する原理であるが、規模が大きくなれば組織を要する。

「吳子」鼓鐘は聽覺を聳動させ、旗幟は視神經を刺戟させ、刑罰は士卒の元氣を緊張させる。耳を威す喇叭は調子が亂れてはならぬ、眼を威す旗幟は鮮明でなくてはならぬ、精神を引き締める刑罰は峻嚴でなくてはならぬ。この三つが確立しなかつたら戦は負ける。故に一たび魔(ま)げば三軍は主將の意のやうに動き、主將の指さす方向に向つて士卒は前んで死するを厭はない。夫(こ)の鼓鐘金鐸、所以威耳、旌旗麾幟、所以威目、禁令刑罰、所以威心。耳威於聲、不可不清。目威於色、不可不明。心威於刑、不可不嚴。三者不立、雖有其國必敗於敵、故將之所麾、莫不從移、將之所指、莫不前死。

三軍之衆、可使畢受敵而無敗者、奇正是也。

三軍ノ衆、畢ク敵ヲ受ケテ敗ナカラシムベキハ奇正コレ也。

三軍の大衆が(左隊は苦戦し右翼は高味から見物してゐるやうな不揃ひなく)どの部隊もみな敵を引受けて敗れまいと働かしめるのは正面で戦ふ正兵と背後又は側面攻撃に出る奇兵との用法による。

「奇正」正は去聲(正月などには上平、正整などに上聲)、奇正と虚實とは兵家の最も力を入れて研究すべき題目である。魏の武帝の註に「正兵が敵に當り奇兵が傍から不備を撃つ」とある。尉繚子「正兵は前面攻撃に當り奇兵は背面を撃つ」李衛公「前面に直に進むのが正で旋回運動によるのが奇である」唐太宗「吾が企圖を敵に測知せしめず、不意の攻撃によつて敵に混雜を起さしめるのが奇である」。著者の私見では、敵をして勝つべからさらしめる備へ、が正であり、敵の敗形に乗ずる襲撃が奇である。潜水艦、航空母艦などが奇で戦闘艦隊が正である。春秋では正攻に車隊、奇襲に馬隊(騎兵)を用ひた。騎兵の任務は搜索、警戒の外、砲壞、衝鋒工作を爲し乘馬用刀、下馬用槍は現代でも行はれてゐる。奇兵は神速を尙び又た戦車隊の通過し難き細路にも便するため馬隊を

用ひた。騎を馬旁兒うまへんに奇と書くのは之れに基くのでないかと著者は偶感する。將棋でいへば金銀歩などは正兵で飛車角は正奇兩用であり、奇によつて弱卒を強兵に變ずる例として圭馬で王手飛車などの痛快な揮で、弱卒よく主將を擒にすることがある。正兵と正兵との衝突はたとひ勝つても死傷者が多いから損害少くして大勝を占めるのは奇兵に限る、歐洲大戰でドイツの潜水艇、飛行機は目ざましい活動をドウバア海底とロンドンの上空とで行つた。

春秋の陣立の詳細は後世に傳はらないが、吳子によれば、編制教練の法は、背丈の低い者に矛戟こを持たしめ、高い者には弓弩を持たしめ、力の強いものを旗手とし、勇氣のある者には進退を合圖する金鼓かねつを持たしめ、馬飼ひには弱い者を充て、智のある者は參謀として、同郷者は相比なべ、五人又は十人づゝ組合せ、第一の鼓で整列し、第二の鼓で演習し、第三の鼓は食事を報じ、第四鼓で嚴重に備へて待機し、第五鼓で進軍し、本隊から鳴らす鼓聲に合せて各支隊から鼓聲が起つたら旗を擧げる。教戰之令、短者持矛戟、長者持弓弩、强者持旌旗、勇者持金鼓、弱者給廩養、智者爲謀主、郷里相比、什伍相保、一鼓整兵、二鼓習陣、三鼓趨食、四鼓嚴辦、五鼓就行、聞鼓聲合、然後擧旗。初期のローマ軍團は歩兵を重甲兵と輕裝兵とに區分し、重甲兵は肩まで垂れた鐵兜をかぶり、胸甲と屈伸自在の鎧、脛當、手甲などを着け、長さ四フキート幅二フキートの楯を左手に、投槍ヒツを右

手に（敵と戰ふには先づこの投槍を投げる）。左に三フキートの長劍を差し右に短劍を差す。輕裝兵は頭に兜カスガ、左手に楯シールド、又は手楯テグサを持ち、右手には兵種によつて投石器、弓、戟を持ち、重甲兵の後に續くも整然たる隊伍はつくらなかつたらしい。

兵之所加、如以礮投卵者、虛實是也。

兵ノ加フルトコロ、礮ヲ以テ卵ニ投ズル如キハ虚實コレ也。

兵が攻撃を加へるところ、石塊をもつて卵に打ちつける如きは、吾が力の充實と敵の備への空虚との對照である。

「虚實」は解説に力を注ぐべき活文字であるが、次の虚實篇に譲つておく。文字拘泥主義でいへば空虚ホウキと堅實ケンジツである。

勝機を握つたら弱兵でも石のごとく強くなり、敗戦に突落されたら強兵でも卵の弱さとなる。空氣のやうな無力なものでも勢をつけたら疾風となつて高樓を倒す。

凡戰者、以正合、以奇勝。

凡ソ戦ハ正ヲ以テ合シ、奇ヲ以テ勝ツ。
すべて戦は正兵で相闘ひ、夷兵の働きで勝つ。

「老子」國の政治は正道、戦争には奇策。大江匡房の著と稱せられる闘戦記に「軍は進止あつて奇正なし」正とは常石の布陣、奇とはその運営と變化。

故善出奇者、無窮如天地。不竭如江河。終而復始、日月是也。死而復生、四時是也。

故ニ善ク奇ヲ出ス者、窮リナキコト天地ノ如ク、竭キザルコト江河ノ如シ。終リテ復タ始マル、日月是レ也、死シテ復タ生ク、四時コレ也。

ゆゑに善く奇計を出す者は智の行詰らないこと天地運行の無窮なる如く、謀の涸渴しないこと江河の流れてやまぬ如く、終つたかと思つて復た始まること日月の更々出沒する如く、死んだかと思へば復た甦つてくる四時の順環——それが奇兵の用である。

「老子」聖人は智を蓄積しないで、放出しても智は減じない、智を費しても益々餘裕がある。「中庸」淵や源のやうに智を蓄へて時を見てこれを出す。「日月」循環理法の物的證明。「老子」總ての

物は有から生じ、有は無から生じ、有無は互に生ずる。

「四時」夏が死んで秋が生じる。「老子」有と無とは相生じ、前行者があるから後續者がある。

聲不過五、五聲之變、不可勝聽也。色不過五、五色之變、不可勝觀也。味不過五、五味之變、不可勝嘗也。

聲ハ五ニ過ギザルモ五聲ノ變、勝ゲテ聽クベカラズ。色ハ五ニ過ギザルモ五色ノ變、勝ゲテ觀ルベカラズ。味ハ五ニ過ギザルモ五味ノ變、勝ゲテ嘗ムベカラズ。

音樂の原音は（宮商角徵羽の）五つに過ぎないが、その五つが變化すれば音樂の全部を聴き盡せないほど多趣多様となる。色彩は青黄赤白黒の五原色に過ぎないが、赤と青との間色から紫が生じ、濃淡調合による變化を數へたら視覚が混亂して見わけもつかないことになる。味は鹹苦酸辛甘の五味素から出てもその調理によつて味神經を昏迷せしめるほど種々の變化を生ずる。——以上は文法でいふ客、又は反。兵法でいふ虚。次の句を引出すべき働きをする、次の奇正が文法でいふ主、又は正。兵法でいふ實。

「老子」五色は人を盲にし、五聲は聾にし、甘味は味覺を誤らしめる。

コルネリユース、スキピオがカルタゴ人のハスドルバルを撃つためスペインに向けられた。ハスドルバルはローマ人が常用手段として精銳を中央に置くものと豫想し、主力を中央に配して相對せしめた。しかるに敵はその期待に反して勇敢なローマ軍團を左右翼に、最弱隊を中央に備へ、中央が逡巡して進みが緩徐なうちに兩翼は急速に突出し、中央の戦がまだ合しないうちにカルタゴ軍の兩翼が潰亂し、その敗走兵の雪崩が中央のしかつて來たから中央軍の隊伍も混雜して潰えてしまった。マキヤヴェリリの戰評にこの奇を用ひたローマ軍の戰術を、砲兵の進歩した戦に用ひたら勝敗の結果は反對となつたであらう。なぜならば中央軍がこの距離で躊躇することは砲撃の好き目標で、接戦するよりも損害は多いからである。しかし砲が進歩しても様式を變へた奇兵が常に勝を掌握することを忘れてはならぬ。同じ仕方を繰返せば奇兵でも詭道でもない、要するに時と處と敵とに應ずる變化である。

戰勢不過奇正、奇正之變、不可勝窮也。奇正相變、如循環之無端、孰能窮之哉。

戰勢ハ奇正ニ過ギザルモ奇正ノ變ハ勝ゲテ窮ムベカラズ。奇正相變ズル、循環ノ端ナキ如シ、

孰ガ能クコレヲ窮メンヤ。

戰の勢は無限に變化するが、その實は奇と正との二つに過ぎない。たゞ二つしかない奇と正との變轉は、とても窮め盡すことができない、そのはずだ、二つの變化は環に端がないやうなものだから、いくら窮追しても終點が見つかるものか？

In battle, there are not more than two method of attack—the direct and indirect; yet those two in combination give rise to an endless series of manœuvres. The direct and indirect lead on to each other in turn. It is like moving in a circle—you never come to an end. Who can exhaust the possibilities of their combination. (G)

正奇、虚實は宇宙の二大動力則ち陰陽である。これによつて天地間の萬有が生滅變化する。易の繫辭傳に「太極、兩儀を生ず」とある兩儀は陰陽で、物の表裏である。朱子は「陰陽はたゞ是れ一氣なり」といふも、要するに太極から分裂した一元二面である。辯證法的に觀れば正と奇とである。天地、晝夜、剛柔、強弱、勝敗、興亡、生死、虚實、消長など、字傍に圈點を附けたのが陽、附けてないのが陰で、二つが交錯表裏順環する。支那最古の哲學體系はたゞ易によつてのみ窺はれるが、孫子はこの理の中から必勝と必敗との二大原則を抽出してこれを兵法の根據としたものである。自

然界人間界に物質の消長する現象は神祕で捕捉し得られぬやうであるが、その奇術の種は、陰陽の二氣が規律の命ずるまゝに時と處とによつて離合して、起伏屈伸の動機を與へるに過ぎない。古代民族の原始生活の中で智的方面に、かやうな驚くべき大発見をして、八卦を重ねて六十四卦となしたゞそれだけで萬有の變化を説明したことは敬服の外に何物もない（ギリシヤの古代ヘシオドの觀念も宇宙論へ進む路を暗示して伏羲に似たところが多い）。現代科學の説明し得られない開示を自家に引き取つて勝敗の本原とした孫子も抜け目が無い。

老子。禍の陰に幸福があり、福の中に災禍が潛む、何人でもその終極を知るものはない、それは終極がないのだ。正が奇となり、善が悪となる。この眞理は人が昔から迷つて今でも迷つてゐる、實に長く繼續した根のいゝ迷ひ方だ。正を知つて奇襲を知らぬ、それは紙上談兵だ。

激水之疾、至於漂石者、勢也。鷲鳥之疾、至於毀折者、節也。

激水ノ疾キ、石ヲ漂ハスニ至ルハ勢ナリ、鷲鳥ノ疾キ、毀折ニ至ルハ節ナリ。

水は石より軽く柔い、石を押し流すは水の性ではないが、これを激せしめたら石でも翻弄する、その原理は勢の一字で説明され得る。猛禽が快速力を利用して小鳥の骨を毀き羽を折るに到る

のは、呼吸をはかり身を翻して突然の搏撃を與へるからである。

「節」機會をはぐさぬ、間の抜けぬ呼吸。

宣戰布告とともに多年蓄積した戰鬥力を發揮して咄嗟に敵の不意を攻撃するは「其勢險」である、大東亞戰の米英攻撃もそれであつた。

故善戰者、其勢險、其節短。

故ニ善ク戰フ者ハ其勢、險ニ。其節、端ナリ。

故に名將の戰は、勢ひ手厳しく、息づく間もなく。その機に乗じて加へる猛撃は、距離は短く、咄嗟である。

「勢險」兩崖が迫つて水路が狭くなれば水勢は激しく強くなる、險は險隘。「節短」遠距離から全力を出して攻めかけると途中で力が鈍るからちり／＼と押寄せ、間近くなつてから機を計つて急に突貫する。

飛行機でも速力がなかつたら飛べぬ、空中魚雷でも重味によつて速力が與へられるから命中炸裂するのは速力によつて勢が生じるのである。

勢如擴弩。節如發機。

勢トハ弩ヲ擴ル如ク、節トハ機ヲ發スル如シ。

勇氣の張りつめてゐること強弩を引きしぼつたやう。狙ひ違はず命中すること短距離に標的を置いて發條機を切つて放つたやう。

「弩」臺に取付けて左手で弦を引き右手で矢をつがへて速射する強弓、機關銃のやうな働きをする。

「節」前句に節短とあるから、目先に迫つて射撃するため、はづれることのない意。孟子、羿が人に射を教へるには必ず引きしぼつて發するその機に心をつけしめる。

紛紛紜紜、鬪亂而不可亂。渾渾沌沌、形圓而不可敗也。

紛紛々々、鬪ヒ亂レテ、而モ亂スベカラズ、渾々沌々、形圓クシテ、而モ敗ルベカラズ。

糸のもつれ糸れたやうに隊伍は混亂し旌旗は動揺して今にも雪崩れさうに見せて決して亂れない。渾沌茫漠として方形整形でなく、奇正が圓轉滑脱で捉へどころがないやうだが決して敗る

ことはできない（謙信が川中島で用ひ、山本勘助が見破つた車の陣である）。

この節以下は武帝のいふ毀形匿情で形を變へ情を匿し敵の聰明を蔽ふものである。「老子」銳き尖を磨りへらし、紛を解き、光りを曇らし、塵をかぶつて愚を裝ふ。道とは恍惚たるものであるが恍惚たるその中に象があり恍惚たる中に物があり、茫漠たる中に神髓がある。

亂生於治、怯生於勇、弱生於強。

亂ハ治ヨリ生ジ、怯ハ勇ヨリ生ジ、弱ハ強ヨリ生ズ。

亂れたやうに見せかけてもその實は治まり、卑怯なやうに見せても本當は勇氣があつて、勇氣から出た贗せ臆病であり、弱を示すのは敵を誑かすために、強から生じた詭計であると、そんなに大儒家は註解してゐるが、それは甘い俗解であつて、亂生於治を治生於亂と、怯生於勇を勇生於怯と、弱生於強を強生於弱と逆か様にしても同じやうに解説ができなくては淺墓である。

解説はどんなにでも力に應じてなし得られる、こゝは孫子の戦争哲理であるから原稿紙三枚をつかつて踏ん張つてみやう。何か手近な例で云はう？ さうだ、この本を書いてゐる僕の解説は拙いのに引きかへて對照せる孫子の原文は立派なものだが、僕の筆が拙ければ拙いほど孫子が引立つと

せば僕は孫子を引立てるについては偉大な功勞者である、と云つても著述家たる僕の兵法で、讀者を奇襲するのではない。僕が弱いから孫子が強い、強いから孫子が勝つて僕が負ける。僕が負けなかつたら孫子は勝てないといふのは弱い僕と強い孫子とが相對原理の土俵に立つからだ。故に孫子を勝たせたのは僕で、僕の働きで孫子を勝たせたのだから僕は孫子より強いともいへるが、孫子あつて僕が負けたのだから孫子は僕より強いとも大きいともいへる。だから、勝つ者は負ける者によつて製造された者で、負ける者は勝つ者から生じたもの、そこで「亂は治より生じ」でも「治は亂より生じ」でも「弱は強より生じ」でも「強は弱より生じ」でも同じことで循環輪廻である。これは前に述べた俗説より一段高級なものであるが、もつと進んで戰爭哲學の横腹を抉らう——老子はいふ、有は無であり無は有である、釋尊はいふ、色は空で空は色であると、僕は老子と釋尊との假聲をつかつて説かう。強は弱であり弱は強であり治は亂であり奇は正であり虚は實であり實は虚であり正は奇であり弱い僕は孫子であり強い孫子は僕であるが、その實は孫子は強くなく僕は弱くはない。蝶が莊子が孫子が蝶か。獅子が蝴蝶か蝴蝶が獅子か、渾々沌々紛々紜々として識別できない妙境は石橋の獅子遊戲が三昧に入つたもの、そこが禪の解脱 Vimukti で孫子十三篇を貫く指導原理。老子はこの不立文字を要妙 A mystery of great import to S. 4.

治亂數也。勇怯勢也。彊弱形也。

亂ヲ治ムルハ數也、怯ヲ勇ニスルハ勢也、弱ヲ彊クスルハ形也。

亂れやうとするを治めるのは分數（編隊）の宜しきによる。臆病ものに勇氣をつけるのは勢ひである（勢に乗せしめたら怯者も勇氣を起す）。弱き兵を強くするは形（地形、軍形）次第である。

將軍の設計によつて弱が強となり、治が亂となる。軍隊は粘土みたくで陶工次第で宗廟の祭器となり、共同便所の便器となり、花瓶となり、電氣の碍子ともなる。

故善動敵者形之敵必從之、予之敵必取之。

故ニ善ク敵ヲ動カス者ハ、之ニ形スレバ敵必ズコレニ從ヒ、之レニ予フレバ敵必ラズ之レヲ取ル。

（敵が正攻法により陣形を整へ、乗すべき隙のない時は敵を移動せしめる。靜止には不敗の地に立つ敵でも動いた時には虚が生ずるものである）故に敵を動かすに巧みな將は、敵に敗形を

見せたら敵はその誘惑にかゝつて攻めてくる。有利な餌を與へたら敵は必ずそれを取らうとして動く。

「予之」金錢糧食から要害、河川、都市など有利なもの一切を之の字に包括させる。予は動詞、上聲、與に同じ（第一人稱代名詞には下平で余に同じ）。孫臋が龐涓を破つた兵法。「利で誘惑されたものは針があると知らずして餌に食ひつく、食ひついたら百年目である。」

以利動之、以卒待之。

利ヲ以テ之ヲ動カシ、卒ヲ以ツテ之レヲ待ツ。

敵のほしがる利を見せて敵を誘ひ出し、卒伍を整へて待機する。

老子、結構な貨を見せびらかせば人に盗心を起させ、欲しがるものを見せつけたら利のために人の心は亂れる」鯛が海老で釣られる。

故善戰者、求之於勢、不責之於人。故能擇人任勢。

故ニ善ク戰フ者ハ之レヲ勢ニ求メテ、コレヲ人ニ責メズ。故ニ能ク人ヲ擇ビテ勢ニ任ス。

良將は勝を軍の大勢の上に求めて個々人に責めない。故によく適處に適材を選任配置して勝負を大勢に一任する。

個々人に強い責任を負はせ、正面から揉み合ふだけなら兵法はいらぬ。弱い兵をつかつて勝つのが兵法の奥儀である。勇を負んで猛進する敵と、計畫の範圍に進退する吾が兵との感念形態の喰ひ違ひが勝敗を生ずる。

「擇人任勢」車騎歩の各兵種をその性能に應じて各自の戰鬥力を發揮せしめ一の軍勢をつくる。人は用ひやうによつて、どんなにでも役に立たせ得るから怯勇強弱智愚の渾一體の上に勢を立てる。「老子」智ある人は常によく人を救ひ用ひるから、どんな人でも棄てない。どんな物でも棄てずに役立てる。かゝる人の明智は全包括的である。

任勢者、其戰人也。如轉木石。木右之性、安則靜、危則動、方則止、圓則行。

勢ニ任ズル者ハ、ソノ人ヲ戰ハスヤ木石ヲ轉バス如シ。木石ノ性ハ、安ケレバ靜ニ、危ケレバ動キ、方ナレバ止マリ、圓ナレバ行ク。

勢を利用する良將は、部下の兵卒を戦はしめること木や石を轉ばすやうに操縦する。木石には知

覺も意識もないから安定させたら靜かで傾斜したところに置けば動く、四角にすれば休止し圓くすれば轉んで行く。

個性の主張がない寒巖枯木のやうな兵卒が却つて使ひいゝ。「老子」物は韃である、韃に個性の主義があつては困る、鍛冶屋の思ふやうになつてゐたらそれでいゝが、韃から注文をつけて強く押せとか弱く引けとか勝手な主張をしては鍛冶屋が迷惑する。士卒も頭を空つぽにして黙つて服従してゐたら主將が勢をつけてくれるから、その調子に合わせて踊るのが上兵である。韃でも始めの二三回は強い力も要るが勢がついたら力はいらぬ、しかも金鐵でも鏘かす熱を吹く。いかなる物でも動かしてみせる、動いたら勢が生じる。

故戰人之勢、如轉圓石於千仞之山者勢也。

故二人ヲ戰ハシムル勢ハ、圓石ヲ千仞ノ山ヨリ轉ズル如シ。勢ナリ。

人をして全力を效し、或は全力以上の力を出して戦はしめる勢は、圓い石を幾千メートルの高峯から轉がしたやうで一轉は一轉より急に、轉ずることに強さを加へる、それは勢である。

春秋には二つの大きな系列が並んで行進した、一は社會的規範としての道德律であり、他の一は

それを破壊する戦争であつた。破壊力は常に拘束力より強いから儒家が建て、行くあとから軍人がそれを打ちこはして行つた。戦争が道德より強いことは戦争の支持者が多かつたことから考へても諒解される。なぜ大衆は道德を棄て、戦争を拍手するか？ それにはその理由がある。

闘争は總ての動物（人は勿論）に内在する闘争本能の發現であつて、對者の征服を意慾とする武力行爲である。社會生活において分離力の最も強いのは闘争に及ぶものがない。支那戰史の筆甫めは黄帝軒轅氏であつたが、それ以前にも局地戦は處々に演ぜられたことはいふまでもない、たゞ黄帝によつて闘争が集團的となつたまでである。吾ら人類は何のために殺し合はねばならぬか、ラツエンフオーファの説では、性慾が闘争の根源であるといふ、性慾ではない食慾が起源であるとする對立説もあるが、性慾は異性に對する執念が根強く、排他性を持ち、その對象物は決して代用品をもつて満足し能はぬ點は食慾の上に在る。歌舞伎でも一人の女を挟んで二人の男が相當を演じる、第三者からみれば他にもつといゝ女もあらうから、何も不自由たらしく彼女のみに喰ひさがらなくとも好ささうに思はれるが、當事者に取つては意地と、異性に對する偏倚傾向と、獨占慾と、克服感とで飽くまでも、時としては生命を抛つても争奪を續ける。映畫でも小説でも低級なもの、情念を煽るために、へたな作家はこんな原始的な取材で筋書をつくる。かやうに闘争が本能から始まり、

社會が組織されるやうになつては人口増加から食物土地の争奪となり、物質觀念の向上から器物寶貨の獲得にまで發達し、個人と個人との小ぜり合ひから團體と團體、結社と結社、民族と民族、國家と國家といつたやうに闘争體の單位が闊を擴げ、兵法まで案出されるやうになつて闘争が戰爭の形態を取るに到り、愛他的感情は麻痺し、他人を憐んでぼんやりしてゐるうちに自分は横合から打倒されるから同情は影を武力に譲り、國際外交の辭令は道徳らしいが、國家は武裝の上に道徳の法衣を纏つてゐるに過ぎない。結論としては——もし好戰本能が道徳及び道徳律よりも多量に盛られて人間がこの世に生れこの社會を構へてゐるものとせば、僕らば、僕等の子孫は——僕らの祖先が争つたやうに、いつ迄も戰爭史を反復するであらう。そして戦ふとなれば負けてはつまらない、僕らは勝たねばならぬ、人を倒すのはいやだが人から倒されるのは尙ほいやだ。人から倒されない覺悟は持たいたいものだ。僕らは緊張に生きて緊張に死ぬ、人の罪か、造物者の罪か。

虚實第六 HSU SHIH. (Weak point and strong) VI.

虚と實とが變化して戰爭の妙味を發揮すること陰陽の表裏をなす如し。

唐、太宗「朕は諸くの兵書を読んだが孫子に優つたものを見ない、孫子十三篇の中で虚實より優つたものはない。」

孫子曰凡先處戰地而待敵者佚。後處戰地而趨戰者勞。故善戰者致人而不致於人。

孫子曰ク凡ソ先ニ戰地ニ處シテ敵ヲ待ツ者ハ佚シ。後レテ戰地ニ處シテ戰ニ趨ク者ハ勞ス。故ニ善ク戰フ者ハ人ヲ致シテ人ニ致サレズ。

すべて敵に先だつて戦地にゐて戦闘の處理をして待機状態に在る者はらく(佚)をするが、後れて戦地に達し交戦の手筈が定まらずして戦闘に入る者は勞れる。故に戦に熟達した名將は、

人を我が意圖の下に引付けて自由にこなすが、人に引付けられて彼れの思ふ壺にはめられない。「致人」の句は一篇を貫通した精神が籠められてゐる。能動者となつて自主的に計を仕かける側に立つべく、被動の側に立ち敵の受け身となつてはならぬ。「老子」智者は他人から親むことも疎んずることも利することも害することも貴くすることも賤しくすることもできない、ゆゑに彼れは天下の至貴とされる。

碁を打つにしても先手を握つて後手に廻らないのを勝法といふ。先手をとれば、「人を致す」が後手に廻れば「人に致される」人に致されて勝つた例はないこと碁に限らぬ。

能使敵人自至者、利之也。能使敵人不得至者、害之也。

能ク敵人ヲシテ自ラ至ラシムルハ、之レヲ利スレバ也。能ク敵人ヲシテ至ルヲ得ザラシムルハ之レヲ害スレバ也。

敵が彼自身好んで、吾が張り廻はした網の中へ這入つてくるのは、利をもつて彼らを誘致するからである。敵をして吾が痛い地點を衝かしめないのは、そこへ行つたら害があると誤認するやうに仕向けるからである。

虚を示してこゝを擣けと畏を張れば敵は注文にはまつてそこを攻撃してくる。實を示してこゝを攻めてくれば強く反撃してやるとの身振りをしたら敵は恐れて近づかない。

故敵佚能勞之、飽能飢之、安能動之、出其不趨、趨其所不意。

故ニ敵、佚スレバ能ク之ヲ勞セシメ、飽ケベ能ク之レヲ動カシメ。安ンズレバ能ク之レヲ動カシメ、其ノ趨カザル所ニ出デ、其ノ意ハザル所ニ趨ク。

敵が先づ佚な地歩を占め我が勞を待てば、吾が不利であるから（前篇の敵を動かす策、この篇の敵をして自ら至らしめる策をもつて）敵を勞せしめよ。敵が食料を豊富に持つてゐる時はこれを飢ゑしめよ。敵が安定してゐる時は之を動搖せしめよ。敵の守備の手薄な所に突出し佚を以て勞を待て（獵師が鹿の通る道を熟知してゐるやうに）。敵の意はざる虚を擣け。

「飽能飢之」この四字を巧みに講じた例はないが、著者はふと適例を想起した。毛利元就が富田城を包圍し時、敵を飢ゑしめることを謀り關所を城の四方に設け「必らず敵を殲にせよ、一人をも逃がすな」と榜をしたから非戦闘員まで城に残つて兵糧を喰ひ盡した。もう兵糧の盡きた頃と見て、榜を「隆參するものは釋す」と改めたら城中のもの殆んど降參した。

行千里不勞者、行無人之地也。攻而必取者、攻其所不守也。守而固者、守其所不攻也。

千里ヲ行キテ勞レザルハ無人ノ地ヲ行ケバ也。攻メテ必ズ取ルハ其守ラザル所ヲ攻ムレバ也。守リテ固キハ其攻メザル所ヲ守レバ也。

千里の遠征にも疲れないのは無抵抗の地を行軍するからである。攻むれば必らず取るのは敵の無防備な虚を撃つからである。守つて堅固不拔なのは敵が攻め能はぬ急所を守るからである。徳を以て敵を服せしめる儒教主義と、謀を以て敵に克つ兵法とは出發點は違つても同じやうな結果になる。

故善攻者、敵不知其所守。善守者、敵不知其所攻。

故ニ善ク攻ムル者ハ、敵ソノ守ル所ヲ知ラズ。善ク守ル者ハ、敵ソノ攻ムル所ヲ知ラズ。

善く攻める者に對しては、相手方はどこを守つていゝかに迷ひ。善く守れば敵はどこから攻めていゝかの見當が付かない（虚を見出すことができない）。

守るべき急所を棄て、不急な地點を守り、攻むべき弱點を攻めずして敵の待構へてゐる強所を攻

めたらその結果は負けるより仕方がない。

微乎微乎、至於無形。神乎神乎、至於無聲。故能爲敵之司命。

微ナルカナ微ナルカナ、無形ニ至ル。神ナルカナ神ナルカナ、無聲ニ至ル。故ニ能ク敵ノ司命ヲ爲ス。

この一節は哲學の極意と契合する——微なるかな微妙なるかな。微窮つて無形に至る。神なるよ、又た神秘であるよ、人を離れて神に達する、神には聲もない形もない、その神である。活殺自在の利劍は我が掌中に在る。（用兵の妙處に達すれば十萬の大軍も寂として聲なく漠として形なく、敵をして見る能はず聞く能はざるに到らしめ得る）。

老子。これを見ても見えないもの、名づけて夷といふ。これを聴いても聴えないもの、名づけて希といふ。これを搏つても搏てないもの、名づけて微といふ。この三つは思索究理し得られないから混一體となる。上にあつても明かに捕捉できず、低いところにあつても味くない、活動が絶間なく、無物に歸着する。これを狀なき狀、象のない象といひ、又た惚恍ともいふ、前から見ても首を見能はぬ、後に行つても尾を見得られない。

進而不可禦者、衝其虚也、退而不可追者、速而不可及也。

進ミテ禦グベカラザルハ其虚ヲ衝ケバ也。退キテ追フベカルラザハ速クシテ及ブベカラザレバ也。

進軍を、敵が防禦する能はざるとは、その虚を搦くからである。退軍を、敵が進撃し能はぬとは、拙速主義で決断するから進退共に快速で敵に及ばれないのである。

頽淵。喟然として嘆じて曰く、之を仰げば彌々高く、之れを鑽れば鑽るほど堅くなつて鑽れない、之を瞻れば前に在るが突然後にある（これは聖人の聖をいつたもので又た兵法の奥儀である）。

故我欲戰、敵雖高壘深溝、不得_レ不_レ與_レ我戰者、攻其所必救也。我不欲戰、雖畫地而守之、敵不得_レ與_レ我戰者、乖其所之也。

故ニ我戰ハント欲セバ、敵、壘ヲ高クシ溝ヲ深クスト雖モ、我ト戰ハザルヲ得ザルハ、其ノ必ラス救フ所ヲ攻ムレバ也。我戰ヒヲ欲セザレバ地ニ畫シテ之ヲ守ルト雖モ敵、我ト戰フヲ得ザルハ其之ク所ヲ乖メバ也。

故に我れから決戦を希望する時は、たとひ敵が壘を高くし溝を深くし戦を避けて守備を嚴にすとも、どうしても城を出て會戦せねばならないやうになるのは何故か、それは敵が城を出て救はねばならぬ急所を攻めるからである。こちらが戦ふまいとすれば地上に一線を畫するだけの無防備でも、敵は決して我を攻めないであらう、それは敵が進み之く先に何かの計略があつて敵を誘ふのではないかと疑懼せしめるからである。

劍道の達人からみれば相手は隙（虚）だらけであるから、どこからでも打ち込める。

故形人而我無形、則我專而敵分。

故ニ人ニ形シテ而モ我ニ形ナシ、則チ我專ラニシテ敵分ル。

故に人に形を示してもそれは眞の形ではなく敵の視覚を誤らせる象で（敵の捉へたのは我が實形ではない）（沙漠で水に渴した旅人が雨雲をみ、オアシスを錯覚するやうな詭計に引つかゝる）。我が力は彼れを撃つに専らであるが、彼れの心力は分散して稀薄となり、弱點だらけとなる。

釋尊のいふ「雲駛くして月を運ぶ」もので輪廻の迷ひである。走つてゐる汽車の窓からは樹も電

柱も後へ飛んで、動いてゐる汽車自體の動きを感じない。キネマのトリックは汽車をその儘として背景の樹、山、電柱を動かせば汽車が動いてゐるやうに眼の錯覺を起させる。兵の詭計は敵に形を見せるがそれは本當の形でないから我が實相を窺知する能はず左右前後に防備を施して彼れの力は分れ、我はその中の最も手薄な地點に向つて全力を擧げて伐つことができる。

我專爲一、敵分爲十、是以十攻其一也、則我衆而敵寡。能以衆擊寡者、則吾之所與戰者約矣。

我專ラニシテ一トナリ、敵分レテ十トナル。是レ十ヲ以テ其一ヲ攻ムル也。則チ我ハ衆ニシテ敵ハ寡。能ク衆ヲ以テ寡ヲ撃ツトハ、吾ガ與ニ戰フトコロハ約ナリ。

(對等の兵數で戰ふとして) 我は専らで一路直前し、敵は兵力を分けて十ヶ處に配置すれば、我が十の力を以て彼れの一に對すればいゝ計算となるから我が實戰に参加する兵數は衆く敵は寡い。能く衆を以て寡を撃つとは、吾が戰ふところの戰鬥力が一方に要約されてゐることである。

「約」はこの節の字眼であるが、それを満足に解いたものがないのは遺憾である。(一)約は小數で、敵は數が少い意。(二)約は節約で、我が兵力を節約し得られる。(三)約は急所、かんじん

な所を撃つ。(四)大約、味方は大數になる、などの諸説あるが、著者の見解では約は要約の意で、戰場が一の焦點に集約され、わが全力がこゝに傾注される「小地域に約られる」。

吾所與戰之地不可知。不可知則敵所備者多。敵所備者多則吾所與戰者寡矣。

吾ガ與ニ戰フ所ノ地、知ルベカラズ。知ルベカラザレバ敵備フル所多シ。敵備フル所多ケレバ、吾ガ與ニ戰フ所ノ者ハ寡シ。

吾が兵がどこに進出するか敵に知られない。知られないため敵は兵力を分つて處々に備へねばならぬから防備線は廣汎になり稀薄になる。廣汎になり稀薄になればなるほど吾と會戰する敵の數は寡なくなる。

敵兵は多くとも戰鬥力が散漫になつてゐるから實戰に参加する兵數は少い。

故備前則後寡、備後則前寡。備左則右寡、備右則左寡。無所不備、則無所不寡。寡者備人也、衆者使人備己者也。

故ニ前ニ備フレバ後寡ク、後ニ備フレバ前寡ク、左ニ備フレバ右寡ク、右ニ備フレバ左寡ク、備ヘザル所ナケレバ寡カラザル所ナシ。寡キトハ人ニ備フレバ也。衆シトハ人ヲシテ已ニ備ヘシムレバ也。

故に戦地を測り知らない結果として敵は前に備へたら後の防備が薄弱になり、後に備へたら前が少くなり、左に備へたら右が手薄になり、右に備へたら左が危くなる。前後左右に總て配置すれば前後左右が總て弱くなる」寡くなる理由は敵に備へて無駄な配置をするからであり、衆くなるとは敵をして我に備へしめて彼の兵力を分たしめるからである。

一藝に熟達せんとせず、何でもかんでも手當り次第に學んでも名人になれぬ、人間の智力に限りがあるように、限りある兵力がばらばらになつては命令系統が紊れ、牛乳に十倍の水を混ぜたように、乳か水かゞわからぬ。營養價値はなくなつてしまふ。

故に知戦之地、知戦之日、則可千里而會戰。不知戦地則左不能救、右不能救、左前不能救、後不能救、前而況遠者數十里、近者數里乎。

故ニ戦ノ地ヲ知り戦ノ日ヲ知レバ千里ニシテ會戰スベク、戦地ヲ知ラザレバ左ハ右ヲ救フ能ハズ、

前ハ後ヲ救フ能ハズ、後ハ前ヲ救フ能ハズ。況ンヤ遠キハ數十里近キモ數里ナルヲヤ。

故に（人を致し、敵を我が都合のよい）戦ふべき地と戦ふべき日とに誘致すれば（我に用意あり我に計畫があるから）千里の遠きに戦ふ不利を償つて餘りあるが、（然らずして敵に致されて）無準備に戦へば総合的に陣容が整へてないため個々に敵を受けて有機的に軍の全機能を發揮されないから右が左を、前が後を救ふこともできない、況んや遠きは數十里、近きも數里の戦線に展開する吾軍の聯絡が完全に取れるものでない。

「戦闘指揮の主眼は絶えず主動の地位を確保すると共に敵を致して其意表に出で、敵の豫期せざる地點と時期とに於て之に決戦を強ひ云々」戦闘綱要。

以吾度之、越人之兵雖多、亦奚益於勝敗哉。

吾ヲ以テ之レヲ度レバ越人ノ兵多シト雖モ亦タ奚ソ勝敗ニ益アラン哉。

吾が吳國を以て巧みに作戦計畫を立てたならば、彼れ越人の兵は多くとも（彼れの力を分つたならば、兵の多いことは）必らずしも勝敗の數に有利なものではない。

大東亞戰において昭和十七年二月二日のワシントン・スター紙は「吾々は日本の準備について無

知であつた、勝利は決して奇蹟でなくして周到な準備と最も重要な地點に優勢な兵力を集中し得る力を持ち得て初めて勝利を獲得される、アメリカはこの大切な點を悟らずして大失敗を演じた」

故曰勝可爲也。敵雖衆、可使無鬪。

故ニ曰ク勝チ爲スベシ。敵、衆ト雖モ鬪フナカラシムベシ。

故にいふ、勝は謀によつて爲り得らる。敵の數は多くとも戦に参加する實數を少くし得られる（それは彼をして前後左右に備へしめて大部分を實戦に用ひざらしめる）。

將棋でも、へたな指手には遊び駒が多いから、たとひ角落ちで指してもらつても角以上に澤山に遊んで働かない駒ができて結局は負けとなる。

故策之而知得失之計、候之而知動靜之理、形之而知死生之地、角之而知有餘不足之處。

故ニ之レヲ策リテ得失ノ計ヲ知り、之レヲ候ヒテ動靜ノ理ヲ知り、之レヲ形シテ死生ノ地ヲ知り、之レニ角レテ有餘不足ノ處ヲ知ル。

故に豫め成算を定めて得（利）失（不利）の計を知り、更に斥候（其他の法）をもつて敵の動靜の理を察し、敵に虚又は實の形を示して敵の出やうによつて死（敗）生（勝）の地を知り、まだ足らなければ（強襲を試み）敵に觸れて戰鬥力の充實してゐるところと不足してゐるところを知る。

吳子、武あつて文のないのは良將ではない、剛氣で突張つて柔味のない戦争の結果はよろしくない。世人は勇をもつて將軍たる資格の全部のやうに思ふが、それは大きな誤である。勇は無論必要なものであるが將の構成要件の一片に過ぎない。勇氣のある者は持重心に缺け軽々しく戦を開くが、軽々しく始めて勝利の打算に暗いのは、まだ將軍としての修行が不足だ。夫總文武者軍之將也、兼剛柔者兵之事也。凡人論將常觀於勇、勇之於將乃數分之一耳。夫勇者輕合、輕合而不知利、未可也。

故形兵之極、至於無形。無形、深間不能窺、智者不能謀。

故ニ兵ヲ形ス極ハ無形ニ至ル。形チケレバ深間モ窺フ能ハズ、智者モ謀ル能ハズ。或は虚を示し或は實を示して敵の視聽を攪亂せしめ、我が眞の形を捕捉し得ざらしめる、それ

が形兵といふのであるが敵の虚を抽出する一的手段であつて錯覺に陥つた敵の眼からは我が形を認め難く、無形と同じ状態の下に置かれる。無形であるが故に深く忍び込んだ間諜も機密を窺知することができず、智ある參謀でも我に勝つ奇謀を出すことができない。

無形に至るは、軍の行動がどこに向くか、主將は何を考へてゐるか、さういふことを模索し得られないから形がないのと同然であるといふのは俗解である。蟻が象の全貌を見能はぬやうに又た亂視の眼を以て正視し能はぬやうに正しい形を捉へ能はぬとするは正解によほど近づいてゐるが、老子に「明かな道は昧いやう、平かな道は凹凸のやう、進む道は退いてゐるやう、廣い徳はぬけてゐるやう、大器は晩成で、大きな音は聲がなく、大きな象は形がない」といふ哲理を兵法化したものである。

因形而措勝於衆、衆不能知、人皆知、我所以勝之形、而莫知、吾所以制勝之形。

形ニ因リテ勝ヲ衆ニ措ク、衆知ル能ハズ、人ミナ我ガ勝ツユエンノ形ヲ知ルモ、吾ガ勝ヲ制スルユエンノ形ヲ知ルナシ。

敵の軍形に順應して勝を敵の上に置くが、兵衆は何のために行動してゐるかの理由を解し能は

ぬ、人はみな我が勝つた理由を事後において知り得るも勝を制つた動因を知るのではない。

とうの昔に敵の主將はいつの間にかへ去つてしまつて向うの陣營には旌旗は立ち列んでゐるが、たゞ疑兵が置いてあるだけで主將は歸つてこないで、も抜けの殻の黄鶴樓は白雲の下にいつまでも靜かである。昔人已乘白雲去、此地空餘黃鶴樓、黃鶴一去不復反、白雲千載空悠悠、晴川歷歷漢陽樹、芳艸萋萋鸚鵡洲、日暮鄉關何處是、烟波江上使人愁。川を前にした敵營は樹立に隠れて下には芳草が繁つて敵は要處を占めてゐるから容易に攻撃することもできず、日暮れ故郷は遠く將士歸るを懐ひ、敵にはどんな深謀遠慮があるか、烟波が江上を蔽うて敵の主力はどこにあるか、作戦計畫の如何に迷はされて、一軍みな憂鬱に沈む、憂鬱に沈んだら負けだ。これが不知其所攻であり、微乎微乎至於無形でもあり。無形であり、所與戰之地不可知であり、總じてこれをいへば超虚實である。

故其戰勝不復、而應形無窮。

故ニ其戰勝ヘ復タセズ、形ニ無窮ニ應ズ。

故に戰に勝つても同一の計畫を反復せず、窮りなく敵の變化に應じて勝算を立てる。

馬鹿の一つ覚え、奇策でも度々繰返へしたら奇らしい策でなくなる。時と處とに應じて變化するから奇策である、しかし敵の不意に出るといふ原理は動かない。

夫兵形象水、水之形、避高而趨下。兵之形、避實而擊虛。水因地而制流、兵因敵而制勝。

夫レ兵形ハ水ニ象ル。水ノ形ハ高キヲ避ケテ下ニ趨ク。兵ノ形ハ實ヲ避ケテ虚ヲ撃ツ。水ハ地ニ因リテ流ヲ制シ、兵ハ敵ニ因リテ勝ヲ制ス。

夫れ兵の形は水から象を取る（水も兵も同じ理法の上に立つ）。水の形が高きを避けて低きに趨くが如く、兵は敵の充實せる戦線を避けて虚弱なところを撃つ。水は地形に従つて無理のない路に流れを定め、兵は敵の出やう次第で勝を定める。

科學でも水壓を利用すれば一個の魚雷で戦艦を解體せしめ得る。

故兵無常勢、水無常形。能因敵變化而取勝者、謂之神。

故ニ兵ニ常勢ナク、水ニ常形ナシ。能ク敵ニ因リ變化シテ勝ヲ取ル、之レヲ神トイフ。

故に兵に固定した勢のないことは水に一定の形態のないのと同じ。能く敵の動きに順つて變化して勝を取る。これを神といふ。

漢文では人智の彼方にある或る動きを神といふ例は甚だ多い。人智が極度に發達すれば行動の痕は神の行爲に似てくる。

故五行無常勝、四時無常位。日有短長、月有死生。

故ニ五行ニ常勝ナク、四時ニ常位ナク、日ニ短長アリ、月ニ死生アリ。

（五行説では、木火土金水が方位により年、月又は日によつて人に禍福を下し、木は土に勝つても金には負け、金は土に勝つても火に負けるなど迷信らしく又た理窟に合つたやうな傳説がある）五行にも常の勝がなく常に運行する。春夏秋冬も常に同一の位置を占めずして順環する。日は夏に長く冬に短く、月にも満盈がある、すべての物は絶えず變化する、戦のみこの理を外づれるはずはない。

釋尊が雞園寺に赴く路すがら文殊と普賢との二菩薩にいふ「一切の世界には始あり終あり、短あるが故に長あり、死あるから生がある相對の感念は念から念へ續きて運行循環變化する。これが輪

廻である。山鹿素行、大將八の心得を述べていふ、天不可頼、地不可頼、人不可頼、衆不可頼、官位不可頼、理不可頼、兵法不可頼、よろづのもの、かならずとすること勿れ、かならずとする時は怠あり、おこりあり。

五行説は易の深奥な哲理から派生した學説であるが、これに迷信を附け加へて妙なものにしてしまつた。原理が解りにくいから迷信の方が本家のやうに蔓つて周末から戦國へ、それから漢代へと年を追つて盛んになり、そこへ陰陽家といふ異端學者が現れて周易の理に曆法を配し自然現象を加へた説を立て、これに従つたものは榮え、これに背いたものは衰へるとし、鬼門、結婚の合ひ性、開業日の吉凶、旅行の吉日、恵方、家相、墓相などを捻つて一家を成すに到つた。日本では平安朝以後に隆盛を極め、今日に到つても相當に信仰者を持つてゐる。特に冒險的事業に従事する人（船員、相場師、旅行家、軍人）には信仰の程度が強かつた。（宇宙論と人生觀とを盛つた哲學の變種が陰陽五行説である）。

軍争第七 CHUN CHENG (Battle tactics). VII.

軍争とは相對して利を争ふことである。孟子は篇首から利を一蹴して仁義を説いた。それは儒學の立場である、兵法家は倫理的にお上品に構へる必要はない。孫子に仁義を注文するのは喧嘩した打撲傷の治療を宗教家に持込むやうなものだ。僕らはこの篇において孫子の「利」を傾聴しやう。

孫子曰凡用兵之法、將受命於君、合軍聚衆、交和而舍、莫難於軍争。

孫子曰ク凡ソ用兵ノ法ハ、將、命ヲ君ニ受ケ、軍ヲ合セ衆ヲ聚メ、交和シテ舍ス。軍争ヨリ難キハ莫シ。

凡そ用兵の法たる、主將が君命を受け、各邑の軍を合せ各郷の民衆を聚め、交々和睦協調して舍營する（各種各様の個性を綜合して有機的一體とし、これを意のままに使つて決戦せしめるのであるから）軍争よりむづかしいものはなし。

春秋には常備兵がなく農民の手から鋏を取つて代へるに劍を以てし、戦争は他の領土を侵略することによつて富が持來されると慾念を國民に注入し、軍人に對しては位階、土地、利益の分配によつて忠誠を強ひた。

平和は戦争と戦争との間の息つきに過ぎなかつた、平和の時が戦争の時より長かつたかも知れないが百年かゝつて建設したものを一日で破壊するから戦争は平和より長かつたともいへる、春秋から戦國へかけては擬人化せられた集團の決闘、争奪の連続であつた、小さな集團が勝利によつて急速に飛躍し、百里に過ぎなかつた吳越が六千方里の地域を領有し、戦勝地には戦敗國からの分捕寶貨が貢物とともに積み上げられ首府の繁榮を招いたこと歐洲大戰後の紐育に類した。

必然の計畫が偶然の機會に投じ效力を戦争の結果に及ぼしたのを史家は名將として許すが、名將とはそんな單純な出來合品ではなくして智慮、戦術、人望、勇氣、これら複雑な要素の集合構成であるが、運も手傳ふ。人間の智力の及ばない空間が兩軍の間に存在するから敵が思ふ壺に嵌つてくれたら唐將でも大功を建て得られる、勝負は敵の出やう次第であるから戦争は金に始まつて術を過ぎ運に終る。孫子は術を認めて運を認めない。

軍争之難者、以迂爲直、以患爲利。

軍争ノ難キハ、迂ヲ以テ直ト爲シ、患ヲ以テ利ト爲セバ也。

軍争の難しいのは（次節に説くやうに）迂餘曲折した遠路を直線の近道とし、患を變じて利益とする（そこがむづかしいのである）。

老子、曲れば全し、枉れば直線、窪めば盈つ、弊れば新し、少ければ得、多ければ惑ふ。

故迂其塗、而誘之以利。後人發、先人至。此知迂直之計者也。

故ニソノ塗ヲ迂シ、之レヲ誘フニ利ヲ以テシ、人ニ後レテ發シ、人ニ先ダツテ至ル。此レ迂直ノ計ヲ知ル者也。

故に進軍の途を迂回して、敵を誘惑するに利を以てし敵の注意を他方面に反らせ、敵に後れて出發しても敵に先を越して目的地に達する、つれを迂直の計を知るといふ。

たとひ距離は近くとも險阻があつたり敵の抵抗があらば、時と力とを費すから近くとも遠いと云はねばならぬ。遠くとも無抵抗な——坦々なる無礙の大道を進んで敵の虚に出たならば遠く迂つても近き路を突破したより効果的である。それを迂直といふ。孫子は玉碎戦法を排してどこまでも冷

靜な採算の上に謀る。老子に「人は歩みよき平坦な大道を棄て、歩みにくい横路を愛して勝手に困んでゐる」。

故軍争爲利、軍争爲危。

故ニ軍争ヲ利ト爲シ、軍争ヲ危シト爲ス。

軍争は有利であり、軍争は危険な仕事である（迂直の計を知れば利、知らざれば危い）。孫子のいふ利とは利益の利であり勝利の利でもある。利とは國威の發揚も金品の獲得も時としては珠玉、美女の掠奪も利の中に籠り、利の感念は環境と時代とによつて相違する。土地の領有は春秋では名譽であり又た富國の基礎であつた、井田法が廢れて私有財産が認められるやうになつて農業經濟時代の資産勘定はその重點を土地に置いたが現代では財産は土地又は對個人債權から離れて貨幣支拂契約の債權に變じた。英國でも土地家屋が個人財産の最大部を占めてゐたが收税の1940年の統計によれば、それが急變して有價證券、保險證書及び機械が八割を占めるに到つたのは米國式に感染した財産感念の轉換である。まして企業國であり株式國であり投資國である北米人は小作權、居住權といつた立法の纏綿してゐる上に讓渡、賣買に面倒の多い土地家屋に投資するを避ける、

土地は現在以上の資本を吸収しないから利潤は漸減する上に且つ大衆の前に陰蔽できない被徵稅物を晒すのだから白人社會には土地所有慾は幾分か冷却した。しかしそれが國家となれば集團心理は依然として土地所有に熾烈な慾念を持つ。

舉軍而争利、則不及。委軍而争利、則輜重捐。

軍ヲ舉ゲテ利ヲ争ヘバ及バズ。軍ヲ委テ、利ヲ争ヘバ輜重捐ツ。

全軍を率ゐて利を争へば遅くて間に合はない。軍の一部を委て（輕兵を抜き又は騎兵を以て）利に趨つたら後續の輜重を捐てなければならぬ（が、これは危い）。

現代でも航空隊、自動車隊、騎兵などの快速兵種と重砲、輜重の各隊との連絡は難事とせられる。

快速部隊が一直線に進んだ後を敵の遊撃隊に遮斷されて孤立無援となつた例は多い、ゆゑに後方連絡は確保されねばならぬ。

是故卷甲而趨、日夜不處、倍道兼行、百里而争利、則擒三將軍。勁者先、疲者後。

其法十一而至五十里而争利則蹶。上將軍其法半至三十里而争利則三分之二至。

是ノ故ニ甲ヲ卷キテ趨リ、日夜處ラズ、道ヲ倍シテ兼行シ、百里ニシテ利ヲ争ヘバ則チ三將軍ヲ擒ニセラル。勁キ者ハ先ンジ疲ルル者ハ後ル、其法十一ニシテ至ル」五十里ニシテ利ヲ争ヘバ則チ上將軍ヲ蹶カシム、其ノ法、半バ至ル」三十里ニシテ利ヲ争ヘバ則チ三分ノ二至ル。(身軽るになるため)甲を卷いて(背に負ひ)蹶け足で、日も夜も休まず、平時に倍する道程を強行し、百里の遠方で利を争へば三軍の將は悉く捕虜となり軍は全滅する。かやうな強行軍には勁き者は先んじて進むが疲れた者は落伍するから、原則として十人に一人の比率で戦地に着き戦鬪力の九〇パーセントを減じる」五十里の遠地で戦へば上將軍は捕虜たることを免れるにしても這々の體で逃げ還る醜態を演じ、原則としては全軍の半數が辛うじて戦争に参加する」三十里を疾行して戦へばまづ三分一は間に合はず、三分二の力で戦はねばならぬ。この逆を行き、十分に敵をたぐり込んでばつさりとやる、ソ聯のやうに奥行き深い國ではナポレオンもやられた。ヒットラーはその手に乗らず歐露を席卷して一段落をつけた。

是故軍無輜重則亡。無糧食則亡。無委積則亡。

是ノ故ニ軍ニ輜重ナケレバ亡ブ。糧食ナケレバ亡ブ。委積ナケレバ亡ブ。

故に遠征に輕重を伴はないやうな軍隊は全敗する。糧秣の用意なくとも全滅する。委積(軍資金)なき軍も亡滅の運命を擔ふ。

軍の構成條件は複雑である、輜重、糧食、資金など直接戦争に役立たない物資が勝敗を決定するから將軍の頭は經濟方面まで多角に働かねばならぬ。それ以外に次節に述べる外交問題までからみ付く。

故不知諸侯之謀者、不能豫交。不知山林險阻沮澤之形者、不能行軍。不用鄉導者、不能得地利。

故ニ諸侯ノ謀ヲ知ラザレバ豫メ交ハル能ハズ。山林、險阻、沮澤ノ形ヲ知ラザレバ軍ヲ行ル能ハズ。鄉導ヲ用ヒザレバ地ノ利ヲ得ル能ハズ。

中立諸侯の意圖を確めずして輕卒に戦を交へてはならぬ。山林、險阻、草深き澤などの地形を知らずして進軍してはならぬ。案内者を用ひなかつたら地形による利益を得ることができない。

「諸侯之謀」中原では齊燕韓魏趙秦楚の七雄、南方で吳越の二雄が相對峙し、孟子も「今の諸侯は地も大小の差少く、智徳も略同等で圖抜けたものがない」といつてゐるやうに理學的に物體相互の引力作用で平衡が辛うじて保たれてゐた。二國が戦つたら中立國の向背が均衡を破るから孫子は常に第三國の動向を氣にかけた。敵の敵だと思つてゐた國が意外にも我が敵で、鳩に豆の番をたのんだやうな馬鹿を見ることもある。

故兵以詐立、以利動、以分合爲變者也。

故ニ兵トハ詐ヲ以テ立チ、利ヲ以テ動キ、分合以テ變ヲ爲スモノ也。

故に用兵は敵をして虚實を誤認せしめる詐術の上に立ち、利を主體として動き、或は分れ或は合し、變化によつて視聽を錯亂させるを要諦とする。

戦術が周到な研究の上に立つてゐても戦争には豫期せざる出来事を伴ふために計畫の變更を餘儀なくされ、敵狀を手にとるやうに知悉してゐるつもりでも相手の推測を誤らせる手段に眩惑せられて、負けは的外れにより勝はまぐれ中りによる、これが華やかなりし戦争罪惡史であつたが、實戦では進行中に意外に出遇ふことが多い、歐洲大戰でもドイツの豫期してゐたバクテリア攻撃の脅威

が來らずして意外であつた怪物タンクが現はれて西部戦線を蹂躪した。國際聯盟が成立してから戦争そのものゝ定義さへ急に不明瞭になつて戦争の存在又は發生過程が各國の御用學者によつて解釋を異にし、説明によつては全世界の文明國は常に戦ひつゝあるともいへる。詐をもつて立つのは實戦のみに限らぬ。外交にもそれがある。

故其疾如風、其徐如林、侵掠如火、不動如山、難知如陰、動如雷震。

故ニ其ノ疾キ風ノ如ク、其ノ徐カナル林ノ如ク、侵掠スルトキハ火ノ如ク、動カザルハ山ノ如ク、知リ難キハ陰ノ如ク、動ケバ雷ノ震フ如シ。

行動の神速な時は風の如く去つて跡なく、徐かな時は樹木の並び立つて語らない如く、侵掠する時は猛火に焼き盡されたやうに野に一粟をも残さない。動かない時は泰然たる山の如く何物の力でも移し能はず、わが情勢を窺知し難きは濃霧密雲の陰に包まれてゐるやうで、一たび動いたら雷の落ちたやうに何物も破摧し盡すであらう。

Let your rapidity be that of the wind, your compactness that of the forest, In raiding and plundering be like fire, in immovability like a mountain. Let your plans be dark

and impenetrable as night, and when you move, fall like a thunderbolt. (G)

不動如山とは易の☶ 艮爲山の卦象で、一奇が二偶の上に止まり、一陽上り進みて、もうこれ以上に進めないから自然に艮る。序卦傳に艮は止なりと、下經に咎なしとある。動靜ともに節を失はなかつたら禍がない。武田信玄の愛好した句である。

掠郷分衆、廓地分利、懸權而動。

郷ヲ掠ムレバ衆ニ分チ、地ヲ廓ケベ利ヲ分チ、權ニ懸ケテ動ク。

郷を掠奪すれば分捕品を兵衆に分配し、土地を侵略したら利益を將士に分配し、すべて利と不利とを權にかけて周到な打算によつて動向を定める。

- 戦争の目的 (一) 敵國の完全なる征服。 (二) 敵の戰鬥力破壊。 (三) 脅威の排除。 (四) 土地占領。 (五) 權益の防衛。 (六) 通商路の開拓。 (七) 利潤搾取。 (八) 分捕金品、賠償金。 (九) 經濟力の破壊。 (十) 民族解放。 (十一) 制空制海權の確立。 (十二) 資源確保。

先知迂直之計者勝、此軍争之法也。

迂直ノ計ヲ先知スル者ハ勝ツ。コレ軍争ノ法ナリ。

前述の以迂爲直の計を先づ知つて之を實戰に用ひた者は勝つ。この計を適時適處に用ひるのが軍争の法である。

征韓の役に加藤肥後守と小西攝津守との先陣争ひが始まり、清正は直にして險に、且つ近き路を取り、行長は迂にして坦に、そして遠き路を取り、つひに行長は清正に先んじて韓の國都に攻め入ることに成功した(征韓軍談)。行長は堺の藥屋の倅であつたから商才を戰術に利用し武勇一點張りの清正を醜弄した。清正も晩年になつてから論語を愛讀して頗る悟るところがあつたらしい、家父麟々の狂詩に、日本虎擊朝鮮虎、奈是東肥半國主、争利不得亦宜哉、攝津太守元商賈。

軍政曰言不相聞、故爲金鼓。視不相見、故爲旌旗。夫金鼓旌旗者、所以一人之耳目也。

軍政ニ曰ク言、相聞エズ、故ニ金鼓ヲ爲ル。視、相見エズ、故ニ旌旗ヲ爲ルト。夫レ金鼓旌旗ハ人ノ耳目ヲ一ニスル所以ナリ。

古代の軍政書に「言語が相聞えないから鐘、鼓で相圖する。視力が達かないから旌旗をつくつて

信號する」と。それ鐘鼓は耳から、旌旗は眼から、號令によつて多數を統一制御するためである。無電が発達しても旌旗、ラツバが軍の耳目たる役割は重し。

人既專一、則勇者不得獨進。怯者不得獨退。此用衆之法也。

人ステニ專一ナレバ勇者モ獨リ進ムヲ得ズ。怯者モ獨リ退クヲ得ズ。コレ衆ヲ用フル法也。

兵衆が統一されて集團人格を構成すれば勇者も自身の力を恃んで獨り進んで勇を一騎打ちに揮ふこともできず、怯者も畏縮して逃げ出すこともできない。これが多數を指揮して戦ふ手段である。

老子、これは眼、これは手、これは頭と數へて部分的に解き離したら人體は無くなる。これは甲、これは劍、これは勇者、これは怯者と區別して擇り分けたら軍隊は消えてしまふ。勇者も怯者も統制した組織の下に渾然一體となつて始めて多數の力が用ひられる。

故夜戰多火鼓、晝戰多旌旗、所以變人之耳目也。

故ニ夜戰ニ火鼓多ク、晝戰ニ旌旗多キハ、人ノ耳目ヲ變ズル所以ナリ。

夜戰には篝火を多くし鼓聲を盛んにし、晝戰には旌旗を多くするのは味方の耳目を聳動させて勇氣を刺戟するためである。

景氣が善かつたら戰鬥力を引立てる、不景氣な戦争をしたら損が多い。

故三軍可奪氣、將軍可奪心。

故ニ三軍、氣ヲ奪フベシ、將軍、心ヲ奪フベシ。

陣容を盛にして勢を張れば敵の大軍も氣を沮喪せしめられ、敵の主將も惑はされて冷靜なるべき心の判斷力を奪はれる。

氣と心の區別——大づかみにいへば氣は心の充實から發する元氣、心は理念であるが、もつと深く考へるならば「孟子」氣一なれば志を動かし志一なれば氣を動かす、今それ驟く者趨る者は是れ氣なり、而も却つて其心を動かす。

是故朝氣銳、晝氣惰、暮氣歸。故善用兵者、避其銳氣、擊其惰歸、此治氣者也。

是ノ故ニ朝氣ハ銳ク、晝氣ハ惰リ、暮氣ハ歸ル。故ニ善ク兵ヲ用フル者ハ、ソノ銳氣ヲ避ケ、

ソノ情歸ヲ撃ツ。此レ氣ヲ治ムル者ナリ。

一夜の睡眠休養によつて朝の氣は鋭いが、正午からは元氣が弛み、暮には氣が（心に）歸つて休みたいと望む（鳥でも朝は元氣よく飛ぶが晝には時として疲れ、休み、暮には羽も弱つて墜を慕ふ）。だから朝の敵の鋭氣を避けてその晝の情氣、暮の歸氣を撃つ。これを氣の利用を知るものといふ。

フオードは、朝の働きは黄金で晝の働きは銀で夜の働きは銅である、といつたやうに戦争でも午後から夜にかけて力が漸衰する。……以上は極めて淺薄な在來の解釋である。敵が鋭い時は我も鋭い、敵の情歸の時は味方もその時刻なのだ。日本と米國とのやうに一方の朝が他方の夜ならばこの解釋も通用するが、交戦地では彼我ともに同時刻であるから、前記の解釋は合理的でない。

宮本武藏の劍法に、敵が先づ打込んでくる時は全力でその勢は鋭い、それを外づして次に打ち込んでくる時は既に衰へてゐるのを受け留め、第三回目の打込みは疲れ切つてゐるからそこに虚がある、それを撃てば必らず勝てる、と。この節にいふ朝とは第一の攻撃で、晝とはその次、夜とは第三合であつて時刻をいふのではない。火鼓旌旗から文脈をひいて朝晝暮の字を假りた措辭の巧である。その意は、先づ敵の猛襲を引きはづす、これが避其鋭氣である、元氣の衰へた第二晝氣を迎へて、

こちらの鋭氣で撃つ。もし敵の元氣が衰へてゐなかつたら、もう一度防戦に力め、第三次の合戦に全力をもつて敵の歸氣に向つて強打を加へる。これが治氣の奥儀である。左傳、長勺に於ける曹劌の戦法がこれであつた。

ついでに漢文の觀方を説くが孔子でも孟子でも詩、書、易などを援いて自由に奔放に解釋を下して時としては斷章取義で自説に都合のいゝやうに解する。孟子の讀書法は「一つの文字にかゝはつて一句の意を没却してはならぬ、一句意に拘泥して作者の意を忘れてならぬ、讀者の意をもつて作者の意を迎へるのが讀詩讀文の要訣であるとする。

東洋の哲學は西洋のそのやうに科學的に哲理を分析してはいけない、技術的の叙述は文字で十分に意を達し得るが、一たび哲理の妙所奥處に入れば義は文字のとゞかない處に在る、孫子のいふ無形である。釋尊、大慧菩薩に「言と義とは一つでもなく又二つでもない。言によつて義を現はすが、言を離れて解脱の境地に達する。もし、涅槃」などに文字通りの義を取れば偏斷に墮ちるであらう。文字をそのまま受入れたら誤りの法となつて執着を脱し得られないから、如來の道から遊離する。なぜならば諸法は自性の文字を離れてゐるからである。

避其鋭鋒擊其情歸の一證として吳子を援く。武侯問ふ「亂暴な敵が暴に殺到して吾が田の穀物を

掠め、吾が家畜を奪はうとする、これに處する策如何」吳起對ふ「暴寇の襲來は必らず強さに自信があつてきたのだから、これに力をもつて對抗してはならぬ、善く守つて相手になるな。彼れが思ふ存分に掠奪して暮に退却しやうとする時は、荷物は重く、心は恐怖してゐる。還る時には氣が急ぎ、必らず隊伍を整へずしてバラ／＼になる、それを追撃すれば敵兵は全滅せしめ得る」

以治待亂以靜待譁此治心者也。

治ヲモツテ亂ヲ待チ、靜ヲモツテ譁ヲ待ツ。コレ心ヲ治ムルモノ也。

安定をもつて敵の亂れを受け、冷靜をもつて彼れの喧騒に對する。心を治めるとは、この仕方である。

勇氣の發露も生のまゝでは亂となり譁となるが、洗練されると治となり靜となる、これが眞勇である。

老子に、莊重が根柢で安靜が輕躁を征服する。故に主將は先づ自身を治め、靜かにして部下を治め整へねばならぬ。主將の心が亂れ出したら一軍が亂れる。

以近待遠以佚待勞以飽待饑此治力者也。

近キヲ以テ遠キヲ待チ、佚ヲ以テ勞ヲ待チ、飽ヲ以テ饑ヲ待ツ、此レ力ヲ治ムル者ナリ。

戰場に近くして遠くから來る敵を待ち、安佚して勞苦せる敵に對し、飽いてゐる我が兵を以て餓ゑた敵を待つ、これは力を蓄積して浪費しないものである。

老子、無駄に精力を費さないものは力を蓄積し、蓄積すれば刻つ、その勝ち終局なくして國をも支配し能ふ。

無要正正之旗勿擊堂堂之陣此治變者也。

正々ノ旗ヲ要フルナカレ、堂々ノ陣ヲ擊ツナカレ、此レ變ヲ治ムル者ナリ。

正々堂々と旗鼓を整へて來る敵を要へ撃つな。彼れは鬪志に燃えてゐる、それを邀撃すれば敗れる、たとひ之に勝ち得るも我が損害は多大である。かくの如き敵を避けるのは變通に應ずる道である。

こんな敵と正面衝突をしてはたまらぬ。

故、用兵之法、高陵勿向、背丘勿逆、佯北勿從、銳卒勿攻、餌兵勿食、歸師勿遏、圍師必闕、窮寇勿追。此用兵之法也。

故ニ兵ヲ用フル法ハ、高陵ニハ向フ勿レ、丘ヲ背ニセルハ逆フ勿レ。佯リ北グルハ從フ勿レ。銳卒ハ攻ムル勿レ、餌兵ハ食フ勿レ。歸師ハ遏ムル勿レ。圍師ハ必ラズ闕ケ。窮寇ハ追ル勿レ。コレ兵ヲ用フル法也。

故に用兵の法は、高き陵に陣する敵に向つて仰いで攻めるな。丘を背に控へて攻め降る敵は逆へて戦ふな。佯つて北げる兵に従いて後を追ふな。勢鋭く突つかうつてくる敵卒は避けよ。餌として釣出す兵を食ふな（食つたら釣にかゝるぞ）。歸る敵軍を途中に喰ひ退めるな（敵は歸心が強いから力を併せて突破しやうとする）。敵を圍んだら三方を包んで一方を闕け（そこに逃げ路を残して鬪志を鈍らせる）。逃げ路のない敵（又は行詰つて窮してゐる敵）は壓迫すな（彼は死に物狂ひになつて抵抗するであらう）。（消極と積極との二道を巧みに運用して八つの形勢に應ずる原則）これ等は用兵の法である。

吳子に、敵の戰鬪力を計料して、トふまでもなく、たゞちに敵を攻撃しても決して失策のない機會が八つある。第一は大風酷寒に、朝早く興き、眼も覺めないうちにもう行進し、氷を割り河を徒

涉り、艱難を厭はず急行軍する敵。第二は夏の暑い眞盛りに晏く出發して暫くも休まず、歩けるだけ無理に歩き、腹は饑り咽は渴く、それでも厭はず少しでも進める限り遠く進まうとする。第三は軍隊が久しく一處に止まつて移動せず、糧食も缺乏し、附近の人民は迷惑し、不利益な事件が頻發するも上官は制止する術がない。第四は軍需品が缺乏し、炊事の燃料、馬糧さへも残り少く、霖雨に逢ひ、掠奪しやうとしても掠奪すべき村落もない。第五は兵卒は寡く、水も地勢も不利な位置にあり、人も馬も傳染病に襲はれ、鄰國からは救援しない。第六は前途はまだ遠く、日は暮れる、兵卒は疲労し、不安であり、がっかりして食慾さへ催さず、甲をぬいで休息してゐる。第七は主將の權威が薄弱で將校は輕んぜられ、士卒は一致しない、軍中では（敵の襲撃かと疑つて、何でもないとでもビクついて）數々驚き騒ぎ、援兵の來る見込もない。第八は陣取つてもまだ場所に落ち付かず、舍營してもまだ全く工事が畢らず。又は阪路を進み、險阻を強行軍し、隠れたり現はれたり斷續して統制がない。——敵がかやうな情勢にあれば、何の躊躇も狐疑もなく、すぐ撃つて好餌を逃すな。凡料敵、有不卜而與之戰者八、一曰疾風大寒、早興寤遷、剖氷涉水、不憚艱難。二曰盛夏炎熱、晏興無間、行驅饑渴、務於取遠。三曰師久淹久、糧食無有、百姓怨怒、妖祥數起、上不知止。四曰軍資既竭、薪芻既寡、天多陰雨、欲掠無所、五曰徒衆不多、水地不利、人馬疾疫、四鄰不至、

六曰道遠日暮、士衆勞懼、倦而未食、解甲而息。七曰將薄吏輕、士卒不固、三軍數驚、師徒無助。八曰陣而未定、舍而未畢、行阪涉險、半隱半出、諸如此者擊之勿疑。

九變第八 CHIEU PIEN (The nine changes), VIII

九變は多趣多様の變化を意味し、九の字には數の觀念は稀薄である。七化八變としても千變萬化としても同義である。魏武帝は正を變じて用ふるところ九つといひ、或者は九地の變化といふ。

孫子曰凡用兵之法、將受命於君、合軍聚衆、圯地無舍、衢地合交、絕地無留、圍地則謀、死地則戰。

孫子曰凡ソ兵を用フル法ハ、將、命ヲ君ニ受ケ軍ヲ合ゼ衆ヲ聚ム「圯地ニハ舍スルナカレ、衢地ニハ交ヲ合セ。絶地ニハ留マルナカレ、圍地ニハ則チ謀レ。死地ニハ則チ戰ヘ。凡、用兵より聚衆までの十四字は前の軍爭篇に出たものを誤つて重出したものとするが、或は同じ句をわざとこゝに用ひたのであらうと著者は解する、もしもこの句を削り去つたら起筆が餘

り唐突である。——土地低く常に濕氣あり雨には潦水の集る坳地に舍營してはならぬ。中立國に接壤してゐる衝地が戰場ならば中立國の向背は戦局に重大な關係がある、先づ之れと交りを温め、攻守同盟を結ぶか少くとも好意的中立を守らしめよ。人も住まず食料もなき絶地には留つてはならぬ（包圍され易き形勢の）圍地に陥つたなら能く謀つて危険から脱せよ。進み得ず退き難く運命の窮した死地に陥つたらもう百年目だ、死を決して戦へ、或は死中に活を得られるかも知れない（が尻込みしたら地獄へ轉落する）。「絶地」は前章九地の中にある重地を指したものであらう。

文化人ほど土の威力を侮るが土地を離れて人はなく戦もない、空中戦といへども地上戦の延長の一部に過ぎない、人智から成つた戦略は地形によつて多く訂正される。心書に、地勢は兵の助けなり、地に戦はずして勝を求めたる者は未だこれあらざる也。地の利用によつて十倍の戦闘力を發揮することがあればその反對を行くものもある。

塗有所不由、軍有所不擊、城有所不攻、地有所不爭、君命有所不受。

塗モ由ラザルトコロアリ、軍モ擊タザルトコロアリ、城モ攻メザルトコロアリ、地モ争ハザル

トコロアリ、君命モ受ケザル所アリ。

（塗があれば由つて進み、敵をみたら撃ち、敵城に近づけば攻め、土地を争ひ、君命のままに進退する、これは正常の法であるが、九變はさうではない）塗があつてもそれに由つて進んではならない途がある。敵軍に遇つて之を避けねばならない場合もある。敵城を前にしても攻めてはならない形もある。占領し易き土地でも之を抛棄して顧みてはならない處もある。君命に背いても臨機の處置を取らねばならぬ場合もある（春秋の君侯は文官の長であつて武人でないから、軍事を知らない君侯の命に服して事を誤つてはならぬ）。

前節までが常法でありこの節から九變である、先づ常法を知り次に變通に及ぶべきもので、老子にも常法を知らざるものは妄作して凶なり。

故將通九變之利者、知用兵矣。將不通九變之利者、雖知地形、不能得地之利。
治兵不知九變之術、雖知地利、不能得人之用矣。

故ニ將、九變ノ利ニ通ズル者ハ兵ヲ用フルヲ知ルナリ。將、九變ノ利ニ通ゼザル者ハ地形ヲ知ルトイヘドモ地ノ利ヲ得ル能ハズ。兵ヲ治メテ九變ヲ知ラザレバ地利ヲ知ルトイヘドモ人ノ用

ヲ得ル能ハズ。

故に九變の利を會得した將は用兵の法を知る者である。九變の利に通達しない將はたとひ地形による兵の運用を知つても、地勢による利便を活用することができない。兵を統御する術に達しても九變の道知らない者は、地の利を知つても思ふまゝに人を働かしめることができない。孟子は、天時より地利、地利より人和といつた。印度洋と支那海に開閉する扉たるシンガポールに英國は東洋根據地を強化したのは地の利を得たといへるが、守備隊は英本國兵、濠洲兵、ニュージーランド兵、印度兵、マレー兵などの寄せ集めで人の和を得なかつたのが失陥の原因となつた。

是故智者之慮、必雜於利害。

是ノ故ニ智者ノ慮ハ必ラス利害ヲ雜フ。

智者の思慮は利の中に害を見、害中に利の伏在してゐることを認める。この二つの相反した素が常に注意から離れぬ（利と害とは相錯綜して絶対利も絶対害もない、光あれば影がある）。

老子。一般人が美と稱する時に醜ができ、善の善なりと認める時に惡が直ちに現はれる。その理から有と無、困難と容易、遠きと近きと、前と後とは相互に出来る。

雜於利而務可信也。雜於害而患可解也。

利ニ雜フレバ務信ブベシ、害ニ雜フレバ患解クベシ。

利の中に害の雜つてゐる幾微を察して、その反面の害を巧みに避けたら主將の計畫（務）は伸張して礙がない。利には害の裏うちがあるを知らば、利を擁むに専念して却つて害に踏んがぶる危険から免れ得る。

老子。わが勇氣を向う見ずの働きに於いて現はす者は殺さるべく、わが勇氣を用心深く示すものは保護されるであらう。この二つは用心深い者は利で向う見ずの者は害のやうに人は思ふが、しかしその反對の結果を事實においてみるから天が果して孰れを惡むか、神の意を測り知ることができない。だから聖人ですら利害を識別するを困難とする。

是故屈諸侯者、以害。役諸侯者、以業。趨諸侯者、以利。

コノ故ニ諸侯ヲ屈セシムルニハ害ヲ以テシ、諸侯ヲ役セシムルニハ業ヲ以テシ、諸侯ヲ趨カシムルニハ利ヲ以テス。

諸侯を屈服せしむるには害を示し、彼等の痛い急所を握つて押へつける。中立國を役使しやうとすれば利を以て誘ひ害を以て威嚇す（利もあり害もあるのを業といふ）。中立諸侯を我がために奔走せしめるには利を以て釣込む。

孟子の戦争意識は仁義一點張りであるに反して孫子は利害を基調とする、そこが儒學と兵法との追分けである。現代戦でも宣戦布告で正義人道を高唱するが、多くは侵略主義のてれ隠しである。

故用兵之法、無恃其不來、恃吾有以待之。無恃其不攻、恃吾有所不可攻也。

故ニ用兵ノ法ハ、其ノ來ラザルヲ恃ムナカレ、吾ガ以テ之レヲ待ツアルヲ恃メ。其ノ攻メザルヲ恃ムナカレ、吾ガ攻ムベカラザル所アルヲ恃メ。

故に用兵の法は、敵の來らざるを幸ひとして目前の安全を恃んで武備を弛べてはならぬ。吾が待つある——何時攻められても大丈夫といふ堅固の國防——を頼みとせよ。敵の攻めざる一時的僥倖をあてにすな、攻められても敗れない自信ある武備を頼みとせよ。 Wherefore in the conduct of war do not depend on the enemy's not coming, but rely on your own preparations; do not count on the enemy not attacking your fortress, but leave nothing undefended. (C)

正月だからまさか泥棒が侵入することもあるまいと戸締りを怠つた、朝起きてみれば手提げ金庫がない。

故、將有五危。必死可殺。

故ニ將ニ五危アリ。必死ハ殺スベシ。

將たるに五つの警戒すべき危険性がある。その一は必死である、死を決して戦ふ果敢は軍人としての本分で最も尊重すべき行爲であるが、殺され易い危険を伴ふ。

戦争道德の危険なコースが國際間にだん／＼進歩發展することは僕らは多大な遺憾を表すが、遺憾を表しながら尙ほそれを是正するだけの力がなく、嚴然たる事實として認識せねばならぬ情けない人類殺傷の世界に生きてゐるのだから、この環境に應じつゝ生きて行かねばならぬ。彼れが右の頬を打てば、こちらは彼れの左右の頬に大穴をあけて北風を吹き通してやるだけの積極的國防がなくては、頬ぺたを毆られづめに毆られつゞけねばならぬ。同じ流しても國際自衛戰の満身創痍と、ばくち場のかすり創とは血の意義が違ひ、血液型もちがふ。そこを強く認識せしめ、殉國的精神——私闘に怯く、公戰に勇ならしめたら國防は安全である。

吳子、國民の總てが自國政府の國策を是認し、相手國の外交を否認する——それだけで、すでに戦は勝つてゐるのだ。

強硬盲蛇の出鼻をステツキで軽く操つて、その勢ひの弱つた頃合を見計つて、頭から三寸の急所に一撃の引導を與へるのが、兵法のこつ。

主將の死は全軍の慘敗を意味するから、責任感念の強いものならば冒險的な行動を取つて無効果な討死をしてはならぬ。

必生可擒。

必生ハ擒ニスベシ。

智謀ある者は必死の勇に驅られず、たとひ戦敗れても生命を全くして再學三學を圖るため必生を期し、勇往邁進の意氣を缺くが故に計を以て生擒にされ易い。必死も必生も共に兩極で利もあり害もある、(前節の雜於利害の意を敷衍したものである)。

宋朝の忠臣文天祥は必生主義であつたから二度も捕虜となり獄中に正氣歌を残して死刑に處せられた。

忿速可侮

忿速ハ侮ルベシ。

事に激し易く(忿)、焦躁い人物は侮辱すべし、彼れは侮辱に逢へば自制の念を失つて輕躁となり吾が詭計に陥り易い。

「孔子」小事に忍耐しない者は大なる謀を破壊する。

廉潔可辱。

廉潔ハ辱ムベシ。

潔廉は道德的に貴ぶべき性であるが、辱めに逢へば激怒して無謀の戦に出る、辱を忍ぶ心がなくては良將とはいへない。

將軍は清濁併せ呑む大度量がなくてはならぬ、些々たる清廉にこだはつて憤怒に堪へないやうで三軍を指揮する資格がない。

愛民可煩。

民ヲ愛スルハ煩ハスベシ。

民を愛するは仁政であるが、小局の愛憐に煩はされて大局を誤り却つて民を苦しめるに到る。險阻に據つてゐる敵に對し、兵を分つて他の敵地を掠奪し放火し又は慘虐行爲に出る時は、仁心ある敵將はそれを坐視するに忍びずして救援に赴き、ために大敗を招くが如き類。局部の小慈悲に偏して大局の愛憐を没却する人は部隊長にもなれぬ。

凡此五者、將之過也。用兵之災也。覆軍殺將、必以五危、不可之不察也。

凡ソ此ノ五ツノ者ハ將ノ過チ也。用兵ノ災也。軍ヲ覆ヘシ將ヲ殺スハ必ラズ五危ヲ以テス。之レヲ察セザルベカラズ。

この五つは敵の利を害化せしめるもので、これに引つかゝるのは主將の過失で、用兵の災禍である。軍を全滅に到らしめ主將まで殺されるのは、この五危のどれかに原因する。そこを深く考察せねばならぬ。

孫子は哲理をもつて推して行くが、敵情偵察機關の不完備な時代には無謀に近い膽力が軍に總括

的勇氣を與へ、後世の史家が勝敗の跡によつてその無謀を男性的果斷と推讚する錯誤を敢てし、史を讀んでもはらくさせるやうに、その實戰においても部下の兵士が冒險的興味に陶醉したことが想像される。人間は不健全な投機心を愛好する半面を持つてゐる。近代戰爭は動機が政治的貿易的理由から出發し、戰略も數理的となり營利的打算的となつて亢奮、感情等を作戰計畫から除去するに努めたとはいへ戦争そのものゝ本體が規準的のものでなく、勝敗の一部は人間の腦力の及ばない偶然性に支配されることがあるから豫想が必らずしも理學的に的中しない。

危險の中に在つて目的を遂行して誤らないのは膽力である。膽力の缺乏した戰爭は山崎に於ける明智光秀であつた、膽力は危險を排除することはあるが無茶な膽力は安全を變じて危險に突き落とす、賤ヶ嶽に於ける佐久間盛政がそれであつた。

盛政は中川清秀の背後の營を焼いて奇捷を得た。背面攻撃は精神的に敵に打撃を與へる度の強いことは鳶巢でも前例があり甲州武士の勇を以てしても顧みて敗れた。背面に次ぐものは側面攻撃であり、正面から攻める正兵は敵以上の優勢をもつてかゝらねば原則的には勝利を得られない。日×戰に於いては僕らは背面の敵を忘れてはならぬ。

核から細胞へ、細胞から組織へ、組織から有機體へと分析を逆に、層累相屬して緻密な合理的作

戦計畫ができる。激情と勇氣とだけでは必ず敗北する時代に入つて高松城水攻めといつた自然を利用した數學的戰術となり、大家族制に立て籠る毛利の必死の防戦も城將を見殺しにするの餘儀なきに到つた。この時代は戰術革命に入つて武器も變化した、當時の火薬は現代のやうな効果的のものではなかつたが敵を畏怖させる精神的威力は飛行機から落下する爆彈以上に偉大なものであつた。武器と作戦計畫とは相關關係が密接で、軍人の甲冑、兵器等の外貌を變化せしめるだけでなく戰爭の概念にまで修正を及ぼし、竹中、黒田らの參謀が孫吳の兵法、甲越の用兵術を、善き素質を持つ秀吉の頭に注ぎ込んだ、併し戰爭遂行の手段は（航空機が進歩して築城法も改まつたやうに）變革したが戰爭の本來の法則は萬古に涉つて變らない、そこに孫子の永久な生命が殘され、彼れの戰爭哲學に敬意が繼續されるゆゑである。

行 軍 第 九 HSIANG CHUN IX. (Movement of troops)

すでに戰爭の原理を説き、次いで各論に及ぶ。原理も必要なら、それを遂行する技術も必要である。

孫子曰凡處軍相敵、絕山依谷、視生處高、戰降無登、此處山谷之軍也。

孫子曰ク凡ソ軍ヲ處キ相敵スル、山ヲ絶リ谷ニ依リ、生ヲ視、高キニ處リ、降ニ戰ヒテ登ルナカレ、此レ山谷ニ處スル軍也。

凡そ軍を布置し、相敵する法は、山を横斷し谷河に縁つて進むにも（かゝる險阻にさしかゝつた時は常に）生物（草木）の情勢に注意を拂ひ（草は馬糧とすべく木は掩護物として役立て）、成るべく高味に野營を構へ、降（傾斜地）で戦ふ時は仰いで敵を撃たないやうにせよ。これ山上行軍に處すべき要領である。

「處軍」軍を處置するのであるが、こゝでは軍を行る意に解してよし。「相敵」の相 Hsiang を

上平に發音して副詞とするか、去聲にして動詞にするかによつて次のやうな解釋の差を生じる。|| 動詞にすれば、敵を相る^{チニイキヤン}のであるが、副詞にすれば、相敵する^{チニイキヤン}で、著者の私見ではその下に之法の二字を補ひ、相敵之法とする。補語を用ふるは漢文の常例であるのみでなく、この書では篇の劈頭に之法の二字を措くことは作戰第二に孫子曰用兵之法とあるを始めとし謀攻、軍争、九變、九地の章首その他にもあるから或は二字を誤脱したものかも知れない。

絶水必遠水。客絶水而來、勿迎之於水内、令半濟而擊之利。

水ヲ絶ラバ必ズ水ニ遠ザカレ。客、水ヲ絶ツテ來ラベ、之レヲ水ノ内ニ迎フル勿レ。半バ濟ラシメテ之ヲ擊テバ利アリ。

河を渡つたならば必らず河岸から遠ざかれ（敵に渡つて上陸すべき餘地を残して彼を誘致せよ）。客軍（敵）が水を絶つて來らば（こんな有難いことはない）これを水の消に迎へて撃つな、彼れが敵前上陸の冒險をやつて敵の半數が渡つた頃を見計つて之を撃てば有利である。

「水内」水中といふのはあるが水内といふ成語は生硬である、杜牧、王哲は消の誤であるとする。著者の私見では勿迎之於消とすべきを語路が悪いから文字の惡戯を試みて消を二分して水内とした

（水内を合せば一字の消 Tsch 去聲となる）のではあるまいか、さう見るは文字の正でなく奇である。

欲戰者無附於水而迎客。視生處高、無迎水流。此處水上之軍也。

戰ハント欲セバ、水ニ附キテ客ヲ迎フル勿レ。生ヲ視、高キニ處リ、水流ヲ迎フル勿レ。此レ水上ニ處スル軍ナリ。

戦ひを望むならば河岸に密着して（陣を布き）敵を迎へてはならぬ（敵をして渡らしめよ）。林樹草叢の地形をみて之を利用し高處に陣取れ、上流より攻め降る敵を邀へ撃つな。これ水の上に陣する軍を處置する法である。

草木でも水流でも、すべての自然を利用して戰鬥力を補強する、兵法家の眼からみれば宇宙間の萬象は戦争のために造られてゐる。

絶斥澤、惟亟去無留、若交軍於斥澤之中、必依水草而背衆樹。此處斥澤之軍也。

斥澤ヲ絶ルニハ、タダ亟カニ去リテ留ルナカレ。若シ軍ヲ斥澤ノ中ニ交ヘバ必ラズ水草ニ依リテ衆樹ヲ背ニセヨ。コレ斥澤ニ處スル軍ナリ。

鹽分を含んだ濕地を通過するには（かやうな處は行動の自由を缺き戰車も馬匹も機能を發揮しないから）たゞ速かに去つて淹留してはならぬ。もし斥澤で遭遇戰を餘儀なくされた場合には水流、草叢によつて衆の樹木を後にせよ（斥澤の水は飲料にはならぬから水流に沿ひ、泥濘にのめり込むを禦ぐため水草の根を張つた叢に依り、後から射撃せられる危険があるから樹林を掩護物とする）。これは斥澤に軍を處置する法である。

沼澤は兵家にとつて危険物である、木會義仲もこれで醜い最後を遂げた。

平陸處易、右倍高、前死後生。此處平陸之軍也。

平陸ニハ易ニ處リ、高キヲ右ニシ倍キ、死ヲ前ニシ、生ヲ後ニス。コレ平陸ニ處スル軍ナリ。平原では易（交通便利で、高低の少いところ）に居り、小高き丘を右にし後に構へ（後を掩ひ前を見通し得られるやうに）死（樹木なき地、赤地）を前に、生（森林）を後にせよ。之れ平陸に處する法である。

障碍物を後に控へることは、劍道でも壁又は樹木などの前に身構へすると同じく、猛獸でも強き敵を迎へる時はこの姿勢を取る。

マキヤゾエリリの兵法論に高地を占領せば決してその傾斜面、山麓に合營すべからず、背後の上から攻撃されたら助かるはずはない。兵を戦闘配備に就かしめるに當つて顧慮すべきは風向と日光とで、光線に眩惑されて射撃の命中率が減じ、風に向つては砂塵のため行動を妨げられる。ハンニバルがカンネーの役に於ける、マリウスがキスプリと戦つた時の如きは注意がよくこの方面に拂はれた。騎兵の數が敵に劣ると見た時は、葡萄園、障壁などの障碍物を利用せよ。スペイン兵がナポリ王國のキリヌオラでフランス兵を撃破し得たのはこの手段によつたものである。

凡此四軍之利、黃帝之所以勝於四方也。

凡ソコノ四軍ノ利ハ黃帝ノ四方ニ勝ツユエンナリ。

この山谷、水上、斥澤、平陸の軍を處して（地の利を得たのは）黃帝が四方の僭帝に勝つて天下を統一した戦法である。

黃帝軒轅氏は西紀前凡二千六百年、武力をもつて天下の亂を平げた英主である。

孫子の戦争哲學は老子から水脈をひいてゐるといふ著者の主張は前述の如く、たゞ理において相契合するのみでなく文辭まで相似てゐる、二つとも是以、故、能、善のやうな副詞を目ざわりになるほど多く用ひ、孫子が警句には押韻してゐるところも類似點がある。その老子の哲理は黄帝にあるといふ（考證、老子に谷神不死是謂玄牝云々（第六章）は列子の天瑞第一に黄帝の言であるといふ）。その黄帝はバビロン人であつたと云ふ説もある。黄帝は風后の計を用ひ炎帝と戦つて大勝し、蚩尤を征服した。

凡軍好高而惡下、貴陽而賤陰、養生而處實、軍無百疾、是謂必勝。

凡ソ軍ハ高キヲ好ミテ下ヲ惡ミ、陽ヲ貴ビ陰ヲ賤ミ、生ヲ養ヒテ實ニ處リ、軍ニ百疾ナキ、是レヲ必勝トイフ。

凡と冒頭したのは四種の各論を畢へ、次に結論で纏めるからである。——軍は高處を好み低地を忌み、陽（南、又は日當りのよき處）を貴んで陰（北、又は日かげ）を賤み、衛生を重んじて（不健康地を避け）元氣を充實せしめ、軍中に多くの病がない、かやうな兵を必勝軍といふ。「實」を乾燥の高地とみるも可。

遠征軍は氣候、風土、飲食物の激變から戦死するよりも病死の多い時もある。病氣もまた敵である。

丘陵隄防必處其陽而右背之、此兵之利、地之助也。

丘陵隄防ハ必ラス其陽ニ處リ之ヲ右背ニス、此レ兵ノ利、地ノ助ケ也。

丘陵、隄防は必らずその陽に舍營し、それを右にし又は背にせよ。これ戦鬪の利便で、地形が兵力を助けてくれるものである。

上雨、水沫至、欲涉者待其定也。

上、雨フリ、水沫至ルトキ、涉ラント欲セバ其定マルヲ待テ。

水の漚が流れてくるのは上流に大雨があつたため、やがて水が暴に漲るかも知れない。河を徒渉するのは危険である、水勢の落付くの見定めてから涉れ。

凡地有絶澗、天井、天牢、天羅、天陷、天隙、必亟去之、勿近也。吾遠之、敵近之、吾迎。

之、敵背之。

凡ソ地ニ絶澗、天井、天牢、天羅、天陷、天隙アラバ必ラズ亟カニ之ヲ去リ、近ヅク勿レ。吾コレニ遠ザカリ、敵ニハ之レニ近ヅケシメ、吾コレヲ迎ヘ、敵ニハ之レヲ背ニセシメヨ。地に絶澗、天井、天牢、天羅、天陷、天隙など不利な形あらば、必ず速に去つて近づいてはならぬ。吾は之に遠ざかつて敵には近づかしめ、吾は之れを前にして敵には之れを背後にせしめよ。

「絶澗」絶壁断崖の豁谷。「天井」自然の凹地。「天牢」山峻く谷深く入れば出で難き、天のつくつた牢獄。「天羅」網、荆棘などの叢生し、そこに踏み込めば魚が羅にかゝつたやうな處。「天陷」泥沼など、陥つたら抜きさしならぬ自然の陷穽。「天隙」山と山との缺け目。山峽の迫つた處。以上の半打は孫子が手製の面白い熟語である。

軍旁有險阻、潢井、林木、蕪葭、藪薈者、必謹覆索之、此伏姦之所藏也。

軍旁ニ險阻、潢井、林木、蕪葭、藪薈アラバ必ズ謹ミテ之レヲ覆索セヨ、コレ伏姦ノ藏ルル所ナリ。

舍營の附近に險阻、潢井、林木、蕪葭、藪薈などがあつたら必らず注意して覆して之を搜索せよ。そんな地形は敵の伏兵や姦細が陰れるに屈強なところである。

「軍旁」旁は立人旁兒を略したもの、傍。「潢井」深き汚地。「蕪葭」蘆葦。「藪薈」灌木雜草の叢。「覆索」反覆して搜索する。覆は反覆の意には去聲。「伏、姦」伏兵と姦細（敵狀を窺ふ間諜）林戰の事は、（一）よく伏兵をはかるべき事、（二）林によりて備を立て兵をかくす事、（三）風によつて林を行く事（山鹿素行）。

近而靜者、恃其險也。遠而挑戰者、欲人之進也。其所居易者、利也。

近クシテ靜ナルハ其險ヲ恃ム也。遠クシテ戰ヲ挑ムハ人ノ進ムヲ欲スル也。其居ルトコロ易ナルハ利スル也。

兩軍が相迫つてゐるにかゝはらず敵が靜まりかへつて動かないのは地の險要を恃んで落付いてゐるのである。彼此の陣地がまだ交戦に適しないほど遠距離であるにもかゝはらず戦を仕掛けてくるのは我を進ましめて之を撃破せんとする手段である。敵軍が險に據らずして攻撃され易い平地（易）を選んで陣を構へてゐるのは、利を以て我を釣り出さうとする計である。

心理學の原理應用である。

衆樹動者、來也。衆草多障者、疑也。

衆樹動クハ來ル也。衆草多ク障スルハ疑ヒ也。

衆木の樹の末梢が動揺するのは敵が深林を潛つて押し寄せるのである。林に處る敵が草を結んで虚巧をしてゐるのは疑兵を設けて我が斥候を錯覺せしめる策である。

敵が草木を利用して來ればそれを逆用して敵の動靜を知る。

鳥起者、伏也。獸駭者、覆也。

鳥、起ツハ伏也。獸、駭クハ覆也。

鳥が俄かに飛び立つのは下に敵の伏兵があるからであり、野獸が駭いて逃げ出すのは敵が我が不意を掩ひ襲はんとして奇兵を放つて山林を潛行するからである。

「起」駭き飛び起つ。「覆」前節に覆索の字あり、覆の邦音フク、この覆は掩ふ意であるから平聲から去聲に變じて邦音フ。張祐、鳥が水平に飛んでゐたが突然上空に向つて飛ぶ、それは下に伏

兵あるを意味する。八幡太郎が大江匡房から兵法を授かり、陸奥征伐にこの句の記憶から敵の伏兵を發見して危く死を免れた史談がある。征韓役に韓將は漢江の對岸に疑兵を張つて逃げたが、加藤清正は船に鳥が群がつてゐるのをみて敵兵がゐないと斷定した。

塵高而銳者、車來也。卑而廣者、徒來也。散而條達者、樵採也。少而往來者、營軍也。

塵高クシテ銳キハ車來ル也。卑クシテ廣キハ徒ノ來ル也。散ジテ條達スルハ樵採也。少クシテ往來スルハ軍ヲ營ム也。

塵が高く浮揚して雲の如く、その塵煙の尖が鋭つて三角形になつてゐるのは敵の主力である戦車隊の來るを察すべく、塵が卑くして廣きは歩兵（徒）の來るしるしである。處々に散り離れて木の條が空に向つて延びてゐる形の塵を見たら敵の炊事部隊が薪を採るために出動してゐると思へ。塵が少く、その間に敵兵が往來してゐる姿が隱見出沒したらそれは斥候であつて、その後には工兵が營舎工作してゐると知れ。

「徒」双人兒は複數の人を示し、走は歩行のことで、歩は歩兵隊である。

辭卑而益備者、進也。辭強而進驅者、退也。

コトバ、イヤシ 辭、卑クシテ益、備フルハ進ム也。辭、強クシテ進ミ驅ルハ退ク也。

軍使の辭令が謙遜でありながら益々守備を嚴にするのは進んで戦ふ覺悟であるから表面に柔懦を装つても、いつ喰ひ付くか知れない油斷のならぬブルドッグである。その反對に口上が強硬傲慢で、突貫しやうとする勢を示すのは、退かうとする心があるから敵を欺瞞する策に過ぎない（彼はもう尾を垂れてゐる。痔せ犬の遠吠えだ）。

戦争には送に使者を送り時と處とを定めて會戦するが軍禮である。奇兵の場合は軍禮を無視することが多いが、正攻には軍使が絶えず往來して敬意を表し又は使命を傳達する。

輕車先出、居其側者、陳也。無約而請和者、謀也。

チ 輕車先ツ出テ其側ニ居ルハ陳スル也。約ナクシテ和ヲ請フハ謀ル也。

兵車を前方に列べて馳突を禦ぎ、敵兵がその車の陰に居るのは陣處を構へてゐるのである。條件を定めた誓約書の提示もしないで、たゞ使者の口頭のみで漠然と媾和を申込むのは油斷させ

て襲はんと謀るのである（又は戰期を弛べて味方の援軍を待つ手段である）。

「輕車」速力を出すために車量を軽くしたものだ。重車は廠車、大車で輜重に用ふ、重は去聲、邦音チユウ（重複の時は平聲、二冬の韻、音チユン、邦音チャウ）。「陳」は下平、動詞で、陣は去聲、名詞であるが同音で相通じ、時としては名詞として兵學又は戰術の意ともなる。「論語」、衛靈公が陳を孔子に問ふ、孔子「禮義のことは學んで知つてゐるが戰爭のことは知らない」といつて明日さつさと衛から去つてしまつた。このことがあつてから儒學の末派は兵學を卑んで學ぶを恥ぢたが、併し孔子の教は戰爭肯定である。たゞ衛は國が小さく人は柔弱で政治は紊れ、かつ燕、齊、晉の強國に挾まれ、黄河と濟水との地形が亡滅を緩うしてゐるに過ぎない。棺桶の中に片脚を入れながら名劍を揮はうといふ靈公の無茶にあきれて孔子は突き放してしまつた。「約」城を割くとか人質を提供するとかの具體的和議契約。

奔走而陳兵車者、期也。半進半退者、誘也。

ツ 奔走シテ兵車ヲ陳ヌルハ期スル也。半バ進ミ半バ退クハ誘フ也。

忙がしさに動き廻つて兵車の列を置き換えてゐるのは何か心に期するところがあつて策戰の

計畫を變更したものであり、進むが如く見せかけて又た退くのは我を誘つて進ましめやうとするのである。

仗而立者、飢也。汲而先飲者、渴也。見利不知進者、勞也。

仗ヂヤウシテ立ツハ飢ウル也。汲ミテ先ヅ飲ムハ渴スル也。利ヲ見テ進ムヲ知ラザルハ勞スル也。

仗（槍戟の類）を杖ツマについて立つてゐるのは飢ゑて下腹に力がないのであり、飲料水を汲みに行つて桶に入れるまでに先づ飲んでゐるのは敵營は水に缺乏してゐるのであり、勝利あるを眼前にしながら追つてこないのは疲勞して進撃の精力を失つてゐるのである。

「仗」を杖と改めて解する者もあるが仗杖は同聲同音で意は通じるが、この本は立人トクニ旁兒ハヤシの仗で解した。杜牧は「一人の動作をみて全軍の情勢は察知し得られる」といつた。

鳥集者、虚也。夜呼者、恐也。軍擾者、將不重也。旌旗動者、亂也。吏怒者、倦也。

鳥集チルハ虚也。夜呼ヤブハ恐ル、也。軍擾ミダルルハ將軍カラザル也。旌旗動クハ亂ル、也。吏怒ルハ倦ム也。

鳥が集つてゐるのは敵營が空虚の證である（盛んに旌旗を立て偽兵を張つても其實は既に逃げたのである）。夜中に高聲で呼び合つてゐるのは夜襲を恐れて安眠もできず神經衰弱に陥つてゐるのである。軍の紀律が擾れ隊伍も整はないのは將に貫祿が重くなく、命令が徹底しないのである。旌旗が動いてやまないのは心が亂れて闘志が固くない徴である。軍吏が怒罵するのは卒が戦に倦んで命を聽かないから激昂してゐるのだ。

「集」はあつまるではない、古文では必らずしも群聚の意を表示しない、木の上にふるとい佳トクニである、ふるといは古き字の鳥を意味し、鳥が木にとまつてゐることで單數でも複數でもいふ。

殺馬肉食者、軍無糧也。懸甌不返其舍者、窮寇也。

馬ヲ殺シ肉食スルハ軍ニ糧ナキ也。甌ウヲ懸ケテ其舍ニ返ラザルハ窮寇也。

馬を屠殺して其肉を食つてゐるのは軍に糧食が盡きたためである。甌（土鍋）を壁や樹の枝などに懸けたまゝで棄て、又は兵舎に返らずして草野に臥しなどしてゐるのは糧食も盡き矢種も盡き窮地に陥つた敵が、やぶれかぶれの態度を取つてゐるのである。

自分とともに戦つてくれる馬まで殺して食ふのはよく／＼糧食に窮した場合である。

諄諄翁翁徐與人言者、失衆也。數賞者、窘也。數罰者、困也。先暴而後畏其衆者、不精之至也。

諄々翁々トシテ徐々ニ人ト言フハ衆ヲ失フ也。數々賞スルハ窘ム也。數々罰スルハ困ム也。先ニ暴ニシテ後ニ其衆ヲ畏ル、ハ不精ノ至リ也。

將帥が叮嚀に言葉を繰返へし、くどくどと部下に語るのは衆の人望を失つたものである（簡單明瞭に號令を下すことの反對に、言葉數多く齒切れが悪い、相談を持ちかけてゐるやうなのは部下が命令を侮つてゐるのだ）。數々賞を與へて懷柔するのは部下の統率に窘んでゐるので、しばしば罰するのも困んでゐるのだ（行詰つてくると賞罰を濫用する）（窘は百計盡き手の出しやうもない。困は精力を消耗して勢の窮つた意）。出陣の始めには嚴格に過ぎて愈々戦争となる時に部下を畏れる如きは軍事に精通せざるも亦甚し。（始めは敵を侮つて謀が周密でなく、後に接戦となるに及んで敵衆を畏れるは兵法に精通しないお話にならぬ將帥であると解してもよし。將軍の命令は直截簡明で、統帥系統が一貫してゐなければならぬ。

來委謝者、欲休息也。兵怒而相迎、久而不合、又不相去、必謹察之。

來リテ委謝スルハ休息セント欲スル也。兵怒リテ相迎へ、久シクシテ合セズ。又相去ラザルハ必ズ謹ミテ之ヲ察セヨ。

敵の軍使が來つて、意氣揚らず詭言などを列べるのは我が攻撃を弛べて一時の休息を得、その間に戦備を充實する狡猾手段である。敵軍が勢ひ猛に我兵を逆寄したにかゝはらず持重して合戦もせず、さりとして退却もしないのは彼れに何かの奇謀あるべきを以て必らず慎重に考察せねばならぬ。

ワシントンにおける日米會談で八ヶ月も外交を引伸ばしておいてその間に米國は英、蘭、濠、重慶を誘つて對日經濟包圍陣を強化した、それを觀破して日本が突然蹶起したのが大東亞戰の起因であつた、かやうな場合にも吳子のいふ「急に撃つて失ふなかれ」の兵法が想起される。

兵非貴益多也、雖無武進、足以併力、料敵取人而已。

兵ハ益々多キヲ貴ブニ非ズ、武進ナシト雖モ以テ力ヲ併スニ足り、敵ヲ料リ人ニ取ル而已。

兵は多ければ多いほど貴といふのではない。又た武進（決死の勇者）なくとも（統馭の法が宜しきを得たならば弱卒でも）力を併せて敵に當るに足る。要は敵の戦闘力を料り、味方の人から材を取つて之を用ふるに在る。

鋭卒なくとも適處に適材を配備し、舉軍一致の體勢を整へたら一戦に堪へる。

夫惟無慮而易敵者、必擒於人。

夫レ惟、慮ナクシテ敵ヲ易ル者ハ必ず人ニ擒ニセラル。

思慮なくして敵を侮る者は必ずその擒となる。

老子、禍は敵を輕んずるより大なるはなし敵を侮れば幾ど吾が操持を失ふ。論語、人に遠大な注意のないものは必ず眼前に憂が迫る。

卒未親附而罰之則不服、不服則難用。

卒未ダ親附セズシテ之レヲ罰セバ服セズ。服セザレバ用ヒ難シ。

兵卒が主將に親附（信賴）しないものを罰すれば（罰が恩に先だつ故に）兵卒は上長に心から

服従しない。服従しないものは實戦に用をなさぬ。

士卒の心を得ることは統制の第一義で、勝敗の決する精神的基礎である、威を以て壓伏せしめて表面だけの服従を強ひるのみでは牛馬も同然である。論語、三軍可奪帥也匹夫不可奪志也。

卒已親附罰而不行、則不可用也。

卒已ニ親附スルモ罰行ハレザレバ用フベカラズ。

士卒が既に主將に親附しても罰が行はれなかつたら彼らは恩に狃れて戦時の用をなさぬ。

將軍が慈愛にのみ偏して秋霜の嚴肅さがなければ部下は役に立たぬ。

故令之以文、齊之以武、是謂必取。

故ニ之レニ令スルニ文ヲ以テシ之レヲ齊フルニ武ヲ以テス。是レヲ必ず取ルトイフ。

故に士卒に令するには文徳を以てし、その紀律を以て整へるには武威を以てする、これを必勝軍といふ。

「取」必ず勝を取るとは在來の解であるが、その解には異議がある。著者の私見では老子に以無

事取天下とあるのは俗にいふ天下を取るのではない、自己の主張を天下に行ふ意であり、孟子の齊伐燕取之は土地占領といふよりは燕を齊の統治の下に置いた、又は服従させたことを意味する。この節の必取とは必らず自己の意思の如く爲し得る意である。孫子に屢々用ひられる「取」及び「待」の字には適當な日本譯も歐譯もない。

令素行以教其民則民服。令不素行以教其民則民不服。令素行、與衆相得也。

令、素ヨリ行ハレ、以テ其民ヲ教フレバ民服ス。令、素ヨリ行ハレズ、以テ其民ヲ教フレバ民服セズ。令、素ヨリ行ハルトハ衆ト相得ル也。

政治法令が平素から正しく行はれた上で、民に軍事教練を施せば民は服従するが、政令が常から行はれず綱紀弛廢した國で、その民に訓練をしても大衆は將官に服隸しない。令が素から行はれてゐるとは（何の意味か）、主將と士卒と法令との三つが相融合して支障のないことである。

「孔子」其身正、不令而行。其身不正、雖令不行。「子夏」君子信而後勞其民、未信則以爲厲己也。

善をすゝめ惡をこらすは將の用なり、故に常に勇士譽の批判能くして、賞功にその淺深輕重をみだるべからざる事（武教全書、賞罰を明にする條目）。

地形第十 TI HSING (Terrain) X.

地形は碁盤のように經度緯度があり、その上に布陣する、野線なき盤上では碁が打てない。

孫子曰地形有通者有挂者有支者有隘者有險者有遠者。

孫子曰、地形ニ通ズル者アリ挂ル者アリ支フル者アリ隘キ者アリ險シキ者アリ遠キ者アリ。

地形には次節に述べる如き、通、挂、支、隘、險、遠の六種ある。

地上には種々の特徴を自然が設けてゐる、それを巧みに利用して勝利を助けるが兵法である。

我可以往彼可以來曰通。通形先居高陽利糧道以戰則利。

我以テ往クベク彼レ以テ來ルベキヲ通トイフ。通形ハ先ツ高陽ニ居テ糧道ヲ利シ、以テ戰ヘバ則チ利アリ。

我軍も往くべく敵も亦た自由に來るべく交通が相互に利便なところを通といふ。通形は先づ高くして陽ひなたに面せる地を占據して糧道の利便を圖つて戦へば有利である。

四通八達の地はわが不利でも有利でもなく、地形としては平凡である。十人並みで美人でも醜婦でもなし、お化粧すればちよつとみられる。

可以往難以返曰挂。挂形者、敵無備出而勝之。敵若有備出而不勝。難以返不利。

以テ往クベク以テ返リ難キヲ挂ツクトイフ。挂形ハ敵ニ備ナケレバ出デ、之ニ勝ツ。敵モシ備アラバ出デ、勝テズ、以テ返リ難クシテ利アラズ。

進出すべきも退却し難き地形を挂といふ（挂とは掛で、引つかゝつてゐるやうに前低く後高き地）。敵に防備がなかつたら出でて勝ち得るが、もし敵に備があつたら出動しても勝てない。勝てなくして退却もできない、不利な形である。

偵察機關が完備してゐない戦争には冒險が附隨する、奇功を樹てた戦は嚴密な基礎打算に缺けてゐるが敵の不意に出で、勝を制する。挂形である轉越に於ける九郎の奇襲がそれであつた。平氏が

後方に備へを設けてゐたら歴史に輝かしい驍將も樹林の露と消えて馬鹿げた向ふ見ずとして後世に嗤はれたであらう。

我出而不利、彼出而不利曰支。支形者、敵雖利我我無出也。引而去之、令敵半出而擊之利。

我出デテ利アラズ、彼出デテ利アラザルヲ支トイフ。支形ハ敵、我ヲ利スト雖、我、出ヅルナカレ。引イテ之ヲ去リ、敵ヲシテ半バ出デシメテ之ヲ擊テバ利アリ。

我先づ出で、は不利であり彼も亦た出で戦へば不利である地形を支といふ（中に沼澤河湖を挟み又は着弾距離の中に在つて雙方の十字火が交叉する原野など）。支形は敵が利を以て我を誘致するとも出でて戦つてはならぬ（かやうな對抗陣には贏よむき兵を餌にして我を釣出して詭計に陥れる策が行はれるものである）。兵を引いてその地を退き、追跡する敵の半數ばかりを危険地帯（たとへば河川、對抗塹壕など）を越えしめて、すかさずそこを撃てば有利である。

川中島の戦がそれであつた。戦を挑んだ方が勞多くして功が少い。武田機山は孫子の不動如山云云の兵語を旗に大書して容易に誘致されなかつたら不識庵の勇智を以てしても寸土をも侵略するこ

とができなかつた。

太平洋には神の打つた二個の碁石がある、比島とハワイとで、これを取つたが有利か、米國にしては放棄したら不利かといふ疑問點であつたが、日米戦でわが國は先づマニラを占據し、大島島に及び、これを據點として米の太平洋沿岸に潜水艦群を放つたから米國の渡洋戰術は破れた。

險形者我先居之、必盈之以待敵。若敵先居之、盈而勿從、不盈而從之。

險形ハ、我先ニ之レニ居リ、必ラズ之レヲ盈テテ以テ敵ヲ待テ。若シ敵先ニ之ニ居テ盈テバ從フ勿レ、盈タズバ之ニ從ヘ。

險形とは巾着のやう、又は瓢箪の中凹のやうなところ（箱根の如き）は、我先にそこを占領して必らず兵力を充實せしめ以て敵を待て。もし敵が我先だつて之に居り、彼の兵力が實ちてゐたらば決して攻撃してはならぬが、武備が缺けてゐたならば之に乗じて攻めかゝれ。

函谷關のやうな險形でも秦が崩壞期に向へば守備に虚を生じて容易に劉邦に奪取された。

險形者我先居之、必居高陽以待敵。若敵先居之、引而去之、勿從也。

險形ハ我先ニ之レニ居ラバ高陽ニ居テ以テ敵ヲ待テ、若シ敵先ニ之レニ居ラバ引キテ之レヲ去リ、從フ勿レ。

險阻の地形は、我先にその地を占據したならば必らず高く南面した位置を確保して敵を待て。反對に我先だつて敵が根據としてゐたならば兵を引いて之を去つて敵に致されて攻めてはならぬ。

險しき地形は守るに便にして攻めるに不利である。

遠形者勢均難以挑戰、戰而不利。

遠形ハ勢均クバ以テ戰ヲ挑ミ難シ、戰ヒテ利アラズ。

彼此兩軍が遠く離れて兵力が優劣なく（均勢を保つてゐる時は）戰を仕掛けにくい。挑戰しても不利である（味方が劣勢な時は尙更ら不利である）。

日米は太平洋に隔てられてゐるから遠形であるが、科學が發達して飛行機、軍艦の速力で地理を短縮した上に、洋中の諸島を占領したから遠形も近形となつた。

凡此六者、地之道也。將之至任、不可不察也。

凡ソ此ノ六ツノ者ハ地ノ道ナリ。將ノ至任察セザルベカラズ。

以上の六つは地形に應じて勝敗の運命が定まる道であり、如何に地形を利用すべきかは將たる者の至大な責任であるから深く考察して慎重に事を處理すべき急所である。

地理の運用は將軍の重大責任である、たゞ兵力の優勢のみで地形の不利を押し切れない、天に道あり、それが天道なら、人に人道あり、地に地道がある、道に逆らつたら負けとなる。

故兵有走者、有弛者、有陷者、有崩者、有亂者、有北者、凡比六者非天地之災、將之過也。

故ニ兵ニ走ル者アリ弛^{ユル}者アリ陷^{オチイ}ル者アリ崩^{クワ}ル者アリ亂ルル者アリ北^{キョク}ル者アリ。凡ソ此ノ六ツノ者ハ天地ノ災ニ非ズ、將ノ過^{アヤマ}チ也。

(地形のみに拘泥して人事を忽^{ゆるがせ}にしてはならない。地形の上に離合集散する兵勢によつて、地形以上に勝敗を左右する力がある) 故に兵には(次節に詳述するやうに)走、弛、陷、(口語はシユアヌ)、崩、亂、北、(口語はベエ)の六つの人事がある。(地形の利を占めてもこの六つに

よつて負けるのは天災地禍ではなくして全く將の人過である。

地形の上に人事が交錯して勝となり敗となる、兵法家にとつて興味^{ツマナシ}の絶頂である。

夫勢均以一撃十曰走。

夫レ勢均^{ヒト}シクシテ一ヲ以テ十ヲ撃ツヲ走トイフ。

兵勢^{ヘイセツ} 兵の素質、訓練。將の智。地形の良否、糧食の多少。武器の鋭鈍及び其性能^{セウネツ} が相均しく(何らの奇策あるに非ずして)一の兵數を以て十倍の敵を撃つ。これは必敗の戦で、これを走と名づける。

何の術數もなく、小をもつて大にぶつつかれば敗走するが當り前である、しかるに猪勇將軍はこの冒險をやつて萬一を僥倖する、愚の標本である。

卒強吏弱曰弛、吏強卒弱曰陷。

卒強クシテ吏弱キヲ弛^シトイヒ、吏強クシテ卒弱キヲ陷^{カン}トイフ。

兵卒の権力が強くして將校の命を用ひないのを弛(軍紀弛廢)といひ、將校の權威が強くして

兵卒が懦弱なものを陥（陥没軍）といふ。

同じ軍人でも日本人が兵役に對する義務感念と白人のそれとは根據がちがふやうだ、米國は無料の世界觀光團を募集するやうなポスターで水兵志願者を誘ひ、港々に女ありと附加へることを忘れない。英國の水兵には共産思想は瀰漫してはゐないがまたちがつた面倒性がある。こゝに某國の話——この國の軍艦は浮き工場である、とは何を意味するか。募兵のポスターを讀んでみ給へ。

「水兵となつたら機械の技術が教はる、しかも無料だ、いや有料だ、授業料なしの給料付きで、除隊後は失業の心配はない、民間工場では高賃銀で君らを熟練工として引張り合ふことを受負ふ」何と！海軍省の失業よけの刻印つきだ。こんな標語を信じて募に應じた失業者たちは除隊後に再失業した、國の工場は政府の保證したやうに海上失業者を容れるだけの懐がなかつた。

水兵生活に入る時に彼等は軍艦を以て徒弟學校と思ひ又は年期奉公だと思ひつめてゐた。限られた艦内生活は視野が廣くない、士官をもつて親方として又は國費で給料を支拂はれてゐる先生とも思つた。

除隊兵が職に就けないでルンペンに墮ちたのをみた現役兵は除隊後の自分の身の上を考へて、これでは約束がちがふと怒り出して大洋の眞中で甲板にあぐらをかいて士官則ち教師の命令を聴かな

かつたから半日は軍艦が立ち往生——浮き往生をした。これはたゞの日の出來事ではなかつた、日本といふ假裝敵國に向つて示威のため大演習をやつてゐる最中の出來事であつた。

高度に工業化した文明國に起るべき、少しも怪む餘地のない理窟的結論である。この秘密に蓋ができません擧がつた時に貴族と富豪との驚きは常軌を逸してしまつた。

逡巡と不平なく上官の命令に服従する精兵でなくして却つて將官から頼んで働いてもらふ孫子のいふ驕子では國の前途は心配で、國防も社會秩序の保持も期待信賴できないと金持ち連は心配したから爲替を投賣して金は外國へ走つた。黄金の逃げ脚の早いこと！霎時にして資本は枯渴し産業危機が叫ばれ、AとFとのクレヂットで辛うじて國の傾覆が支へられた。

日本は戦ひ得ないから戦死の心配はないと保證して南太平洋へ向けられたが、そこに日英戦が始まつた、こんな約束でなかつたと不平を唱へながらビルマ東海岸へきたとき日本の奇襲で二隻の戦艦と、ともに海底へ沈んだ。

大吏怒而不_レ服、遇_レ敵愾而自_レ戰、將不知_レ其能、曰崩。

大吏怒リテ服セズ、敵ニ遇ヒ_テ愾_テ自_ラ戰ヒ、將ソノ能ヲ知ラザルヲ崩トイフ。

部將が激昂して主將の命に服せず。敵に遇へば主將の命を待たず對（主將への面當てに）自ら進んで戦ふ（かやうな猛將は使ひやうによつて役立ものであるが）主將が其才能を知つて用ひないため自暴自棄になつて決戦するこれを崩壊軍と名づける。まるで虎狼を引率して戦つてゐるやうで、見當なしに感情で喰ひ付く。

將弱不嚴、教道不明、吏卒無常、陳兵縱橫曰亂。

將弱クシテ嚴ナラズ、教道明カナラズ、吏卒常ナク、兵ヲ陳スル縱橫ナルヲ亂トイフ。

主將が懦弱で令が嚴に行はれず、訓練法も明かに徹底せず、士官も兵卒も（目先だけで）常法がなく、陣形も縦になり横になつて規律ないのを亂と名づける。

「尉繚子」上に疑令なくば衆、聽を二にせず、動いて疑事なければ衆、志を二にせず。

將不能料敵、以少合衆、以弱擊強、兵無選鋒曰北。

將、敵ヲ料ル能ハズ、少ヲ以テ衆ニ合ヒ、弱ヲ以テ強ヲ擊チ、兵ニ選鋒ナキヲ北トイフ。

主將が敵の戰鬥力の打算を誤り、寡兵を以て衆兵と合戦し、弱きを以て強きを攻撃し、軍の先

鋒に選兵（粒えりの勁卒）が置かれてゐない（から先鋒から敗れて中軍へ雪崩れ込む）。これを敗北すべき兵といふ。

「選鋒」決死戰（拚命死戰）をやる勇卒を前敵（先鋒）に選ぶ。「走、北」この二つの區別に就ては異説多いが、共に算を亂して逃げるにしても、北は敗より打撃の度が強いもので普通は二字をつづけて敗北といふ。

此六者敗之道也、將之至任、不可不察。

コノ六ツハ敗ノ道也、將ノ至任、察セザルベカラズ。

この六つは必敗の道。主將の重大な責任である。慎重に考察せねばならぬ。

「吳子」昔から國家を建設する賢君は、先づ國民を訓練して相親和せしめるが、四つの戒心すべき事項がある。國內に不和なれば決して國外に軍を出してはならぬ。軍隊間に不和があれば征戰の途に上つてはならぬ。陣中に不和があれば戦を中止せねばならぬ。戦争に一致しなかつたら勝を決することはできぬ。昔之圖國家者必先教百姓而親萬民。有四不和、不和於國不可以出軍、不和於軍不可以出陣、不和於陣不可以進戰、不和於戰不可以決勝」内部に大きな缺陷を抱きながら他國を攻

めやうなど身のほど知らずである。肺病患者のマラソン競争だ。

夫地形者兵之助也、料敵制勝、計險阨遠近、上將之道也。

ソレ地形ハ兵ノ助ケ也、敵ヲ料リ勝ヲ制シ、險阨遠近ヲ計ルハ上將ノ道也。

夫れ地形を利用するは兵勢を助ける、敵の虚實を計量して勝機を制め、險隘遠近の地理に基いて軍を布置するのは上將の採るべき第一方策である。

地形は兵の助けであるとも、敵に利用されたらわが軍の破滅である。地形の險を恃んで備へに怠れば、地形の險が却つて敗戦の因となる。

知此而用戰者必勝、不知此而用戰者必敗。

此レヲ知ツテ戰ニ用フル者ハ必ズ勝チ、此ヲ知ツテ戰ニ用ヒザル者ハ必ズ敗ル。

この形と道とを知つて戰に應用する者は必ず勝つ。これを實戰に用ふる法を知らないものは必ず負ける。

必ずといふ強い斷定詞をつかつたほど地形は勝敗を支配する。

故戰道必勝、主曰無戰、必戰可也。戰道不勝、主曰必戰、無戰可也。

故ニ戰道必ズ勝テバ主、戰フナカレト曰フモ必ズ戰ツテ可ナリ。戰道勝タザレバ主、必ズ戰ヘ

ト曰フモ戰フナクシテ可ナリ。

故に作戰の理念において必勝の成算あらば君侯が戰ふなかと命じても、其意に背いて戰つてもよし。戰術の理詰めにおいて勝てないといふ結論に達したならば戰へといふ君命があつても主將は戰つてはならぬ。

張良のパトロンであつた黄石公は次のやうにいふ「出師には主將をして進退の權を専らにせしめ、官廷から拘束的命命を出したら功は立てられぬ。故に帝王は跪いて主將の乗車の轂を推して見送る」。軍中不聞天子詔は孫子以來主將の標語になつてゐるが國體觀念を異にする吾等の耳には妙に響く。

ナポレオンは自負心が強かつただけ、部將に僅かの權能して與へなかつたから一たび敗戦したら收拾の道がつかなかつた。

我國は憲法第十一條によつて君主から將軍を経て士卒に到るまで一貫した戰系が整ひ、參謀總長

軍令部長は至尊に直屬し國防及び用兵に參畫し、内閣官制第七條の、内閣に下附せらるゝ件の外、帷幄上奏を爲し得る制度となつてゐるから、漢代における細柳營に於いて皇帝が入門を拒まれたやうな醜態はない。

故進不求名、退不避罪、惟民是保而利於主國之寶也。

故ニ進ミテ名ヲ求メズ、退キテ罪ヲ避ケズ、タダ民ヲ是レ保ンジテ主ニ利アル。國ノ寶也。

故に主將は戦つても名譽のためでなく、退いても君侯の命に背いた罪を逃避しないで、たゞ民衆の保安を圖り、それが君主にも利福を與へる。かゝる將帥は國寶である。

孫子は、この言を發したのみならず亦た此言の實行者であつた。彼れは吳將となり楚の首府郢を陥れ、齊晉を震撼せしめるほどの希世の功を樹てたが其功を上官である吳員ごんに歸して名を求めなかつたから春秋傳にも孫武の名が載つてゐない。孫子は壽を全うし、吳員は屬鏤（名劍）を賜はつて自殺を強られ、馬革で屍をつゝみ揚子江に投込まれた。孫子は人事においても機を見るに敏であつたか？ 墨子、吳王闔閭は兵を練ること七年、重い甲冑を着け重い武器を提げて一日に三百里を走るといふ精兵を率ゐて注林に陣取り、進んで冥の險隘を越え、楚と柏舉で戦つて之を破り楚の首府を

取つてそこに都を定め、宋、魯の二君を臣從せしめ大に威を振つた。その子夫差ふさの代には北は汶水の濱に陣し齊と艾陵に戦つて大勝し泰山の中に逃げ込ましめるところまで窮追し、東は越を攻め三江五湖に之を破り越王をして會稽山に棲ましめ、九夷まで服從せしめた。吳王夫差は此大勝を機として兵を收め戦歿者の遺族に賞賜し、民衆の擔税を軽くすることを考へず、自ら高ぶり奢に長じ姑蘇に土木の大工事を起し七年かゝつてもまだ竣功しなかつた。越王勾踐は吳の上下相和協しない隙を窺つて兵を以て吳の北郭内に攻め入り、吳の宮殿を陥れ、吳王が宴樂用として造つた大舟を奪つて越に送り、吳はこんな墓ない亡び方をした。これによつても吳を盛ならしめたのも孫子の名なく吳を亡ぼしたのも孫子の責任でない、孫子の出處進退は老子の理想を實行したものである。舊苑荒臺楊柳新、菱歌清唱不勝春、只今惟有西江月、會照吳王宮裏人。李白。

孫子一代の快學であつた伐楚の役は周の敬王十七年から十九年であつたから皇紀一六〇年（西紀前五〇一年）御四代懿德天皇の十年で皇居は大和の輕（曲峽宮）であつた、孔夫子が魯の定公に拔擢されて中都宰となつた年で、孔門十哲の中にも孝行の元締である曾參ソウシヤムは當年五歳の御漢垂れ、徳行家の閔子騫が誕生した歳であつた。

視卒如嬰兒、故可與之赴深谿。視卒如愛子、故可與之俱死。

卒ヲ視ル、嬰兒ノ如シ。故ニ之レト深谿ニ赴クベシ。卒ヲ視ル。愛子ノ如シ。故ニ之レト死ヲ俱ニスベシ。

卒を嬰兒のやうに愛撫する、兵卒は慈父のやうに主將の仁に懐く、ゆるに主將が「斷岸絶壁の上から底知れぬ深谷へ飛込め！」といった惨忍な號令にでも躊躇なく服従する。日頃からわが一子のやうに愛育してあるから彼らは危機に直面すれば勇躍して主將と生死を共にして悔いなき。

『孟子』道にかなつた者は助けが多く、仁義を踏みはずした者には支持者が少い。助けが少いとが極度に達すれば親戚からでさへ見離され、支持者の最も多い者は天下の總てが支持する。天下の總てから支持される仁者が、「親戚でさへ見離す不仁者を攻めるのは勝敗の結果は明かである。だから君子は戦はねばそれまでだが、戦ふからには屹度勝つ」。

厚而不能使、愛而不能令、亂而不能治。譬若驕子、不可用也。

厚クシテ使フ能ハズ、愛シテ令スル能ハズ、亂レテ治ムル能ハズ。譬ハバ驕子ノ若シ。用フベ

カラズ。

恩を厚くするのはいゝが度を過ぎて増長させ、使ふに堪へず。愛し過ぎて號令に服従しない。放漫になつて規律を立てられない。譬へばあまやかして育てただいづ子のやうな氣隨氣儘の兵卒は役に立たない。

塹壕戦で、こゝが破れたら國家は傾くといふ最後の一线を死守すべき兵卒が毎朝鬚を剃り、毎晩トランプで遊び、三度の食事と午後のチータイムに料理の贅澤を列べ、二ヶ月に一回は妻に會ふために歸國する、それが用ひられなければ塹壕を放棄すると徒黨を組んで上官を威迫し、つひに要求全部を容れさせた勇敢な行爲が歐洲大戰にあつた、それを聞いた日本人はその強さに驚嘆した。

讀法第三條「長上の命令は其事の如何を問はず直ちに之れに服従し」抵抗干犯の所爲あるべからざる事。

知吾卒之可以擊、而不知敵之不可擊、勝之半也。知敵之可擊、而不知吾卒之不可以擊、勝之半也。知敵之可擊、知吾卒之可以擊、而不知地形之不可以戰、勝之半也。

吾ガ卒ノ以テ撃ツベキヲ知リテ敵ノ撃ツベカラザルヲ知ラザルハ勝ノ半ナリ。敵ノ撃ツベキヲ知ルモ吾ガ卒ノ以テ撃ツベカラザルヲ知ラザルハ勝ノ半ナリ。敵ノ撃ツベキヲ知リ、吾卒ノ以テ撃ツベキヲ知ルモ地形ノ以テ戦フベカラザルヲ知ラザルハ勝ノ半ナリ。

吾卒が敵を撃つに足るだけの戦闘力が充實してゐることを知つても、敵に撃ち込むべき虚があるや否やを知らずして冒進するものは、勝目五分負け目五分である。その反対に敵の撃つべき機会を捉へても吾卒が果してその戦に堪へ得るかどうかを量り知らないものは、五分五分であるから戦つてみなければ勝敗の豫測はできない。敵の撃つべき弱點を知り、味方の兵が戦ひに堪へられることを知つても、地利が味方に取つて不利なことを知らなかつたら勝敗相半ばし、戦の結果は未知數である。

敵の實力を知るの難事たることは何人も知るが、味方の眞の力を知るが更に難事であるを知らない者が多い。孟子、人には自身の田をすて、他人の田の雜草を取りたがる妙な癖がある。

故知兵者、動而不迷、舉而不窮。故曰、知彼知己、勝乃不殆。知天知地、勝乃可全。

故ニ兵ヲ知ル者ハ動イテ迷ハズ。舉ゲテ窮セズ。故ニ曰ク彼ヲ知リ己ヲ知レバ、勝乃チ殆

カラズ、天ヲ知リ地ヲ知レバ、勝乃チ全カルベシ。

故に兵法を熟知する者は、軍を動かしても迷ふことなく、兵を擧げても窮することはない。故に結論していふ、敵を知り味方を知つたならば勝利は（確保せられて）危げがない。天時地利を知れば完全に勝利を得られる。

Hence the experienced soldier, once in motion, is never bewildered; once he has broken camp, he is never at a loss. Hence the saying: If you know the enemy and know yourself, your victory will not stand in doubt; if you know Heaven and know Earth, you may make your victory complete. (G)

鬼谷子に「己れ自ら知るに始まつて、しかる後に人を知る」「一端から推して他端を知る」「靜かに對象の情勢を揣摩して、そこに我が望みを達成する機會を見出す」と、縦横家の説と兵法家の見とは常に一致する。

人氣のある主將と人氣のない主將とがある。歴史を讀んでも謙信と信玄とは謙信に人氣があり、信玄と信長とは信玄に人氣があり、信長と義元とは信長に人氣がある。次の對抗戦には前者に最員が多い。鎮西八郎對清盛、惡源太對重盛、孫悟空對魔王、諸葛孔明對司馬懿、秀頼對家康、六

國對秦——近代戦争は人氣をつかつて戦鬪に元氣づけるが、古代では餘り人氣を顧慮しなかつた。孫子も中立國の向背を氣にかけて、人氣を利用することは輕視してゐたが、内部の結果を固めることには力を入れた。視卒如嬰兒は易の大有☰☷の象で、一陰が君位に居り、上經に、君心、下に交はれば人の大なるもの、物の大なるもの、みな我が有に歸すべきを誨へる。主將が人心を收攬する手段である。

卒を強くするも弱くするも主將の心にあると孫子は語る。童子が歌つていふ、滄浪の水、清まば以て吾が纓を濯ふべし、滄浪の水、濁らば以て吾が足を濯ふべし」と、孔夫子がこの歌を聞いて弟子を顧みて「お前たち傾聴せよ、澄んだら冠の纓を洗ふ、濁つたら足を洗ふと、清いものを洗はれるのも汚いものを洗はれるのも、みな水自身が招くのだ」と。孟子がその意を敷衍して、人が彼れ自身を侮るから人も侮る、家も破滅すべき要素を自ら造るから他人から毀たれる。國家も自身を伐つから他の兵を招いて自國を伐たしめる」。

鷓冠子は「聖人の道は何を先にする、曰く人を先にする。人の道は何を先にする、曰く兵を先にする」治國の要は道德の次に國防を擧げ、孔夫子は先づ信、次に食、その次に軍備を置いた。

九地第十一 CHEU TI (The nine situations) XI

九地とは諸種の地勢をいふ、地そのもの、持つ素質と軍隊とが融合して人地一如がある。土地を離れて戦争はない、軍艦にも根據地があり、空軍にも飛行基地がある、空軍も海軍も地上戦の延長である。

孫子曰凡用兵之法、有散地、有輕地、有爭地、有交地、有衢地、有重地、有圯地、有圍地、有死地。

孫子曰ク凡ソ用兵ノ法、散地アリ、輕地アリ、爭地アリ、交地アリ、衢地アリ、重地アリ、圯地アリ、圍地アリ、死地アリ。
兵を用ふる法に、次に述べるやうな散、輕、爭、交、衢、重、圯、圍、死の九地がある。

吳子、戦争の上に働きかける大きな力が四つ、第一が精神、第二が地形、第三が機會、第四が兵

力。一人の力が能く百倍の敵に對するのは精神の影響感應であり、第二の地形とは地利によつて一夫當千の勇を發揮することが出来る。

諸侯自戰其地爲散地。

諸侯自ラ其地ニ戰フヲ散地ト爲ス。

諸侯が敵の侵入を受け、自國の領土の上で交戦する。これを散地といふ。

散地とは心が離散して一致團結しないことを意味し、攻守勢を異にし意氣揚らず、衆心が専らでなく。

入人之地而不深者、爲輕地。

人ノ地ニ入りテ深カラザルヲ輕地ト爲ス。

敵の領域に侵入して深く遠く進まざる陣地を輕地と名づける。

輕地は退くに容易な地で士卒は前途を憂ひ故郷を顧みて身軽く逃走しやうとする形である。

我得則利、敵得亦利者、爲爭地。

我レ得レバ利アリ、敵得ルモ亦タ利アル者ヲ爭地ト爲ス。

我先づ占據すれば戦局を有利に導き、敵に取つても同じ利害を持つところを爭地といふ。

争地は彼此相争ふ重要な地點で、散關、函谷關などの險要のみならず三國時代の荊州、益州、現代戦術に於いては軍需品工業都市、金融の中心地なども争地の中に加へられる。

我可以往彼可以來者、爲交地。

我以テ往クベク、彼以テ來ルベキ者ヲ交地ト爲ス。

我も行くべく彼も來るべき平原を交地といふ。

交通には相互に同じ利便ある地形である。魏武帝は交錯とする。彼此の勢力が地上に交錯する意。

諸侯之地三屬、先至而得天下之衆者、爲衢地。

諸侯ノ地三屬シ、先ツ至ラバ天下ノ衆ヲ得ル者ヲ衢地ト爲ス。

敵と我と中立國との三つが接壤してゐる形は先づそこを占據したものが中立國を介して天下の

大衆を味方に引入れ得べきところで、これを衝地と名づける。衝地とは三方へ交通路が分れてゐる地點。この要衝を押へたら敵を制し得られるが奪還され易い。

入_レ人之地_ニ深_ク背_レ城邑_ニ多_ク者_ハ爲_ス重_ク地_{ナリ}。

人ノ地ニ入ルト深ク、城邑ヲ背ニスル多キ者ヲ重地ト爲ス。

敵地に入ること深く遠くして撃破し來つた敵の城邑を多く背後に控へて容易に還り難き地を重地といふ。

重地とは前の輕地に對する稱で輕々しく引退し能はざる形。

行_ハ山林險阻沮澤_ニ凡_ソ難_ク行_ハ之道_{ナリ}者_ハ爲_ス圯_ク地_{ナリ}。

山林、險阻、沮澤、オヨソ行キ難キ道ヲ行ク者ヲ圯地ト爲ス。

山林、險阻、沮澤などすべて行き難き道を行軍するを圯地といふ。圯地とは土が水に浸された意味であつて歩に艱む形である。

「阻、沮」二字ともなやむ形であるが三點水兒の方は水に屬し、左耳刀は山に屬する「圯」音pi

でyiではない、杜祐は沮洳(水のちく／＼したものと)と解す。「圯と圯の別」。提土兒に已は土橋、名詞、音yi、邦音イ、平聲支韻。提土兒に已はやぶる、動詞、音pi、邦音ヒ、去聲、紙の仄韻。圯地はやぶれる形。

敵も惱めば味方も悩む、艱みを化して平坦とする地ならしをするのが兵法である。

所_ニ由_テ入_ル者_ハ隘_ク所_ニ從_テ歸_ル者_ハ迂_ク彼_レ寡_ク可_ク以_テ擊_ツ吾_レ之_レ衆_ヲ者_ハ爲_ス圍_メ地_{ナリ}。

由ツテ入ルトコロハ隘ク、從ツテ歸ルトコロハ迂。彼レ寡クシテ以テ吾ガ衆ヲ擊ツベキヲ圍地ト爲ス。

よつて入るべき口が狭く、よつて引き返へず路は迂回し敵兵は寡くとも地の險に據つて吾が多數に對抗し得られる、敵に取つて有利な形を圍地といふ。圍地とはやゝもすれば包圍される勢の下に置かれた地である。

易の_{三三}蹇_ニに常る厄介な地形である。この卦は坎險を上にし艮山を下にする、蹇とは難を意味する。危険の間に挿まつて出るに出不る(また險隘を前にして進めない象である)。かゝる險難の地に陥つた時は大人(英雄)の果斷によらねば難を救ふことができない。

疾戰則存、不疾戰則亡者、爲死地。

疾ク戰ヘバ存シ、疾ク戰ハザレバ亡ブル者ヲ死地トナス。

思ひ切つて速に戦つたら或は軍の生命を安全にし得られるが、躊躇逡巡して疾く戦はなかつたら、だん／＼不利を重加して軍が全滅に到る形を死地といふ。

死地は否^{三三三}である、天氣升りて降らず地精隆りて升らず、陰陽否塞して交通せず、上經に「否は之れ人に匪ず、君子の貞に利しからず、大往きて小來る」象に「内陰にして外陽、内柔に外剛、小人の道長じ君子の道消す」君子は徳を儉にして難を辟く。「助からない窮境であるが捨身になつて禍を打開する。死中に活を求むる窮策に過ぎぬ。

吳子、戰場は吾が屍を止める地である。死を決したら却つて生きられるが、死を畏れて生の僥倖を願ふ者は却つて殺される。善き將帥は士卒をして水の漏る船中に平然として坐つてゐる心を持たしめ、焼けてくる家の中に安臥してゐるだけの度胸を据ゑしめる。その覺悟があれば智者でも謀で釣ることもできず勇者でも怒つて攻めることができない。そこまで徹底すれば如何な大敵を引受けても大丈夫だ。だから次のやうに結論することができ——軍を指揮するもの、陥り易き弊害とし

て猶豫して進退を決しないのが一ばんいけない。全軍が破滅に突き落されるやうな災^{わざはひ}は、その猶豫逡巡から起る。凡兵戰之場、止屍之地。必死則生、幸生則死。其善將者如坐漏船之中、伏燒屋之下。使智者不及謀、勇者不及怒、受敵可也。故曰用兵之害、猶豫最大。三軍之災、生於狐疑。

近代戰術感念は全軍を機械化し、かすり傷をも負はずして敵を全滅せしめやうとするが、そんな旨いことができるであらうか、日本の劍法の奥儀は「己は皮を切られて、相手の骨を切れ」であつた。吳子のは意「己先づ死んで、彼を倒せ」であらう。戰爭は度胸である。命^{いのち}が惜くば始めから戰爭といつた生意氣な大望を起さないが、大砲の尻に隠れて慄^{おそ}ひながら指揮するやうな青白い大將が勝利を占める時代も來らないとは斷言できないが、それは僅かに鼠か蛙を呑む青大將に過ぎない。米英人は餘りに科學に凭^{もた}れ過ぎてゐるやうだ、だから命惜しさに自身を殺すことになりはしないか。特殊潜水艇は艇が人體と、もに敵の戰艦に突込む、こんな戰術は日本以外にない。米英人は野球に適するも實戰には不向きなやうだが、果してどんなものか。日英戰のお手並みは謹んで拜見したところである。

是故散地則無戰。輕地則無止。

是故ニ散地ニハ戦フナカレ。輕地ニハ止マルナカレ。

敵の侵入軍と吾が防禦軍との交戦場が散地である。散地は吾が士卒の闘志が散漫になつてゐるから力争すれば敗れるが故に防備を嚴にして戦つてはならぬ。吾が散地は戦の重地にあり、敵は勢強く且つ速戦を利とするからその鋭鋒を避けて、相手になるな。敵國に侵入して淺き輕地には永く止まつてはならぬ、早く進め。

☵☵の卦象に當る地形で、下經に「往くところなし、往くところあらば夙くして吉なり」とある散地は我に不利であるが、これ以上退却する餘地がない。輕地は進むべき機會があつたらそこを去るがよい、成るべく速いがよい。

争地則無攻、交地則無絶。

争地ニハ攻ムルナカレ、交地ニハ絶ツナカレ。

彼我相争奪する要害の地は、もし敵が我に先だつてそこを占據してゐたならば決して攻めてはならぬ（多大の損害を受ける）。交通便利な地に據る敵に對して其交通路を絶つな（かゝる形で敵の後方聯絡を阻止しても無效果である）。

争地を攻めたら敵の注文にはまる、交地の敵を遮断しても抜け道はいくらもある。

衢地則合、交、重地則掠。

衢地ニハ交ヲ合セ、重地ニハ掠ム。

敵と我と中立國と相接する地點に據つた時は中立國と親交を結び、これと同盟するか又は厚意的中立を守らしむべし、決して敵と結ばしめてはならぬ「深く敵境に進入した重地では、もはや退却しても生還の見込みもないから死を決して戦はねばならぬが、かゝる形で最も關心すべきは軍需品、食糧である。敵地を掠めて倉廩、資源を奪ひ、糧秣を蓄へ軍需品を潤澤にし、士氣を旺盛にし輸送の勞費を省くべし。」

現代の國際法でも中立を守ると守らないとは國家の自由意思である。一九〇七年ヘーグ會議で中立國の權義を定めたが一般にいはれる嚴正中立とか、好意中立とかは國際法の用語にはない。永久的中立とはスイス白耳義の如く列強の締約で取極められたが歐洲大戰でベルギーの中立は國産の硝子よりも脆く破擧された。開戦となれば中立國の向背が大局を覆へし、伊太利、北米が戦の進行中に聯合軍に加はつたため同盟軍慘敗を結果した。中立國の地が兩交戦國に斗入してゐる形は最も戒